

The First Trans-Asian Meeting on Psychological Methods

日本質的心理学会  
第 18 回大会 with ソウル  
プログラム抄録集

**大会テーマ**

2021年  
10/23<sup>土</sup> 国際大会  
10/24<sup>日</sup> 国内大会  
**オンライン開催**

**大会実行委員長**  
伊藤 哲司 (茨城大学)

**共催**  
韓国心理測定評価学会  
ド・スンイ (成均館大学校)

**招待講演**  
The Dialogical Self Theory: Toward  
an extended identity definition  
ヒューバート・ハーマンス  
(イメーヘン・ラートボウト大学)

**使用言語**  
日本語・韓国語・英語

**日韓合同企画**  
**シンポジウム**

- '질적연구에 대한 기본 및 다양한 접근'  
(質的研究に対する基本および多様なアプローチ)
- 障害者、高齢者の心理社会的課題  
: 日韓合同研究の可能性
- 「土地の力」と土着心理学

**日韓若手研究者交流会**

연결과  
응답  
つなぐ、つどい

KOREA

JAPAN

オンライン開催

## 開催のご挨拶

韓国ソウルでの日本質的心理学会開催を目指したのが2020年の第17回大会。コロナ禍でソウル大会は1年延期となりましたが、コロナ禍の収束が見通せないまま、この第18回大会は、「在宅のままで参加できるソウル大会」となりました。そこでタイトルに「in ソウル」ではなく「with ソウル」と付けました。初日の10月23日(土)を国際大会と位置づけ、オンラインで日韓を繋ぎ、韓国心理測定評価学会と共同でいくつかのシンポジウムや若手研究者交流会などを開きます。2日目の24日(日)は国内大会とし、口頭発表を中心に展開します。大会テーマは「つなぐ、つどう(연결과 융합)」。今回文字通り対面で「つどう」ことは叶いませんが、これをきっかけに日韓の質的研究者の交流が大いに始まっていくことが期待されます。なお今回の大会を「The First Trans-Asian Meeting on Psychological Methods」とも命名しており、日韓だけにとどまらないアジアの心理学研究法についてのミーティングの最初のステップにするという共通理解のもとで行われます。日韓両学会長による日韓共同宣言も出されます。コロナ禍が大幅に緩和された後には、対面での日韓交流企画等をつくっていくこともできるでしょう。今までにない画期的な大会になることは間違いありません。ご期待ください!

大会実行委員長 伊藤哲司(茨城大学)

2020년 제 17 회 일본질적심리학회 서울에서 개최하려던 목표가 코로나 팬데믹으로 일본 국내대회로 제한해서 온라인으로 열렸고, 국제대회(서울)는 1년 연기되었습니다. 그러나 계속 코로나 상황이 호전되지 않음에 따라 제 18 회 일본질적심리학회는 「집에 머무르며 참여할 수 있는 서울 대회」로 개최하게 되었습니다. 그래서 대회명을 'in 서울' 이 아닌 'with 서울' 이라고 했습니다. 첫날인 10 월 23 일(토)은 국제대회로 하여 온라인으로 한·일을 연결하여 한국의 한국심리측정평가학회와 공동으로 여러 심포지엄과 젊은 연구자들의 교류회 등이 열리게 되었습니다. 이틀째인 24 일(일)은 일본 국내대회로서 구두 발표를 중심으로 진행합니다. 대회의 주제는 「연결과 융합(つなぐ、つどう)」으로 정했습니다. 이번에는 서로 직접 만나 교류하지 못하고 온라인 상이지만 한·일학회 간의 첫 교류를 계기로 한·일의 질적 연구자의 교류가 활발해질 것이 기대됩니다. 또한 이번 제 18 회 일본질적심리학회의 국제대회를 「The First Trans-Asian Meeting on Psychological Methods」라고 명명하여 한·일에만 국한되지 않는 아시아의 심리학 연구 방법에 대한 첫 번째 단계로 삼는다는 것을 공통의 이해로 하여 행해집니다. 그리고, 한·일 양국의 학회장에 의한 한일공동선언문도 발표됩니다. 코로나 팬데믹 국면이 완화된 이후에는 대면으로 한·일 교류에 대한 기획 등을 다시 만들어 갈 수 있을 것입니다. 지금까지 없었던 획기적인 대회가 될 것이라 믿습니다. 많은 성원을 바랍니다!

대회실행위원장 이토 테츠지(이바라키대학)

## 인사 말씀

한국심리측정평가학회는 한국심리학회 15분과로 2014년 3월 1일 창립되었습니다. 한국심리측정평가학회는 한국 아카데미아에서 심리학 뿐 아니라 사회과학 영역의 방법론 영역에서 리드하는 학회입니다. 한국심리측정평가학회는 질적 및 양적 접근을 포괄하여 심리학 연구의 진일보한 방법을 제공하는 것을 제 1의 목표로 합니다. 이러한 목표를 공유하며 학문적 연마와 이론 구축을 지향하는 심리학자 및 관심 있는 관련분야 학자들과의 교류를 또 하나의 목표로 합니다.

한국심리측정평가학회에서는 학술대회 질적연구 발표, 학술대회 질적연구 워크숍 운영, 학술대회 질적연구 step-by-step 튜토리얼(단계별 지침) 발표 등 질적연구 관련연구 및 학술 활동을 운영해 왔습니다. 한국과 일본 간 질적연구 교류는 2015년부터 시작되었습니다. 2018년부터 국제학술대회 개최를 위한 한국과 일본 간 교류를 시작했고, 2021년 드디어 온라인 한일 국제학술대회를 개최하게 되어 매우 기쁩니다. 앞으로 한일 질적 연구자 간 학문적 교류가 활발하게 진행되기를 바랍니다.

한국심리측정평가학회 한일 국제학술대회 위원장 도승이

韓国心理測定評価学会は、韓国心理学会の15分科として2014年3月1日に創立され、韓国アカデミアの心理学をはじめとする社会科学領域において、方法論の領域でリードしてきました。当学会は、定性的および定量的なアプローチを包括して心理学研究の一步進んだ方法を提供することを第一の目的としています。また、これらの目標を共有し、学問的錬磨と理論構築を志向する心理学者及び、関心のある関連分野の学者たちとの交流も重視しています。

当学会は学術大会において質的研究発表や質的研究のワークショップの運営、質的研究step-by-step チュートリアル（段階別指針）発表など、質的な研究及び学術活動を運営してきました。日本と韓国の間での質的研究の交流は、2015年から始まり、2018年からは国際大会を開催するための日韓交流を開始しました。こうした交流が実り、ついに今年日韓による国際大会をオンラインで開催できることを大変うれしく思っております。これを機に、今後も日韓の質的研究者間で学問的な交流が活発に行われることを願っています。

韓国心理測定評価学会 日韓国際学術大会委員長 都 承 梨 (成均館大学校)

日韓共同宣言  
한일공동선언

1.

日本質的心理学会と韓国心理測定評価学会は、コロナウイルス感染症（COVID19）の大流行の状況の中でオンライン双方向交流の共同学会を準備し開催した。

한국심리측정평가학회와 일본질적심리학회는 코로나바이러스감염증(COVID19)의 대유행 상황 속에서 온라인 쌍방향 교류의 공동학회를 준비하고 개최하였다.

2.

この会議を通して日韓両国の心理学者たちは、研究における方法論の重要性と質的研究がもつ独自の役割に対する認識を深く共有し、大きな学術的成果をあげることができた。

이 회의를 통해 한일양국의 심리학자들은 연구에서 방법론의 중요성과 질적연구가 갖는 독자적인 역할에 대한 인식을 깊이 공유하고 큰 학술적 성과를 이룰 수 있었다.

3.

今回の共同学会は、心理学研究方法に対する両国間研究交流の出発を示しており、特に若い研究者たちの交流の成功は、両国間学術交流の未来に対する大きな希望となった。

이번 공동학회는 심리학 연구 방법에 대한 양국 간 연구교류의 출발을 알렸으며 특히 젊은 연구자들의 성공적인 교류는 양국간 학술 교류의 미래에 대한 큰 희망이 되었다.

4.

両学会の会長は、質的研究を中心に研究交流を深めていくことを共同で宣言する。

양 학회의 회장은 질적연구를 중심으로 연구교류를 심화시켜 갈 것을 공동으로 선언한다.

2021年10月23日

日本質的心理学会 常任理事長 佐藤 達哉

일본질적심리학회 상임이사장 사토 타츠야

2021년 10월 23일

한국심리측정평가학회 회장 장 승민

韓国心理測定評価学会 会長 張 承民

## 1. 大会参加者の方へ（大会概要と大会参加方法）

### 1) 大会概要

大会テーマ：「つなぐ、つどう（연결과 융합）」

第18回大会ウェブサイト：<http://www.shitsushin18.jp/index.html>

会期：2021年10月23日（土）～10月24日（日）

方法：オンライン開催

第1日目（10月23日）：国際大会

第2日目（10月24日）：国内大会

### 2) 大会参加登録

参加登録期間：2021年7月1日（木）～2021年10月22日（金）17:00（大会前日まで）

参加費：一般会員 5,000円

学生会員 2,000円

非会員 8,000円

学部学生・研究生等 1,000円

（後ほど学生証コピーまたは所属証明書の送付が必要となります）

- ・大会開始後の参加登録はできませんので、必ず事前の参加登録をお願い致します。
- ・参加登録期間に学会入会の手続きをされている方は、参加費が会員の金額となります。入会をご検討されている方は、エントリー前に入会手続きをされることをお勧めいたします。

参加登録の流れ：

- ・大会ウェブサイトの「Peatix 登録フォーム」に必要事項を入力し、参加登録を行ってください。参加登録時の重要事項や注意事項は、大会ウェブサイトの参加登録ページに記載されていますので、参加登録ページに記載されていることを必ずお読みください。

大会ウェブサイト（参加登録ページ）：<http://www.shitsushin18.jp/registration.html>

### 3) 事前準備

- ・ 本大会では、ほとんどのセッション（研究発表、招待講演、各種シンポジウム）がビデオ会議システムの Zoom を用いて行われます。
- ・ ご参加のみなさまは、事前に使用環境をご確認ください。環境によってはアプリの最新版のインストールが必要な場合があります。

Zoom テスト用ウェブページ (<https://zoom.us/test>)

- ・ 大会事務局から大会 3 日前および大会前日夜に、「Web 開催サイト」のパスワードを Peatix に登録いただいたメールアドレスにお送りします。Peatix に登録いただいているメールアドレスを事前にご確認ください。
- ・ それぞれの企画には、「Web 開催サイト」を通して参加いただくこととなります。「Web 開催サイト」には、各企画が実施される Zoom Room にアクセスするためのボタン（ZoomURL）を設置します。「Web 開催サイト」のパスワードや ZoomURL の情報を大会参加者以外の方には伝えないでください。

Web 開催サイト URL

<https://www.shitsushin18-web.jp/>

### 4) 当日の参加手続き

- ・ 送られてきたパスワードを用いて、大会ウェブサイトの「Web 開催サイト」にアクセスし、参加する企画の Zoom Room のボタン（1 日目は Room1~4、2 日目は Room1~5 のいずれか）をクリックしてご参加ください。
- ・ マイクとカメラが正しく作動するかの事前確認をお願いいたします。Zoom の画面左下のマイクのマーク右側の矢印マークから、「スピーカー&マイクのテストをする」を選びますと、正しく作動するかテストすることができます。また、同じく矢印マークから表示される「オーディオ設定」で最適な音声になるよう適宜調整をお願いいたします。
- ・ 大会に参加される際は、Zoom 起動時に、事前に申し込みをされたときの「氏名\_所属」の英語表記にてご参加ください。Zoom が起動してから、変更をいただく方法でもさしつかえありません。名称から参加者が推定できず、ご連絡をとって確認が取れない場合には、Zoom から退室をいただく可能性があります。

氏名\_所属の表記例) Sato Tatsuya\_Ritsumeikan University

- ・ セッション中は、マイク「オフ」の状態での聴講をお願いいたします（聴講時のカメラは「オン」でも「オフ」でもさしつかえありません）。質疑応答などで発言の際は、マイクおよびカメラを「オン」にすることを忘れにないように注意ください。
- ・ Zoom の操作については、「大会ウェブサイト（冒頭に記載の第 18 回大会ウェブサイト）」内の「Zoom マニュアル」を参照ください。

## 5) 注意事項

- ・ オンラインでの参加・発表においてトラブル等が生じた場合は、日本質的心理学会および大会実行委員会はその責任を負いません。特に、プレゼンテーションにおける著作権、肖像権、個人情報等の取扱いについては十分にご注意ください。
- ・ オンラインでの参加・発表に際し、日本質的心理学会および大会実行委員会は、コンピュータの操作、インターネット接続、映像・音声等のトラブルについての対応は致しかねます。
- ・ 状況等によっては、オンラインでの発表の中止（座長による中止の判断等も含む）がなされる場合があります。
- ・ オンラインでの参加・発表に要する通信料等は、各自の負担とします。
- ・ 大会の Zoom におけるあらゆる録音・録画は禁止します。ただし、例外として招待講演のみ大会準備委員会により録音録画がされます。ご了承ください。

## 6) 懇親会（日韓親睦交流会）

大会 1 日目（10/23）18 時 30 分より行われます。時間になりましたら、「Web 開催サイト」にて「懇親会」の部屋（Zoom Room 4）のボタンにアクセスください。前半は、Zoom を用いて、それぞれの関係者の方からのご挨拶や参加者の方からの感想をいただきながら交流します。後半は SpatialChat を用いて進めます。日本語・韓国語・英語、どの言語でも交流ができるよう、複数の部屋をつくって行います。日韓交流の機会になればと思いますので、当日は好きなお飲み物等を用意して、ぜひ気軽にご参加ください。

# 大会プログラム (日本語版)

1日目(10月23日・土): 国際大会

|             | Zoom Room1  | Zoom Room2  | Zoom Room3  | Zoom Room4 |
|-------------|---|---|---|------------|
| 8:30-8:45   | オープニングセレモニー   |   |   |            |
|             | 準備  | 準備  | 準備  |            |
| 9:00-11:00  | [SO-1] 大会企画シンポジウム(英)  | [S-1] 会員企画シンポジウム(韓・日)                                   | [S-2] 会員企画シンポ(韓・日)  |            |
|             | The basics and various approaches to qualitative research methods (質的研究に対する基本及び多様なアプローチ) (企画代表:ド・スンイ) | 友人間葛藤の文化的特徴に関する日中中学生の比較研究:彼らは危機にどのように対処するか?(企画代表:山本登志哉) | 在日コリアンのための心理社会的支援に求められているものは何か?:Respectful racial counseling & community workの試み (企画代表:朴希沙)   |            |
|             | ド・スンイ、チョン・スンウン、オ・ヨンジェ、イ・インシル、チャ・ジヨン   | 山本登志哉、姜英敏、金仙美   | 朴希沙、丸一俊介、朴利明  |            |
|             | 準備  | 準備  | 準備  |            |
| 11:15-13:15 | [SO-2] 大会企画シンポジウム(韓・日)  | [SO-3] 大会企画シンポジウム(韓・日)                                  | [S-3] 会員企画シンポジウム(英)   |            |
|             | 障害者、高齢者の心理社会的課題:日韓合同研究の可能性 (企画代表:田垣正晋)  | 「土地の力」と土着心理学 (企画代表:伊藤哲司)                                | "Ibasho", cultural identity, and mental health of people with multicultural backgrounds (多文化背景をもつ人々の「居場所」、文化的アイデンティティ、メンタルヘルスをめぐって) (企画代表:鈴木一代) |            |
|             | 田垣正晋、金春男、李炳化  | 伊藤哲司、呉宣兎、村本邦子、韓圭錫                                       | 鈴木一代、石橋道子、鈴木ゆみ、新田文輝   |            |

|             | Zoom Room1   | Zoom Room2  | Zoom Room3   | Zoom Room 4       |
|-------------|--|---|--|-------------------|
| 13:15-14:00 | 協賛出版社トーク   | 昼休憩／準備  | 昼休憩／準備   |                   |
| 14:00-16:00 | [M-1] 日韓若手交流セッション1(韓・日)  | [S-4] 会員企画シンポジウム(韓・日)   | [S-5] 会員企画シンポジウム(日)                                |                   |
|             | 土元哲平、金智慧、小松藍生、杉浦彰子、神崎真実、福山未智、ハン・ジュヨン、キム・イジュン、イ・ユニ、パク・チョル、パク・ギョンリョン | ビジュアル・ナラティヴー多様性、想像力、可能性（企画代表：家島明彦）  | フィールドでの経験と研究—その関係性や葛藤、わたしたちはそこで何を見つけるのか（企画代表：土倉英志） |                   |
|             |  | 家島明彦、横山草介、やまだようこ、張暁紅、呉宣兎、盧映林  | 土倉英志、青木美和子、南部美砂子、沖潮満里子                             |                   |
|             | 準備   | 準備  | 準備   |                   |
| 16:15-18:15 | [M-2] 日韓若手交流セッション2(韓・日)  | [L-1] 大会企画招待講演(英)   | [SA-1] 委員会企画シンポジウム(日)                              |                   |
|             | ハン・ジュヨン、キム・イジュン、イ・ユニ、パク・チョル、パク・ギョンリョン、土元哲平、金智慧、小松藍生、杉浦彰子、神崎真実、福山未智 | The dialogical self theory: Toward an extended identity definition (対話的自己理論—アイデンティティの定義の拡張に向けて) | 質的研究を社会で活かす—産・学・官連携でつなぐ、つどう（企画代表：日高友郎）             |                   |
|             |  | ヒューバート・ハーマンス(H.Hermans) (司会：能智正博)   | 日高友郎、杉山高志、宮下太陽、サトウタツヤ、矢守克也、文野洋                     |                   |
|             |  |   |  | 準備                |
| 18:30       |  |   |  | 日韓親睦交流会・共同宣言（懇親会） |

2日目(10月24日・日): 国内大会

|             | Zoom Room1   | Zoom Room2                        | Zoom Room3                                | Zoom Room4   | Zoom Room5   |
|-------------|--|-----------------------------------|---|--|--|
| 8:30-10:30  | <b>A1 口頭発表</b>   | <b>A2 口頭発表</b>                    | <b>A3 口頭発表</b>                            | <b>[SA-2] 委員会企画シンポジウム</b>  | <b>[S-6] 会員企画シンポジウム</b>  |
|             | 大会賞選考セッション<br>座長:尾見康博                                      | 一般セッション<br>座長:石井宏祐、鴨澤小織           | 一般セッション<br>座長:矢守克也、保坂裕子                   | オンラインで広がる現場(フィールド)と私たちのアクチュアリティー<br>ー新しい時代の公共圏をつくる<br>コミュニケーションー<br>(企画代表:小澤伊久美) | 「プロセス」の再考:複線径路等<br>至性アプローチと展結・結晶化<br>(企画代表:サトウタツヤ)             |
|             | 李佳祺・他、太齋慧、<br>杉浦彰子・他、和智遥香、<br>土元哲平・他、大山星馬                  | 濱谷雅子、石井宏祐、土井裕貴、<br>松原悠・他、鴨澤小織、小泉誠 | 佐野香織、矢守克也・他、<br>中野元太・他、李勇昕・他、<br>保坂裕子     | 小澤伊久美、蒲生諒太、<br>原田奈穂子、カルダー 淑子、<br>岡本仁宏、平川秀幸                                       | サトウタツヤ、神崎真実、<br>福山未智、堀江貴久子、森直久、<br>川野健治                        |
|             | 準備   | 準備                                | 準備  | 準備   | 準備   |
| 10:45-12:45 | <b>B1 口頭発表</b>   | <b>B2 口頭発表</b>                    | <b>B3 口頭発表</b>                            | <b>[S-7] 会員企画シンポジウム</b>  | <b>[S-8] 会員企画シンポジウム</b>  |
|             | 大会賞選考セッション<br>座長:安田裕子                                      | 一般セッション<br>座長:浅井亜紀子、松熊亮           | 一般セッション<br>座長:勝谷紀子、竹下浩                    | 集会的トラウマを正しく理解する<br>ためのレッスン<br>(企画代表:宮前良平)  | 遊びの中の社会参加/社会参加<br>の中の遊びーデザイン/実践を<br>どう記述/分析するかー<br>(企画代表:石田喜美) |
|             | 駒澤真由美、杉山高志・他<br>古賀佳樹・他、進藤あおい・他、<br>若子静保、<br>グエン ティ テャック ガン | 浅井亜紀子、姜悦、加藤誠也、<br>松熊亮、五十嵐篤・他、田坂逸朗 | 勝谷紀子、竹下浩、菅生聖子、<br>東菜摘子・他、生田邦紘・他、<br>司城紀代美 | 宮前良平、大門大朗、高原耕平   | 石田喜美、岡部大介、李勇昕、<br>青山征彦、五十嵐梨々花、<br>秋谷直矩                         |
|             |  |                                   |   |  |  |
| 13:00-14:00 | 日本質的心理学会 会員総会<br>(他のZoom roomが設定されます。学会員の方へは別途の案内が届く予定です。) |                                   |   |  |  |

|             | Zoom Room1  | Zoom Room2                                   | Zoom Room3   | Zoom Room4   | Zoom Room5   |
|-------------|---|--|--|--|--|
|             | 準備  | 準備   | 準備   | 準備   | 準備   |
| 14:15-16:15 | C1 口頭発表   | C2 口頭発表                                      | 【SA-3】委員会企画シンポジウム  | 【S-9】会員企画シンポジウム  | 【S-10】会員企画シンポジウム   |
|             | 一般セッション<br>座長:東村知子、鰐坂誠之                                   | 一般セッション<br>座長:横山草介、石井俊行                      | 「つながりの実感」を考える<br>(企画代表:高梨克也)                                 | 言説分析と社会的課題—三人三様よみ比べ(3)<br>(企画代表:岡部大祐)                    | 障害概念の脱構築を脱構築する<br>(企画代表:楠見友輔)                                |
|             | 園部友里恵・他、池田友美・他、<br>鰐坂誠之・他、松原未季、<br>東村知子、石井佳世・他、<br>星野充美・他 | 横山草介、石井俊行、金城総、<br>松尾純子、和田美香、白柿綾              | 高梨克也、中川敦、村上靖彦、<br>村上正行・浦田悠                                   | 岡部大祐、川野健治、<br>八ツ塚一郎                                      | 楠見友輔、石渡美穂子、<br>角南なおみ、石黒広昭                                    |
|             | 準備  | 準備   | 準備   | 準備   | 準備   |
| 16:30-18:30 | D1 口頭発表   | D2 口頭発表                                      | 【S-11】会員企画シンポジウム   | 【S-12】会員企画シンポジウム   | 【S-13】会員企画シンポジウム   |
|             | 一般セッション<br>座長:川野健治、伊藤翼斗                                   | 一般セッション<br>座長:高見仁志、山田美穂                      | 「ザ・バクデルテスト」をパフォー<br>マンスする—インプロとジェン<br>ダーの探究—<br>(企画代表:園部友里恵) | 1人と出会って研究する:単一事<br>例縦断研究で見えること/見え<br>ないこと<br>(企画代表:神崎真実) | 資本主義とポスト資本主義の境<br>界領域を探る:政策、美的科学、<br>政治哲学のあいだ<br>(企画代表:香川秀太) |
|             | 河村裕樹・他、伊藤翼斗・他、<br>藤杏子、宮原資英、松藤遥香・他、<br>川野健治、阿部廣二・他         | 横山愛、高見仁志、清田顕子、<br>山田美穂・他、小嶋佑介・他、<br>竹田琢、宗像晋路 | 園部友里恵、直井玲子、<br>菅田真理子、中込裕美、<br>中村真季子、堀光希、飯田正人、<br>石田喜美        | 神崎真実、町田奈緒士、<br>日高友郎、やまだようこ                               | 香川秀太、宮本匠、山口洋典、<br>大石尚子、日比野愛子、無藤隆                             |
|             | 準備  |  |  |  |  |
| 18:45       | クロージングセレモニー   |  |  |  |  |

Program (English version) (in UTC+9 time zone)

**Day 1 (Saturday, October 23rd, 2021)** ※OC: Organizing committee, AC: Association committee: Committee in Japanese Association of Qualitative Psychology

|             | Zoom Room1  | Zoom Room2  | Zoom Room3  | Zoom Room4 |
|-------------|---|---|---|------------|
| 8:30-8:45   | <b>Opening Ceremony</b>   |   |   |            |
|             | preparation   | preparation   | preparation   |            |
| 9:00-11:00  | <b>[SO-1] Symposium</b><br>(organized by OC) (English)  | <b>[S-1] Symposium</b><br>(Korean and Japanese)   | <b>[S-2] Symposium</b><br>(Korean and Japanese)   |            |
|             | The basics and various approaches to qualitative research methods<br><Organizer: Seung Lee Do>  | A comparative study of Japanese and Chinese junior high school students on the cultural characteristics of peer conflict<br><Organizer:Yamamoto, Toshiya> | Psychosocial Support for Korean Japanese Minorities<br>An Approach toward Respectful Racial Counseling & Community Work<br><Organizer: Kisa Park> |            |
|             | Seung Lee Do;<br>Seung Eun Chung; Younae Oh;<br>Insil Lee; Chiyoung Cha   | Yamamoto, Toshiya;<br>Jang, Yingmin; Kim, Sunmi   | Kisa Park; Shunsuke Maruichi;<br>Rimyong Park   |            |
|             | preparation   | preparation   | preparation   |            |
| 11:15-13:15 | <b>[SO-2] Symposium</b> (organized by OC) (Korean and Japanese)   | <b>[SO-3] Symposium</b> (organized by OC) (Korean and Japanese)   | <b>[S-3] Symposium</b><br>(English)   |            |
|             | Possibility of joint research on psychosocial issues of the disabled and the elderly in Japan and Korea<br><Organizer: Masakuni Tagaki> | "The power of the land" and indigenous psychology<br><Organizer: ITO Tetsuji>   | "Ibasho", cultural identity, and mental health of people with multicultural backgrounds<br><Organizer: Suzuki, Kazuyo>                            |            |
|             | Masakuni Tagaki; Chunnam Kim;<br>Byunghwa Lee   | ITO Tetsuji; OH Sun Ah;<br>MURAMOTO Kuniko;<br>HAN Gyuseog  | Suzuki, Kazuyo;<br>Ishibashi, Michiko; Suzuki, Yumi;<br>Suzuki, Kazuyo; Nitta, Fumiteru   |            |

|             | Zoom Room1   | Zoom Room2   | Zoom Room3  | Zoom Room 4                                  |
|-------------|--|--|---|--|
| 13:15-14:00 | <b>Publishers talk</b>   | Lunch break/ Prepatation   | Lunch break/ Preparation  |  |
| 14:00-16:00 | <b>[M-1] Japan-Korea Young Researchers Meeting 1</b> (organized by OC) (Korean and Japanese)   | <b>[S-4] Symposium</b> (Korean and Japanese)   | <b>[S-5] Symposium</b> (Japanese)   |  |
|             | Connecting People, Linking Knowledge and Relationships   | Visual Narrative: Diversity, Imagination and Possibilities<br><Organizer: Akihiko Ieshima> | On unintended changes that occur in field research: What do informants and researchers experience in field research?<br><Organizer: Eiji, Tsuchikura>                           |  |
|             | Tepei Tsuchimoto; Jihye Kim; Aoi Komatsu; Sugiura Shoko; Mami Kanzaki; Misato Fukuyama; Juyeon Han; Yijun Kim; Yuni Eeh; Cheolwoo Park; Kay Park | Akihiko Ieshima; Sosuke Yokoyama; Yoko Yamada; Xiaohong Zhang; Sunah Oh; Younglim Noh      | Eiji, Tsuchikura; Miwako, Aoki; Misako, Nambu; Mariko, Okishio  |  |
|             | preparation  | preparation  | preparation   |  |
| 16:15-18:15 | <b>[M-2] Japan-Korea Young Researchers Meeting 2</b> (organized by OC) (Korean and Japanese)   | <b>[L-1] Invited Lecture</b> (English)   | <b>[SA-1] Symposium</b> (organized by AC) (Japanese)  |  |
|             | Connecting People, Linking Knowledge and Relationships   | The dialogical self theory: Toward an extended identity definition                         | Utilizing qualitative research in society: the connection and assembly of knowledge in industry-government-academia collaborative research project<br><Organizer: Tomoo Hidaka> |  |
|             | Juyeon Han; Yijun Kim; Yuni Eeh; Cheolwoo Park; Kay Park; Tepei Tsuchimoto; Jihye Kim; Aoi Komatsu; Sugiura Shoko; Mami Kanzaki; Misato Fukuyama | H.Hermans (Moderator: Masahiro Nochi)  | Yoh Fumino; Taiyo Miyashita; Takashi Sugiyama; Tomoo Hidaka; Tatsuya Sato; Katsuya Yamori   |  |
|             |  |  | preparation   |  |
| 18:30       |  |  |   | <b>Social Gathering/<br/>Joint Statement</b> |

**Day 2 (Sunday, October 24th, 2021) ※All presentations will be conducted in Japanese in Day 2 ※AC: organized by Association committee**

|             | Zoom Room1  | Zoom Room2  | Zoom Room3  | Zoom Room4  | Zoom Room5   |
|-------------|---|---|---|---|--|
| 8:30-10:30  | <b>[A1] Oral presentations</b>  | <b>[A2] Oral presentations</b>  | <b>[A3] Oral presentations</b>  | <b>[SA-2] Symposium (AC)</b>  | <b>[S-6] Symposium</b>   |
|             | Session for Award selection<br>(Chair: Yasuhiro Omi)  | (Chair: Kosuke ISHII, Saori Kamozaawa)  | (Chair: Katsuya Yamori, Yuko HOSAKA)  | The Field Expanded Online and Our Actuality<br>Communication Making the Public Sphere in the New Era<br><Organizer: Ikumi Ozawa>                                  | Reconsideration of process Trajectory Equifinality<br>Approach and transduction/crystallization<br><Organizer: Sato Tatsuya>         |
|             | Li Jiaqi et al.<br>DAZAI Kei<br>Sugiura Shoko et al.<br>Wachi Haruka<br>Teppei Tsuchimoto et al.<br>Seima Oyama                   | Masako Hamatani<br>Kosuke ISHII<br>Yuki DOI<br>Matsubara Yu et al.<br>Saori Kamozaawa<br>Makoto Koizumi | Kaori SANO<br>Katsuya Yamori et al.<br>NAKANO, Genta et al.<br>Fuhsing LEE et al.<br>Yuko HOSAKA                    | Ikumi Ozawa; Ryota Gamo;<br>Toshiko Calder;<br>Nahoko Harada;<br>Masahiro Okamoto;<br>Hideyuki Hirakawa   | Sato Tatsuya; Kanzaki Mami;<br>Fukuyama Misato;<br>Horie Kikuko; Mori Naohisa;<br>Kawano Kenji                                       |
|             | preparation   | preparation   | preparation   | preparation   | preparation  |
| 10:45-12:45 | <b>[B1] Oral presentations</b>  | <b>[B2] Oral presentations</b>  | <b>[B3] Oral presentations</b>  | <b>[S-7] Symposium</b>  | <b>[S-8] Symposium</b>   |
|             | Session for Award selection<br>(Chair: Yuko Yasuda)   | (Chair: Akiko Asai, Matsukuma Ryo)  | General Session<br>(Chair: Katsuya Noriko, Hiroshi Takeshita)   | A Lesson in Properly Understanding Collective Trauma<br>A new perspective on trauma theory from the viewpoint of collective trauma<br><Organizer: Ryohei Miyamae> | Social Participation in Play/ Play in Social Participation<br>Design, Practice, Description and Research<br><Organizer: Kimi Ishida> |
|             | Mayumi Komazawa<br>Takashi Sugiyama et al.<br>Yoshiki Koga et al.<br>Shindo Aoi et al.<br>Shizuho Wakako<br>NGUYEN THI THACH NGAN | Akiko Asai<br>Jiang Yue<br>Kato Seiya<br>Matsukuma Ryo<br>Atsushi IKARASHI et al.<br>Tasaka Itsuo       | Katsuya Noriko<br>Hiroshi Takeshita<br>Shoko Sugao<br>Natsuko AZUMA et al.<br>Ikuta Kunihiro et al.<br>SHIJO Kiyomi | Ryohei Miyamae;<br>Hiroaki Daimon;<br>Kohei Takahara  | Kimi Ishida; Daisuke Okabe;<br>Fuhsing Lee;<br>Masahiko Aoyama;<br>Ririka Igarashi;<br>Naonori Akiya                                 |
| 13:00-14:00 | <b>General meeting for Japanese Association of Qualitative Psychology<br/>(Another Zoom room will be opened.)</b>                 |   |   |   |  |

|             | Zoom Room1  | Zoom Room2  | Zoom Room3   | Zoom Room4  | Zoom Room5   |
|-------------|---|---|--|---|--|
|             | preparation   | preparation   | preparation  | preparation   | preparation  |
| 14:15-16:15 | <b>[C1] Oral presentations</b>  | <b>[C2] Oral presentations</b>  | <b>[SA-3] Symposium (AC)</b>   | <b>[S-9] Symposium</b>  | <b>[S-10] Symposium</b>  |
|             | (Chair:Tomoko Higashimura, Ajisaka Shigeyuki)   | (Chair:Yokoyama Sosuke, Toshiyuki Ishii)  | Consider the “sense of connection”<br><Organizer: Katsuya Takanashi>   | Discourse analysis and social problems, the final: Exploring its potentialities through three types of analyses on “banal illness”<br><Organizer: OKABE Daisuke > | Deconstructing the Deconstruction of Disability<br><Organizer: Yusuke Kusumi>  |
|             | Yurie Sonobe et al.<br>Ikeda Tomomi et al.<br>Ajisaka Shigeyuki et al.<br>Miki Matsubara<br>Tomoko Higashimura<br>Kayo ISHII et al.<br>Ami Hoshino et al. | Yokoyama Sosuke<br>Toshiyuki Ishii<br>Osami Kinjyo<br>MATUO Junko<br>Mika Wada<br>Shiragaki Aya                                   | Katsuya Takanashi;<br>Atsushi Nakagawa;<br>Yasuhiko Murakami;<br>Masayuki Murakami and<br>Yu Urata                         | KAWANO Kenji;<br>YATSUZUKA Ichiro;<br>OKABE Daisuke   | Yusuke Kusumi;<br>Naomi Sunami;<br>Mihoko Ishiwatari;<br>Hiroaki Ishiguro  |
|             | preparation   | preparation   | preparation  | preparation   | preparation  |
| 16:30-18:30 | <b>[D1] Oral presentations</b>  | <b>[D2] Oral presentations</b>  | <b>[S-11] Symposium</b>  | <b>[S-12] Symposium</b>   | <b>[S-13] Symposium</b>  |
|             | (Chair:Kenji Kawano, ITO Yokuto)  | (Chair:Hitoshi TAKAMI, Miho Yamada)   | Performing “The Bechdel Test”<br>Inquiry About Improv and Gender<br><Organizer: Yurie Sonobe>                              | Encountering and studying one person<br>What we can recognize/not recognize in a single case longitudinal study<br><Organizer: Mami Kanzaki>                      | Exploring Boundary Zone between Capitalism and Post-Capitalism: Hybridizing Policy, Aesthetic science, and political philosophy<br><Organizer: Shuta Kagawa> |
|             | KAWAMURA Yuki et al.<br>ITO Yokuto et al.<br>FUJI KYOKO<br>Motohide Miyahara<br>Matsufuji Haruka et al.<br>Kenji Kawano<br>Koji Abe et al.                | Megumi Yokoyama<br>Hitoshi TAKAMI<br>Akiko Kiyota<br>Miho Yamada et al.<br>Yusuke Kojima et al.<br>Taku Takeda<br>Shinji Munakata | Yurie Sonobe; Reiko Naoi;<br>Mariko Sugata;<br>Hiromi Nakagome;<br>Makiko Nakamura; Koki Hori;<br>Masato Iida; Kimi Ishida | Mami Kanzaki;<br>Naoto Machida;<br>Hidaka Tomoo; Yoko Yamada  | Shuta Kagawa;<br>Takumi Miyamoto;<br>Hironori Yamaguchi;<br>Naoko Oishi; Aiko Hibino;<br>Takashi Muto  |
|             | preparation   |   |  |   |  |
| 18:45       | <b>Closing Ceremony</b>   |   |  |   |  |

## 口頭発表スケジュール（各発表においては第1著者のみ記載）

A1 口頭発表 10/24 8:30-10:30 Zoom Room 1（座長：尾見康博）

（大会賞選考セッション）

- 李佳祺 女性における化粧行為の選択傾向に関する日中比較研究  
太齋慧 相反する2つの生き方を語る成人期ゲイ男性のアイデンティティ構築  
—ポジショニング理論による2事例の検討—  
杉浦彰子 「川の記憶」の語りを伝承する—災害・地域レジリエンス向上とまちづくり  
に寄与するライフストーリー研究—  
和智遥香 グループにおける関係性攻撃に関する検討—傍観者に着目して——  
土元哲平 複線経路等至性モデリングにおける等至点概念の拡張：  
記号論的動的文化心理学の視座から  
大山星馬 リアリティを問う

A2 口頭発表 10/24 8:30-10:30 Zoom Room 2（座長：石井宏祐、鴨澤小織）

- 濱谷雅子 訪問看護師が訪問介護員との協働を実感していくプロセス  
石井宏祐 自らの気がかりな応答をめぐる臨床心理士の嗜癖的な経験  
土井裕貴 社会福祉専門職へのロールシャッハ・フィードバック・セッションにおける  
自己理解過程  
松原悠 不安定な社会規範のなかでの模索—小規模事業者の新型コロナ対応の語り  
から—  
鴨澤小織 社会貢献活動を目指す女性たちのライフヒストリー—複線経路・等至性  
モデルアプローチによる考察—  
小泉誠 心理療法におけるクライアントとセラピストの体験の「ズレ」：終結期に  
着目したNPCSに基づく心理療法プロセスの質的分析

A3 口頭発表 10/24 8:30-10:30 Zoom Room 3（座長：矢守克也、保坂裕子）

- 佐野香織 「まちのことばをつくる」プロジェクトにおける「まちのことば」  
—自己エスノグラフィーによる分析の試み—  
矢守克也 巣ごもりフィールドワーク—コロナ禍におけるリモート防災実践の現場  
から  
中野元太 アクションリサーチのチェーンド・ビジュアル・エスノグラフィー—防災実践  
の多声的・多角的現実の表現  
李勇昕 COVID-19時代における東日本大震災の復興—茨城県大洗町を例に—  
保坂裕子 「こどもの貧困」をめぐる課題についての発達のワークリサーチ①：  
大阪における『おかえり』の実践から見える具体的課題へのまなざし

B1 口頭発表 10/24 10:45-12:45 Zoom Room 1 (座長：安田裕子)

(大会賞選考セッション)

- 駒澤真由美 精神障害当事者でもある支援者は就労支援をどのように体験しているか  
杉山高志 Days-After の視座を用いたアクションリサーチ  
古賀佳樹 ゲーム依存についての依存・回復モデルの検討 ―ライフライン法を用いたインタビュー調査  
進藤あおい 異なる音韻圏における名乗り方の種類と人間関係構築への影響  
若子静保 障害のある同胞を亡くした「きょうだい」のグリーフを規定するもの  
グエン ティ ベトナム人技能実習生と日本人雇用主との間のコミュニケーションのズレ  
チャック ガン ―相互理解不足をまねく社会的・文化的要因の検討―

B2 口頭発表 10/24 10:45-12:45 Zoom Room 2 (座長：浅井亜紀子、松熊亮)

- 浅井亜紀子 英国におけるフィリピン人看護師の職場と職場外における主観的ウェルビーイング  
姜悦 ソーシャルビジネスに取り組む起業家のライフストーリー―事業立ち上げ意欲の醸成と発展プロセスに着目して―  
加藤誠也 課題への対応や困難の克服に求められる自己変容：省察と意味づけを深める問いかけの考察  
松熊亮 働くことへの理解を中心に据えたプロフェッショナリズムの研究へ  
五十嵐篤 日本人ビジネスパーソンへのグローバル人材へのキャリア発達～Auto-TEM(複線径路等至性モデリング)を用いて～  
田坂逸朗 ワールドカフェの席替えが対話過程に与える影響に関する研究―発話の傾向の変化に着目して

B3 口頭発表 10/24 10:45-12:45 Zoom Room 3 (座長：勝谷紀子、竹下浩)

- 勝谷紀子 「聞こえにくさをかかえて生きる」の変容過程(2)：計量テキスト分析によるインタビューデータの検討  
竹下浩 視覚障害者向けシエマ習得訓練教材の開発  
管生聖子 精神疾患を持つクライアントの主体性を支えるもの  
東菜摘子 心理的虐待を経験した若年成人による経験の意味づけに関する研究  
生田邦紘 特別支援学校の教師は、「障害受容」をどのように用いるか？  
司城紀代美 インクルーシブ保育実践から考える小学校の「交流及び共同学習」

|         |  |
|---------|--|
| C1 口頭発表 | 10/24 14:15-16:15 Zoom Room 1 (座長：東村知子、鱈坂誠之)                                     |
| 園部友里恵   | 子育てにおける「男の子らしさ・女の子らしさ」をめぐる母親の葛藤と対応：<br>子育て SNS の相談トピックの分析と母親へのグループインタビューから       |
| 池田友美    | 発達障害のある子どもを育てている養親家族を対象としたペアレント・<br>トレーニングの特徴を抽出するためのビデオ分析の試み                    |
| 鱈坂誠之    | 文献調査に基づく「試し行動」に関する一考察  |
| 松原未季    | 幼稚園 4 歳児の遊びにおける交渉の発達：対人葛藤場面に焦点を当てて   |
| 東村知子    | 保育実践における価値調整と価値判断の実際   |
| 石井佳世    | 育児困難場面における母親のしつけの構造  |
| 星野充美    | 里親の子育てレジリエンスの探索的検討   |
|         |  |
| C2 口頭発表 | 10/24 14:15-16:15 Zoom Room 2 (座長：横山草介、石井俊行)                                     |
| 横山草介    | ヴィジュアルナラティブの探求における「視覚的な描写」と「言語による<br>記述」との差異の検討                                  |
| 石井俊行    | 一人で生活する高齢透析患者の非透析日における熱中症対策の一考察  |
| 金城総     | ACP(アドバンスケアプランニング)の促進要因と阻害要因についての考察  |
| 松尾純子    | インタビューにおいてインタビューイはどのようにセルフ・ナラティブを<br>語り始めるのか——インタビュアーの「私」の問いが「私たち」の問いに<br>なるプロセス |
| 和田美香    | ひきこもり青年のきょうだいの語りにみるケア体験  |
| 白柿綾     | 複雑性 PTSD に関連した「むずかしい患者」に関するナラティブレビュー   |
|         |  |
| D1 口頭発表 | 10/24 16:30-18:30 Zoom Room 1 (座長：川野健治、伊藤翼斗)                                     |
| 河村裕樹    | 記述のチュートリアル性——精神科症例検討会におけるワークに着目して  |
| 伊藤翼斗    | 研究会の立ち上げと参加を通して質的研究者はどのように熟達したか  |
| 藤杏子     | なぜ人々は「レンタルなんもしない人」に依頼するのか？<br>—成員カテゴリー化装置に着目して—                                  |
| 宮原資英    | エスノグラフィーによるライフサイクルに応じた身体的リテラシーの<br>ニーズ調査——地域に根ざした高齢者スポーツの現場から                    |
| 松藤遥香    | 都筑リビングラボのデザイン  |
| 川野健治    | 自殺を美化するディスコース (2) —文化産物の再現構造分析   |
| 阿部廣二    | 昆虫採集活動のエスノグラフィ：道具利用と主体性の観点から   |

|         |   |
|---------|---|
| D2 口頭発表 | 10/24 16:30-18:30 Zoom Room 2 (座長：高見仁志、山田美穂)                  |
| 横山愛     | 話し手の説明は聞き手によってどのように意味づけられるのか<br>——斉授業における話し手の説明過程に着目して        |
| 高見仁志    | コロナ禍において音楽科教師の実践知は変容するか                                       |
| 清田顕子    | ナラティブ構造分析を用いた第二言語話者の排除とその不快感の探究                               |
| 山田美穂    | ソマティック・エデュケーションを実践する教師の身体知：<br>協働的インタビューとムービング TAE を用いた言語化の試み |
| 小嶋佑介    | 児童の幸福の認識に関わる問題への質的アプローチ                                       |
| 竹田琢     | グループ学習におけるリフレクション活動の方法<br>——開始部に着目した相互行為分析——                  |
| 宗像晋路    | 多様な言語文化的背景を持つ児童と日本人児童の人間関係形成：<br>小学校における特別活動の考察               |

Oral presentations (First author and presentation title)

※Presentations will be conducted in Japanese in Oral presentations session in Day 2

A1 Oral presentations 24<sup>th</sup> Oct, 8:30-10:30 Zoom Room 1

(Session for Award selection Chair : Yasuhiro Omi)

|                   |  |
|-------------------|--|
| Li Jiaqi          | A comparison of Females in preferences of make-up in Japan and China   |
| DAZAI Kei         | Identity construction of adult gay men who narrate two conflicting ways of life—Investigation of two cases by positioning theory—                                    |
| Sugiura Shoko     | Handing down the narratives of "memories of the river": The life story research that contributes to improving disaster / local resilience and community development, |
| Wachi Haruka      | Relational aggression in group: Focusing on bystander  |
| Teppei Tsuchimoto | Developing the Concept of Equifinality Point in Trajectory Equifinality Modeling: From the Perspective of Cultural Psychology of Dynamic Semiosis                    |
| Seima Oyama       | Questioning Reality  |

A2 Oral presentations 24<sup>th</sup> Oct, 8:30-10:30 Zoom Room 2

(Chair : Kosuke ISHII, Saori Kamozaawa)

|                 |   |
|-----------------|---|
| Masako Hamatani | The process by which home visiting nurses experience collaboration with home helpers  |
| Kosuke ISHII    | Addictive experiences when clinical psychologists are concerned about their responses.  |
| Yuki DOI        | Self-understanding process in the Rorschach feedback session on the social welfare professionals  |
| Matsubara Yu    | Struggling in Unstable Social Norms: Small Businesses in COVID-19 Disaster  |
| Saori Kamozaawa | Life story of women aiming for social contribution activities   |
| Makoto Koizumi  | The "gap" between clients' and therapists' experiences in psychotherapy:A qualitative analysis of the psychotherapy process based on NPCS focusing on the termination phase |

A3 Oral presentations 24<sup>th</sup> Oct, 8:30-10:30 Zoom Room 3  
 (Chair : Katsuya Yamori, Yuko HOSAKA)

|                |  |
|----------------|--|
| Kaori SANO     | What is “A language in the city”? : An attempt at analysis through autoethnography                                       |
| Katsuya Yamori | Remote Fieldwork: Doing Fieldwork from Home on Natural Disaster Risk Reduction in the Covid-19 Pandemic                  |
| NAKANO, Genta  | Chained Visual Ethnography of Action Research: Multi-voiced and Multi-angle Reality of Disaster Risk Reduction Practices |
| Fuhsing LEE    | The Community of Recovery Process after COVID-19~Ibaraki Prefecture Oarai Town~  |
| Yuko HOSAKA    | Developmental Work Research on measures against “Child Poverty”<br>①: A case study of “OKAERI” in Osaka                  |

B1 Oral presentations 24<sup>th</sup> Oct, 10:45-12:45 Zoom Room 1  
 (Session for Award Selection Chair : Yuko Yasuda)

|                       |   |
|-----------------------|---|
| Mayumi Komazawa       | How a supporter who also has mental disorder, works as employment support staff?  |
| Takashi Sugiyama      | Action Research Using the Days-After Perspective  |
| Yoshiki Koga          | Exploring the addiction and recovery model about game addiction: An Interview Survey Using the Lifeline Method  |
| Shindo Aoi            | Types of Name Calling in Different Phonological Sphere and Their Effects on Relationship Building   |
| Shizuho Wakako        | Factors of sibling grief after the death of children with special needs   |
| NGUYEN THI THACH NGAN | Communication gap between Vietnamese technical intern trainees and Japanese employers-Examination of social and cultural factors that lead to lack of mutual understanding- |

B2 Oral presentations 24<sup>th</sup> Oct, 10:45-12:45 Zoom Room 2  
 (Chair : Akiko Asai, Matsukuma Ryo)

|                  |   |
|------------------|---|
| Akiko Asai       | Filipino Nurses' Subjective Well-being in Professional and Private Life in the UK   |
| Jiang Yue        | Life story of an entrepreneur working on social business : Focusing on the motivations to start a business and the development process  |
| Kato Seiya       | Self-Transformation required in finding solutions and overcoming difficulties: Questioning to deepen Reflection and Interpretation      |
| Matsukuma Ryo    | Suggesting the study of professionalism developed by understanding the meaning of Working   |
| Atsushi IKARASHI | Career Development of a Japanese Businessperson to become a Global Professional analyzed by Auto-TEM (Trajectory Equifinality Modeling) |
| Tasaka Itsuo     | Research on the impact of "move to other tables" on the dialogue process in the World Café: Focusing on changes in speech tendency      |

B3 Oral presentations 24<sup>th</sup> Oct, 10:45-12:45 Zoom Room 3  
 (Chair : Katsuya Noriko, Hiroshi Takeshita)

|                   |   |
|-------------------|---|
| Katsuya Noriko    | Transformation process of "Living with hearing loss" (2): An examination of interview data using quantitative text analysis |
| Hiroshi Takeshita | Development of schema acquisition training materials for the visually impaired  |
| Shoko Sugao       | Underlying factor of identity in client with mental illness   |
| Natsuko AZUMA     | How young adults who have experienced emotional maltreatment construct the meaning of their experience ?                    |
| Ikuta Kunihiro    | How Do Teachers at Schools for Special Needs Education Use "Disability Acceptance"?   |
| SHIJO Kiyomi      | Implications of Inclusive Preschool Practices for "Exchange and Joint Learning" in Elementary Schools                       |

C1 Oral presentations 24<sup>th</sup> Oct, 14:15-16:15 Zoom Room 1  
 (Chair : Tomoko Higashimura, Ajisaka Shigeyuki)

|                    |   |
|--------------------|---|
| Yurie Sonobe       | How Do Mothers Deal with the Conflicts over "Boyishness/Girlishness" in Child-Rearing?  |
| Ikeda Tomomi       | An attempt of video analysis to extract the characteristics of parent training for adoptive families raising children with developmental disabilities |
| Ajisaka Shigeyuki  | A study on "Limit-Testing Behavior" based on bibliographic research   |
| Miki Matsubara     | The development of negotiations in kindergarten 4-year-old play: focusing on interpersonal conflict situations  |
| Tomoko Higashimura | Value adjustment and value judgment in early childhood education practice   |
| Kayo ISHII         | How do mothers discipline their children when they do not listen to them?   |
| Ami Hoshino        | Parenting Resilience of Foster Parents: An Exploratory Study  |

C2 Oral presentations 24<sup>th</sup> Oct, 14:15-16:15 Zoom Room 2  
 (Chair : Yokoyama Sosuke, Toshiyuki Ishii)

|                 |  |
|-----------------|--|
| Yokoyama Sosuke | Examining the differences between "visual description" and "language description" in visual narrative studies.   |
| Toshiyuki Ishii | Consideration of measures against heat stroke on non-dialysis days of elderly dialysis patients living alone   |
| Osami Kinjyo    | Facilitating Factors and Inhibiting Factors of ACP   |
| MATSUO Junko    | How does an interviewer start telling his/her self-narrative in the interview? —The interview process from the inquiry of the interviewer to the inquiry between the interviewer and interviewee |
| Mika Wada       | The Care Experiences Through Interviews with Siblings of Hikikomori Youth  |
| Shiragaki Aya   | A Narrative Review of Studies on "Difficult Patients" Related to Complex PTSD  |

D1 Oral presentations 24<sup>th</sup> Oct, 16:30-18:30 Zoom Room 1  
 (Chair : Kenji Kawano, ITO Yokuto)

|                   |  |
|-------------------|--|
| KAWAMURA Yuki     | Ethnomethodological findings as tutorial problems: Focusing on Work in Psychiatric Case Study Sessions   |
| ITO Yokuto        | How qualitative researchers have grown through establishing and participating in their own study group   |
| FUJI KYOKO        | Why do people seek help from "a person who do-nothings"? :Membership Categorization Analysis   |
| Motohide Miyahara | Ethnographic Needs Survey on Age-Appropriate Physical Literacy towards the Actualization of Community-Based Lifelong Physical Activity for Senior Citizens |
| Matsufuji Haruka  | Design of Tsuzuki Living Lab   |
| Kenji Kawano      | Discourses that glorify suicide (2) - Representation Structural Analysis of Cultural Products  |
| Koji Abe          | Ethnography of Insect Collecting Activities: From the Perspective of Tool Use and Agency   |

D2 Oral presentations 24<sup>th</sup> Oct, 16:30-18:30 Zoom Room 2  
 (Chair : Hitoshi TAKAMI, Miho Yamada)

|                 |   |
|-----------------|---|
| Megumi Yokoyama | How the listener's opinion means the speaker's explanation?: Focusing on the speaker's explanation process in the whole-class discussions                         |
| Hitoshi TAKAMI  | Transformation of practical knowledge of music teachers during the predicament of COVID-19  |
| Akiko Kiyota    | Using Narrative Structural Analysis to Explore Second Language Speakers' Exclusion and Their Discomfort   |
| Miho Yamada     | Teacher's Embodied Intelligence in Somatic Education: Verbalization using Collaborative Interview and Moving TAE Steps  |
| Yusuke Kojima   | A qualitative study to matters related to children's perception of well-being   |
| Taku Takeda     | The Method of Reflective Activities in a Group Learning: Interaction Analysis Focusing on the Starting Section.   |
| Shinji Munakata | Building Social Relationship among Japanese Children and Culturally and Linguistically Diverse Children: A case study of Tokkatsu at a Japanese Elementary School |

## 2. 口頭発表者の方へ（口頭発表方法）

- ・ 各発表は、発表 12 分、議論 3 分（計 15 分）です。セッションの進行上、時間を厳守いただきますよう、ご協力よろしく願いいたします。
- ・ 発表の際に、お手元のスライドや各種資料を提示される場合は「画面共有」機能をご使用ください。画面共有を終了させる際は、画面上部の「共有の停止」を選択ください。
- ・ セッションが始める前の準備時間中に、マイクやカメラの動作確認、画面共有やプレゼンテーションの確認をお願いいたします。可能でしたら、開始 5 分前には入室をして確認を行ってください。
- ・ セッション中はマイク「オフ」の状態でお待ちいただき、発表・発言の際にはマイク「オン」、カメラ「オン」に変更してください。
- ・ 各セッションで予定されている発表がすべて終了した後は、総合議論の時間とします。それぞれの発表への質疑応答や、各発表に共通する内容や論点についての議論をしていただけます。
- ・ Zoom の操作については、「大会ウェブサイト（冒頭に記載の第 18 回大会ウェブサイト）」内の「Zoom マニュアル」も参照ください。

### 口頭発表の座長を担当される方へ

- ・ 座長の方には、各担当セッションの進行をお願いいたします。
- ・ 各発表は、発表 12 分、議論 3 分（計 15 分）です。各セッションの進行については座長の先生にお任せいたしますが、複数セッションを移動する参加者もいますので、予定の時間をできるだけ超過することのないようにご協力をお願いいたします。予定通りに進行した場合、全登壇者発表後 15～30 分程度の総合議論の時間を設けることができます。それぞれの発表への質疑応答や、各発表に共通する内容や論点についての議論をしていただけます。
- ・ 先のセッションとの間には事前準備の時間をとっていますので、この時間に、他の登壇者にも促しながら、画面共有の確認等を行ってください。可能でしたら、開始 10 分前に入室をして準備をお願いいたします。
- ・ 議論の時間には、Zoom の「手を挙げる」機能、チャットの機能もご活用ください。利用方法（どちらをどのように用いるか等）につきましては、座長の先生にお任せいたします。セッション開始の際に、参加者に利用方法のアナウンスをお願いいたします。
- ・ セッション開始の際には、参加者の方に名前の表記を「氏名\_所属」の英語表記としていただくことを促していただけますようお願いいたします。
- ・ セッションごとに学生アルバイトを配置予定です。Zoom Room のホストの役割と、本部との連絡係を担当いたします。技術的な問題や Zoom 操作方法については答えられない場合がありますが、何かあった折には、学生アルバイトにもお声かけください。

### 3. シンポジウム発表者の方へ（シンポジウム発表方法）

- ・ シンポジウムは、大会企画シンポジウム、委員会企画シンポジウム、会員企画シンポジウムが行われます。
- ・ 開催時間は、プログラムと抄録を参照ください。
- ・ セッション内の進行につきましては、シンポジウムの企画代表者の責任で進行をお願いいたします。予定の時間を超過することのないようにご協力をお願いいたします。（次のセッションの準備に影響します。）もし終了後も議論を行いたい場合は、登壇者の方々に Zoom の部屋を用意いただき、そちらに参加者を誘導してください。
- ・ 各セッションの前に準備の時間をとっていますので、この時間に音声や画面共有の確認等を行ってください。
- ・ Zoom の操作については「大会ウェブサイト(冒頭に記載の第 18 回大会ウェブサイト)」内の「Zoom マニュアル」を参照ください。

上記 1. の 3)～5)、2. 3. の記載にあたっては、以下のウェブサイトを参考にいたしました。

- ・ オンライン学会向け Zoom マニュアルの公開  
<https://redbuller.hatenablog.com/entry/2020/03/28/022605>
- ・ 学会全国大会のオンラインでの試行開催の運用メモ  
<https://cril-shinshu-u.info/archives/1473>

# 抄録集

Abstract book

講演・交流企画・シンポジウム

Lecture, Meeting, and Symposium

[L-1] Invited lecture

Saturday, October 23, 16:15 PM – 18:15 PM UTC+9 Zoom Room 2

## **The dialogical self theory: Toward an extended identity definition**

(対話的自己理論——アイデンティティの定義の拡張に向けて)

(대화적 자기이론——아이덴티티의 정의 확장을 향하여)

Hubert Hermans

Emeritus-professor of psychology at the Radboud University, Nijmegen,

The Netherlands

Abstract

Climate change and the recent corona pandemic are wake-up calls for rethinking the relationship between self and society. This relationship is basic in Dialogical Self Theory (DST) that considers the self as a “society of mind.” Analogous to individuals and groups in contact with each other in the society at large, this theory considers the self as composed of a dynamic multiplicity of I-positions and we-positions that have the potential to become engaged in both dominance and dialogical relationship with each other. A recent development in this Theory is that recent challenges, like climate change and the spread of pandemics, require a conception of the self that is more inclusive than usual in the history of Western psychology. In order to meet these challenges, the Theory distinguishes for levels of inclusiveness, each with their specific identity: the individual, social, human, and ecological levels. In my keynote I will not only distinguish these levels, but also argue that we are in need of a new concept, dialogical flexibility, that enables the self to make back and forth movements among these different levels. We are in need of a conception of the self that is not only focused on people as individuals or group members, but also as members of a nation-transcending humanity and as participants of nature and the earth.

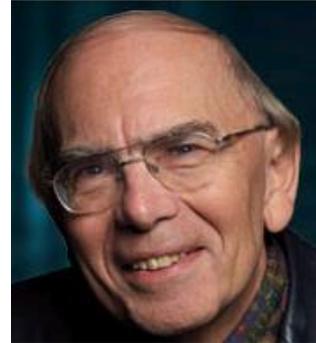
(Language: English)

気候変動と最近のコロナ・パンデミックは、自己と社会の関係を再考するための警鐘と言える。この関係は、自己を「心という社会」と見なす対話的自己理論の土台をなすものである。個人と集団は広い社会のなかで互いに接触しているわけだが、同様に対話的自己理論では、自己を I-ポジションと We-ポジションの多様で動的なまとまりと考えており、そうしたポジションが互いに優勢となったり対話的關係となったりする可能性をもつ。この理論の近年の発展として、気候変動やパンデミックの広がりといった最近の課題が求めているのは、西洋的な心理学の歴史で一般的な自己よりも包括的な自己の概念だということがある。こうした課題に対処するために、対話的自己理論はその包括性のレベルを、それぞれ独特のアイデンティティをもつ、個人、社会、人類、生態系という4レベルに分類する。私の基調講演ではこれらのレベルを区別するにとどまらず、今我々に必要なのは自己がこれらの異なるレベル間を行き来できるようにする新しい考え方、つまり、対話的な柔軟性であると主張する。私たちは、個人やグループ・メンバーとしてだけでなく国を超えた人類の一員として、そして自然と地球の参加者としての人々に焦点を当てた自己概念を必要としているのだ。

기후 변화와 최근의 코로나 팬데믹 상황은 자기 자신과 사회 간의 관계를 되돌아보아야 한다는 경종을 울리고 있다. 자기와 사회 간 관계는 대화적 자기이론(DST: Dialogical Self Theory)의 기초가 된다. 대화적 자기이론에서는 자기를 「마음의 사회」로 간주한다. 사회 전반에서 서로 접촉하는 개인 및 그룹과 유사하게, 이 이론은 자기를 나(I)-포지션들과 우리(we)-포지션들의 역동적인 다양성으로 구성되어 있고, 이 두 포지션은 서로에 대한 우위와 대화적 관계 모두에 관여할 잠재성이 있다고 간주한다. 최근 대화적 자기이론에서는 기후 변화와 팬데믹 상황의 확산과 같은 도전으로 인해 서구심리학에서 역사적으로 제안한 자기보다 더 포괄적인 자기 개념이 필요하다고 제안하고 있다. 이러한 문제를 해결하기 위해 대화적 자기이론(DST)은 4 개의 포괄성 수준을 구별하고 있다. 이 4 개의 수준은 개인, 사회, 인류, 생태 수준으로, 각 수준은 특수한 정체성을 가지고 있다. 이번 기존강연에서 나는 이러한 수준을 구별할 뿐 아니라 새로운 개념인 대화적 유연성이 필요하다고 주장할 것이다. 대화적 유연성으로 인해 자기는 4 개의 포괄성 수준 간을 자유롭게 움직일 수 있다. 우리에게는 개인들이나 집단 구성원들에 초점이 맞춰진 자기뿐 아니라 국가를 초월한 인류의 구성원이자 자연과 지구의 참여자에 초점이 맞춰진 자기의 출현을 필요로 한다.

## Introduction of lecturer

Hubert Hermans  
Emeritus-professor of psychology  
at the Radboud University, Nijmegen,  
The Netherlands



Hubert J.M. Hermans is a Dutch psychologist, internationally known as the creator of dialogical self theory.

He was born in Maastricht, the Netherlands. He studied psychology at the Radboud University Nijmegen, where he became staff member at the psychological laboratory of the same university in 1965. He was a full Professor at the University of Nijmegen from 1980 to 2002.

During his career he has developed several influential methods and theories. One of them is the Dialogical Self Theory that has led to the organization of biennial international conferences, the establishment of the International Society for Dialogical Science.

He has written around 200 publications, mainly on the Self-Confrontation Method and Dialogical Self Theory. Recent books are;

Society in the self: A theory of identity in democracy (2018),

Inner democracy: Empowering the mind against a polarizing society (2020).

[SO-1] Symposium organized by Organizing Committee

Saturday, October 23, 9:00 AM – 11:00 AM UTC+9 Zoom Room 1

## **The Basics and Various Approaches to Qualitative Research Methods**

質的研究に対する基本および多様なアプローチ

Seung Lee Do (Sungkyunkwan University), Moderator/ Organizer

Seung Eun Chung (Korea National University of Transportation), Presenting Author

Younae Oh (Hallym University), Presenting Author

Insil Lee (U1 University), Presenting Author

Chiyoung Cha (Ewha Womans University), Presenting Author

(Language: English)

### **Abstract of symposium**

The Korean Society of Psychological Measurement and Assessment has contributed to the qualitative methodologies areas in Korean academia. This symposium emphasizes the philosophical basics and various approaches of the qualitative research. Researchers will have opportunity to know what has been going on the qualitative research areas and interact with each other academically.

### **Research philosophy, methodology and methods in qualitative research**

*Seung Eun Chung*

The question and the purpose of the research should be in line with the research philosophy, and consistency in research design should be maintained to obtain an answer to any research. Researchers must be able to clearly explain the reason for choosing a specific research philosophy, methodology, and methods within the research they studied. I will explain various philosophical and methodological perspectives in designing qualitative research.

### **Self-Care Experienced by Nurses in Closed Psychiatric Hospitals: “The Bird Fights Its Way Out of the Egg. The Egg is the World”**

*Younjae Oh*

The purpose of this phenomenological study was to understand the lived experiences of self-care among nurses in closed psychiatric hospitals in South Korea. Five main themes emerged from the analysis: struggling to find the therapeutic roles as a psychiatric nurse, confusing professional identity for good nursing, ingering distress resulting from helplessness and hopelessness, realizing the need for caring for oneself, and caring for oneself through interaction with patients.

### **Healthcare-seeking behavior of Korean women with myocardial infarction: a grounded theory study**

*INSIL LEE*

To explore Korean women's experiences at the onset of myocardial infarction and elaborate on the process of seeking treatment. Grounded theory was used for data collection and analysis. Participants' healthcare-seeking behavior for treatment was sequential, iterative, and cognitive. The core category was finding the optimal solution for symptoms. Seven additional categories included experiencing symptoms, attributing symptoms, evaluating the situation, managing symptoms, consulting others about symptoms, obtaining ideal treatment, and maintaining optimal health. Social and cultural factors related to obtaining professional treatment for myocardial infarction should be included in the updated public health literature.

### **Qualitative Synthesis Research in Nursing in South Korea**

*Chiyoung Cha*

The qualitative synthesis that integrates results from other qualitative studies has been gradually increasing in the nursing discipline. Methods used for conducting qualitative synthesis studies in nursing in South Korea were described with examples. Meta-ethnography suggested by Noblit and Hare, synthesis of qualitative research suggested by Sandelowski and Barroso, and the thematic synthesis suggested by Thomas and Harden were introduced. By comparing and contrasting the different stages/steps of qualitative synthesis with examples, unique contributions to each method to advance nursing knowledge are discussed.

[SO-2] Symposium organized by Organizing Committee

Saturday, October 23, 11:15 AM – 13:15 PM UTC+9 Zoom Room 1

## **Possibility of joint research on psychosocial issues of the disabled and the elderly in Japan and Korea**

障害者、高齢者の心理社会的課題：日韓合同研究の可能性

Masakuni Tagaki, Moderator/ Organizer/Presenter/ Discussant (Osaka Prefecture University, Japan)

Chunnam Kim, Presenter (Gyeonggi Welfare Foundation, Republic of Korea),

Byunghwa Lee, Presenter (Gyeonggi Welfare Foundation, Republic of Korea),

(Language: Japanese with Korean translation)

### **Abstract of symposium**

The symposium aims to examine the possibility of joint qualitative research on psychosocial issues of the disabled and elderly in Japan and Korea. Both countries have many commonalities in social and cultural norms and social welfare policies. Examples include aging and declining birth rates, shifting from a medical model to a social model for disability, and family roles as caregivers. The three presenters report qualitative inquiries in each country.

### **Strategic use of disability services and bodily function management as a means to engage with others**

*Masakuni Tagaki*

This study is part of a larger project on disability-related activities and raising the next generation of the disabled community. I conducted semi-structured interviews with people with physical disabilities, aged 40–70 years. They were asked to describe their disability-related activities and relationship with others

with disabilities. The data were qualitatively analyzed. The participants found connections with others through their shared experiences and activities and wished for younger disabled people to succeed them, respecting activities by disabled people themselves. The use of disability services and daily bodily function management were means for them to engage with others, although they could sense dilemmas regarding disability-related experiences.

### **Support of leisure activities of elderly people with mild dementia**

*Chunnam Kim*

This study aims to propose leisure activities to prevent cognitive function deterioration in elderly people with mild dementia. Focus group interviews were conducted with eight participants with mild dementia older than 70 years (one male, seven female) and ten service providers. The interview dealt with the significance of leisure activity programs and required services. The results showed that the daily programs should be operated as a leisure activity. Combining cognitive activities with physical ones was a potential method, respecting the participant's individuality. More effective dementia awareness programs are required for the elderly and for leisure program providers.

### **Status of daily life and support policies for elderly people with disabilities**

*Byunghwa Lee*

This study seeks to propose policy alternatives by identifying the status and needs of people with disabilities aged over 50 years and living in Gyeonggi-do Province. Administrative data were examined to understand the status of the disabled elderly in the area, focusing on gender, disability type, or distribution. Focus group interviews were conducted with 15 people. They aimed to understand the daily life experiences and specific needs of the disabled elderly. Establishment of care services for them and family members and physical and emotional health support were proposed.

[SO-3] Symposium organized by Organizing Committee

Saturday, October 23, 11:15 AM – 13:15 PM UTC+9 Zoom Room 2

## **"The power of the land" and indigenous psychology**

「土地の力」と土着心理学

ITO Tetsuji (Ibaraki University) Moderator/ Organizer

OH Sun Ah (Kyoai Gakuen University) Translator/ Organizer

MURAMOTO Kuniko (Ritsumeikan University) Presenting Author

HAN Gyuseog (Chonnam National University) Presenting Author

(Language: Korean and Japanese)

### **Abstract of symposium**

For the past three years, we have convened a symposium titled, "The land power" as part of the annual conference of the Japanese Society of Qualitative Psychology. The purpose of the symposium has been to discuss the indigenous knowledge and wisdom of local people in different regions, for example, in Tohoku, Osaka, Okinawa, Taiwan, and Vietnam. At this year's symposium, which is being held jointly between Korea and Japan, we will welcome Professor HAN Gyuseog, who has been engaged in research and education in the field of indigenous psychology for many years at Chonnam National University, Korea. Professor HAN will present a talk on the "The power of the land" (or "The power of the earth") from the Korean perspective. At this year's symposium, we would like to explore the concept of "The power of the land" in different regions by facilitating discussions on indigenous psychology. Instead of relying heavily on Western frameworks of psychology, we would like to develop a different approach, one that considers the perspectives and methodologies employed in East Asia, with a focus on those from Korea and Japan. This symposium at the conference, which has the main theme of "Connecting and gathering" will surely open a new frontier in qualitative research.

## **Defining “The power of the land”**

*MURAMOTO Kuniko*

The presenter is a clinical psychologist with more than 30 years of experience in “trauma” research using indispensable ecological perspectives. After repeated visits to the Tohoku region to be a witness to the impacts of the disaster and the reconstruction efforts following the Great East Japan Earthquake in 2011, the idea of "The power of the land" began to attract my interest. Disasters have always been interwoven with human history and people have inherited memories of loss and hardship in the form of culture. Especially for those living in traditional communities that are rooted in the land, the Western psychological assumption that similar stimuli, regardless of time or space, produce similar results misses the point of trauma. Therefore, interventions based on Western trauma models may in fact be harmful. I would therefore like to invite you to explore the potential of qualitative psychology as it relates to "The power of the land".

## **Linking indigenous psychology to qualitative methodology**

*HAN Gyuseog*

The COVID-19 pandemic has prompted numerous psychologists around the world to examine indigenous psychological frameworks and worldviews in greater detail. Psychological science has propagated the Western view of self as being universal, treating humans as supreme beings that are in charge of nature. This view of self tends to inflate the self in terms of its potential, confidence, ego, and self-control, and is largely responsible for nature being treated purely as a resource to be utilized. Juxtaposed against this dominant worldview, are the many indigenous worldviews held by Asian people who consider human beings merely part of a world in which they coexist with others in the eco-system. An alternative model for the human-nature relationship could be based on such indigenous worldviews. Qualitative methodologies are well suited for disclosing indigenous psychology. Investigating the Power of the Earth could facilitate the construction of a new paradigm to replace the current anthropocentric worldview.

[M-1; M-2] Meeting organized by Organizing Committee

Saturday, October 23, 14:00 PM – 16:00 PM UTC+9 Zoom Room 1

Saturday, October 23, 16:15 PM – 18:15 PM UTC+9 Zoom Room 1

## **Japan-Korea Young Researchers Meeting**

Connecting People, Linking Knowledge and Relationships

### **Japanese Member:**

Teppei Tsuchimoto (Research Organization of Open Innovation and Collaboration, Ritsumeikan University)

Jihye Kim (Faculty of Human Sciences , Waseda University)

Aoi Komatsu (After-school daycare AMITIE in Higashinaebo)

Sugiura Shoko (Ibaraki Prefectural Lifelong Learning Center Kennan)

Mami Kanzaki (Ritsumeikan Global Innovation Research Organization, Ritsumeikan University)

Misato Fukuyama (Graduate School of Human Science, Ritsumeikan University)

### **Korean Member:**

Juyeon Han (Sungkyunkwan University)

Yijun Kim (School of Liberal Arts and Sciences, Korea Aerospace University)

Yuni Eeh (LG Display MaumSarang Counseling & Psychotherapy Center)

Cheolwoo Park (University of Florida , Counselor Education on the Marriage and Family Counseling track)

Kay Park (Graduate School of Clinical Counseling Psychology, Cha University)

(Language: Korean and Japanese)

### **Abstract of symposium**

This event is an exchange meeting for young researchers in Japan and Korea to casually discuss qualitative research and connect with each other. University students, graduate students, and young researchers are welcome to join! (Others are also welcome!).

### **Part1: Difficulties and Possibilities of Qualitative Research Methods**

In Part 1, we will engage in an interactive discussion on the difficulties and possibilities of qualitative research methods according to two themes:

- Theme1: Collecting Data through Online (Covid19)
- Theme2: Conducting qualitative research among cultural differences (process of analysis and interpretation)

The presenter will provide an outline of the themes, and then there will be a discussion including the researchers on the floor.

### **Part2: Introduction of ongoing researches**

In Part 2, after briefly reflecting on the topics in Part 1, young researchers from Japan and Korea will introduce their on-going research. Each researcher will give a short presentation and suggest the challenges in conducting qualitative research. We hope that this will be an opportunity to find the common challenges and interesting aspects of qualitative research methods across the borders. In this part, presentations will be provided by the four researchers.

1. *Aoi Komatsu* " Psychological processes of School refusal experiences: From the interview study focusing on the loss experience"
2. *Misato Fukuyama* "*The phenomenon of cosplay: a bridging study of psychology and domestic science*"
3. *Cheolwoo Park* "A Content Analysis of the Relationship Between Emerging Adults' Career: Aspirations and Attitudes Toward Marriage"
4. *Kay Park* "A phenomenological study on maritime police officers' psychological experiences after response of the Sewol ferry disaster and organizational changes"

Finally, we would like to provide an opportunity to share our reflections on this event and to have a conversation about future opportunities for exchange to promote communication between Japan and Korea through qualitative research.

[SA-1] 委員会企画シンポジウム 10月23日 16:15-18:15 Zoom Room 3

(質的心理学研究編集委員会企画)

## 質的研究を社会で活かす

—産・学・官連携でつなぐ、つどう—

企画： 日高友郎（福島県立医科大学医学部）

司会： 文野洋（文京学院大学人間学部）

話題提供： 宮下太陽（株式会社日本総合研究所）

話題提供： 杉山高志（京都大学防災研究所）

話題提供： 日高友郎（福島県立医科大学医学部）

指定討論： サトウタツヤ（立命館大学総合心理学部）

指定討論： 矢守克也（京都大学防災研究所）

### 企画趣旨

「産学官連携」の名のもと、大学の知を社会へと還元することが求められるようになって久しい。産学官連携という営みは質的研究をどのように「つなぐ」だろうか。あるいは、産・学・官という三者（あるいは産学、産官、学官という二者）が「つどう」中で、質的研究はどのような役割を果たしうるだろうか。

当企画では、産学官連携の実践・経験にまつわる話題提供（宮下太陽・杉山高志・日高友郎）を行うとともに、文化心理学とモード論（サトウタツヤ）ならびにグループダイナミクスとアクションリサーチ（矢守克也）の視点からの討論を併せ、産学官連携と質的研究との関係性を探求する。知見の社会還元だけでなく、地域や組織のあり方や協働性そのものへの問いさえも内包する広大なフィールドとして「産学官連携」を再考するための示唆を得る。

なお当編集委員会企画シンポジウムは『質的心理学研究』第23号特集として予定されている「産・学・官連携による／についての質的研究」（責任編集：日高友郎・文野洋）の連動・事前企画として実施される。オーディエンスからの積極的な議論参加を歓迎する。

### 企業の人材育成と質的研究—複線径路等至性アプローチ（TEA）を用いた分析： 宮下太陽（株式会社日本総合研究所）

本報告では、企業における新たな人材育成施策の立案から実施過程について、記号論的文化心理学に立脚した質的研究手法であるTEA（複線径路等至性アプローチ）を用いた分析結果を取り上げる。発表者は、本取り組みを推進した担当者、担当者の上司、施策展開の対象

部署の3者にインタビューを行った。これまでになかった新たな人材育成施策を導入した本活動では、従来の人材育成施策の効果を高めたい人事部門（担当者および上司）と、より意味のある人材育成施策を展開したい対象部門がそれぞれの立場を相互に理解した上で、周囲の軋轢にも柔軟に対応し、会社の経営陣のオーソライズを得て、実装に至った。その動的なプロセスをTEAを用いて報告する。

### **津波防災実践をめぐる産学官の連携—動的なプロセスに対する質的研究：杉山高志（京都大学防災研究所）**

本報告では、津波避難訓練支援アプリ「逃げトレ」をめぐる産学官の連携について、質的研究の観点から分析した結果を取り上げる。発表者は、2015年から「逃げトレ」の開発スタッフとして携わり、システム設計やデザインを担当する民間企業や津波シミュレーションを行う他研究機関、太平洋・瀬戸内海沿岸部の行政職員らと共にアプリ開発に取り組んできた。この活動では、豊富なデータを収集したい研究者とアプリの使いやすさを追求する民間企業、超高齢社会でアプリを使った防災に苦心する行政職員など、それぞれの立場で異なる志向性が顕在化し対立と止揚を繰り返しながらアプリを作り上げた。その動的なプロセスを質的研究の手法を用いて報告する。

### **産学官連携に基づく糖尿病対策の実践—質的研究による成果と連携課題の抽出：日高友郎（福島県立医科大学医学部）**

製薬会社・福島県郡山市・福島県立医科大学が連携して実施した、地域における糖尿病改善プロジェクトの顛末を報告する。同プロジェクトでは行政の保有する膨大な医療・保健データ、製薬会社の持つ豊富な資金・人材・ネットワーク、そして大学の持つ分析的ノウハウが一体となり、地域住民の健康改善に貢献することが志向された。しかしその連携過程においては「同床異夢」と言うべき目標のブレや、仕事の進め方の相違など、産学官連携ならではの課題が浮き彫りになった。本報告では、産学官連携による事業成果を示すとともに、連携過程そのものの分析から連携をより円滑に進めるための実践的示唆を得る。

## **Utilizing qualitative research in society:**

the connection and assembly of knowledge in industry-government-academia collaborative research project

Yoh Fumino (Bunkyo Gakuin University), Moderator

Taiyo Miyashita (The Japan Research Institute, Limited), Presenting Author

Takashi Sugiyama (Kyoto University), Presenting Author

Tomoo Hidaka (Fukushima Medical University), Presenting Author

Tatsuya Sato (Ritsumeikan University), Discussant

Katsuya Yamori (Kyoto University), Discussant

(Language: Japanese)

[SA-2] 委員会企画シンポジウム 10月24日 8:30-10:30 Zoom Room 4

(研究交流委員会企画)

## オンラインで広がる<sup>フィールド</sup>現場と私たちのアクチュアリティ ー新しい時代の公共圏をつくるコミュニケーションー

企画・司会： 小澤伊久美（国際基督教大学教養学部）

企画・話題提供： 蒲生諒太（立命館大学教育開発推進機構）

話題提供： カルダー淑子（ジョンズホプキンス大学  
高等国際問題研究大学院）

話題提供： 原田奈穂子（宮崎大学医学部）

指定討論： 岡本仁宏（関西学院大学法学部）

指定討論： 平川秀幸（大阪大学

コミュニケーションデザイン・センター）

### 企画趣旨

質的研究には「人びとは周りにある世界をどのように作り上げるのか、人びとは何をしているのか、人びとに何が起きているのかを、意味のある豊かな洞察を与える言葉でひも解こうと試みる」（フリック、2016）という共通の特徴がある。やまだ（2020）は、現場（フィールド）を「複雑多岐の要因が連環する全体的・統合的場」と定義したが、いかにして現場の特徴を単純化せず新たな知として生成するかは質的研究の課題の一つである。

全体的・統合的であり何が必要かわからないという現場の本質的特徴は、コロナ禍でより強く実感されている。COVID-19が人々に与えている医療・健康への影響はもちろん、政治、経済、教育、人権など多領域の問題が複雑に絡み合っ生起する中で、人々はみな当事者として問題に向き合い、次に進むべきか模索してきた。自らのおかれている世界をいかに捉え、不確実な社会の将来を見通すか、それを立場や考えの異なる他者といかに議論・交渉して共同体を運営するか。また、オンラインで形成されたコミュニティは従来の階層性や組織を超えたつながりを生んだが、そこにはどのような公共圏が立ち現れ、どのようなコミュニケーションが生まれたのか。そして研究者である我々は、この状況をいかに紐解くのか。

このような背景から、本企画では様々な領域からの話題提供を踏まえ、オンラインで広がった現場において私たちがどのように公共圏を築いているかを考察し、新時代の公共圏におけるコミュニケーションの在り方の可能性と課題を探りたい。

### 話題提供 1 : カルダー淑子 (ジョンズホプキンス大学高等国際問題研究大学院)

日本を出自として海外に在住する親や教師が日本語教育推進法の国会上程を機にオンラインで繋がり、2000 名を動員する署名運動を行って、子どもたちの日本語継承教育に対する政府支援を獲得した。海外の継承語教育の現場は、現地の言語教育事情や日系家庭の背景に応じて多様だが、推進法の署名運動は、コロナ禍によるオンライン化の進展と相まって、連携の意義を現場に自覚させた。基盤になったのは海外継承日本語教師の会のMLであり、本発表はこの流れを紹介する。

### 話題提供 2 : 原田奈穂子 (宮崎大学医学部)

COVID-19 パンデミックにより、集合型の演習および病院等の施設での実習の実施が困難になったことを受け、看護の領域を超えた情報共有のために 2020 年 4 月から Facebook グループを作成し、現在まで運用している。この公共圏への登録者は 917 名に上り、400 件以上の投稿を通じたコミュニケーションが生じた。また、オンラインでの講義、シミュレーション演習、実習のウェビナー開催という場の広がりを見せた。

### 話題提供 3 : 蒲生諒太 (立命館大学教育開発推進機構)

2020 年日本の大学ではメディアや行政を通じた大学嫌悪と呼べるバッシングが吹き荒れていた。その内容はオンライン授業批判と対面授業要求によって特徴付けられるものであった。各大学は学生アンケート等を通じて、オンライン授業の満足度の高さ等を宣伝したものの、それらをメディアは無視し、行政は信用しなかった。報告者はこのような大学嫌悪の背景にあった行政、メディア、社会運動の実態を検証し、ウェブを通じて大学教員コミュニティに結果を公表し続けた。この報告では一連の活動を通じて発見された日本の大学人による公共圏の特性を明らかにしたい。

## The Field Expanded Online and Our Actuality

Communication Making the Public Sphere in the New Era

Ikumi Ozawa (International Christian University), Moderator

Ryota Gamo (Ritsumeikan University), Presenting Author

Toshiko Calder (Johns Hopkins University), Presenting Author

Nahoko Harada (University of Miyazaki), Presenting Author

Masahiro Okamoto (Kwansei Gakuin University), Discussant

Hideyuki Hirakawa (Osaka University), Discussant

(Language: Japanese)

[SA-3] 委員会企画シンポジウム 10月24日 14:15-16:15 Zoom Room 3

(質的心理学フォーラム編集委員会企画)

## 「つながりの実感」を考える

企画： 高梨 克也（滋賀県立大学人間文化学部）

司会： 高梨 克也（滋賀県立大学人間文化学部）

話題提供： 中川 敦（宇都宮大学地域デザイン科学部）

話題提供： 村上 靖彦（大阪大学人間科学研究科）

話題提供： 村上 正行・浦田 悠（大阪大学全学教育推進機構）

### 企画趣旨

「つながり」という言葉はかかわりあいを表現する言葉として馴染み深いものでありながら、その言葉のもとで語られることの多様さや意味の豊かさゆえに、端的に説明することが難しい。だからこそ、この「つながり」という言葉によって記述可能な物事、感受される感覚の様、紡がれる／断ち切られる関係性…こういったことの「実感」のひとつひとつのありようを捉えることは非常に重要な意味をもつ。『質的心理学フォーラム』誌第13号の特集では、こうした「つながりの実感」にかんする論考を募集し、その射程や意味について議論を進めてきた。今回のシンポジウムでは、特集論文著者の先生方にそれぞれの論文の概要についてご紹介いただくと共に、登壇者全員でのディスカッションと参加者からの質疑応答を通じて、このテーマについての思考をさらに深めたい。

### 話題提供1：中川 敦（宇都宮大学地域デザイン科学部）

高齢の親の介護に直面している遠く離れて暮らす子供（以下DC）は、ケアマネジャー（以下、CM）と、介護方針に関する意思決定を、Eメールを通じて行なうことがある。実際に取り交わされたEメールをデータに、その意思決定過程を会話分析的なアプローチから分析した。その結果、Eメールの連鎖において、DCとCMのどちらの側から問題と解決策の提示が開始されるかで、親とのつながりについて構造的に異なる意味合いを持つことが明らかになった。DCから開始される連鎖では、家族であることと専門家であることの棲み分けが容易である一方、CMから開始される連鎖では、親についての知識をどちらが多くをもつべきかをめぐる問題が生じていた。

## 話題提供 2 : 村上 靖彦 (大阪大学人間科学研究科)

2011年から看護師へのインタビューを継続的に行い、2014年以降はいわゆる「当事者」とされる人たちへのインタビューも断続的に行ってきた。20年近くにわたってつながることの重要性と可能性をテーマとして研究を進めてきたといってもよい。しかしそのなかでどうも「つながる」ということが構造上できないのではないかと、という場面に段々と目が行くようになってきていた。つながることができない、ということは対人関係が結べないような状況が生まれる、ということであり経験が組織だったまとまりにならないということでもあり、今多様な事例で分散的に生じる。そのため今のところ断片的な思考にとどまっているのであるが、以下では、最近気になっている場面をもとに「つながり」の不可能性について考えてみたい。

## 話題提供 3 : 村上 正行・浦田 悠 (大阪大学全学教育推進機構)

本報告では、COVID-19の流行に伴って急遽実施されたオンライン授業の支援業務に携わってきた教育工学者と心理学者が、本特集のテーマである“つながりの実感”に着目して、コロナ禍における大学のあり方について考察した結果を紹介する。急遽実施されることになったオンライン授業ではあるが、全体としては対面授業と同等の学習成果があったと考えられる。その一方で、キャンパスに入れず、オンラインのみでは“つながり”を実感できない学生も多く見られた。この点について、ビデオ会議ツールの特性や偶発的なつながりの欠如等、コロナ禍で変貌したつながりの質感について考察し、ニューノーマル時代における新たな大学教育のあり方を探求した。

## Consider the “sense of connection”

Katsuya Takanashi (School of Human Cultures, The University of Shiga Prefecture), Moderator

Atsushi Nakagawa (School of Community Design, Utsunomiya University), Presenting Author

Yasuhiko Murakami (Graduate School of Human Sciences, Osaka University), Presenting Author

Masayuki Murakami and Yu Urata (Center for Education in Liberal Arts and Sciences, Osaka University), Presenting Author

(Language: Japanese)

[S-1] Symposium 会員企画シンポジウム

Saturday, October 23, 9:00 AM – 11:00 AM UTC+9 Zoom Room 2

## **A comparative study of Japanese and Chinese junior high school students on the cultural characteristics of peer conflict**

### **友人間葛藤の文化的特徴に関する日中中学生の比較研究**

How do they deal with their crisis?

彼らは危機にどのように対処するか？

Moderator/ Organizer/ Presenter: Yamamoto, Toshiya (Developmental Research Support Center)

Presenter: Jang, Yingmin (Beijing Normal University)

Discussant: Kim, Sunmi (Chung-an University)

(Language: Korean and Japanese with Korean and Japanese translation)

### **Abstract of symposium**

In this study, we asked junior high school students from Japan and China to write a fictional story about the conflict between friends. The outline of the story presented to them is "A asked B for something, but B refused it for some reason", and they are requested to include the following three elements in the story; What did A ask for? Why did B refuse it? What happened to the relationship between the two after that? The created stories were qualitatively classified from the following viewpoints. ① Is the story based on the daily life of junior high school students, or is it set in a non-ordinary life such as the life of an adult? ② Is the story development flat, dramatic, or somewhere in between? ③ Has the relationship maintained, improved, or deteriorated since then? These results represent cultural differences in the seriousness of conflict between friends that junior high school students can imagine. There is a possibility that we can find

the difference in the cultural narrative structure or master narrative of "view of life" and "the social wisdom of how to live" in each society. In this symposium, researchers from Japan, China, and South Korea will discuss the cultural interpretation of this result and explore the possibility of mutual understanding between those with different narrative structures.

### **The contrast between "unconditional" and "multi conditional"**

*Jiang, Yingmin*

Using "helping friends" as a starting point, this survey reveals the differences between middle school students in China and Japan about the way they see conflicts in friendships and their distinctive conditions for repairing them. For Chinese students, the premise of developing friendship is to reduce the distance between each other continuously. Its value even exceeds social norms. Therefore, the design of conflict scenes was carried out "unconditionally" (sometimes it overlooks law or even condons the legal deviation, for keeping friendships). Japanese students tend to 'respect for privacy' as an essential factor in friendships, so they hardly bother each other. As a result, the conflicts often appeared in subtle, daily scenes that allowed them to keep independent. The contrast between "unconditional" and "multi conditional" is impressive.

### **Socio-historical master narrative and peer interaction over conflicts.**

*Yamamoto, Toshiya*

These results indicate the fundamental differences of normative consciousness between Japan and China in what should be emphasized in friendship and how relationships should be adjusted and restored. One of the important axes of social conflict shown in the Chinese story seems to be the conflict between close personal relationships and social rules. The axis of conflict reminds us of the historical conflict between Legalists and Confucian scholars in China. On the other hand, it also is impressive that Japanese junior high school students tend not to make the conflicts manifest as much as possible.

葉公語孔子曰、吾黨有直躬者、其父攘羊、而子證之、孔子曰、吾黨之直者異於是、父爲子隱、子爲父隱、直在其中矣。

[S-2] Symposium 会員企画シンポジウム

Saturday, October 23, 9:00 AM – 11:00 AM UTC+9 Zoom Room 3

## **Psychosocial Support for Korean Japanese Minorities**

An Approach toward Respectful Racial Counseling & Community Work

在日コリアンのための心理社会的支援に求められているものは何か？

Respectful Racial Counseling & Community Work の試み

Kisa Park (Graduate School of Human Science, Ritsumeikan University),

Organizer & Presenting Author

Shunsuke Maruichi (Counseling & Community Center for Korean Japanese Minorities), Presenting Author

Rimyong Park (Microaggression Research Group), Presenting Author

(Language: Japanese with Korean translation)

### **Abstract of symposium**

In 2020, Japan's first counseling and community center for *Zainichi Korean* (Korean Japanese minorities) was established in Kyoto. This panel will discuss the need for psychosocial support for Zainichi Koreans including the historical background, contemporary importance, and future possibilities. Everyday lives of individual Zainichi Korean continue to be impacted by historical violence and ongoing tension between Japan and Korean peninsula. The discussion is based on what has emerged from the presenters' practice (counseling and research activities).

### **Historical Overview of Korean Japanese minorities**

*Rimyong Park*

The background of Japanese colonialism on the Korean peninsula, Zainichi Korean (hereafter Zainichi) history in postwar Japanese society, and their current

situation will be briefly introduced. This will be followed by an overview of the various problems that Zainichi are currently facing, including hate speech, microaggressions, exclusion from education and other social welfare policies, civil rights issues, and immigration policies.

## **Background and Significance of the Establishment of ZAC**

*Shunsuke Maruichi*

Following the historical overview, the panel will discuss the current need for a counseling and community center for Zainichi (ZAC). It will discuss the barriers to accessibility that Zainichi face when trying to access counseling services, and how lack of sensitivity of Zainichi background in standard practices affect counseling experiences for Zainichi. Based on our community activities and microaggression research, we will also discuss how lack of support resources for Zainichi contributes to stress of individual Zainichi.

## **An Approach toward Respectful Racial Counseling & Community Work**

*Kisa Park*

The following is an introduction to the counseling approach practiced at the Zainichi Korean Counseling & Community Center(ZAC). Four points are taken into consideration for Respectful Racial Counseling. (1) Basic understanding of ethnic backgrounds (counselors must have basic background knowledge about Zainichi), (2) Prevention of microaggressions (counselors must understand the reality and impact of microaggressions directed to Zainichi, and make efforts to prevent their reproduction in counseling), (3) Respect for the community (being respectful to Zainichi communities as well as aware of those who may be excluded from both Japanese society and Zainichi communities), (4) Focusing on the individual life (providing a place for counseling where the individual Zainichi can focus on their life and pursue happiness with peace of mind, based on an understanding (1) through (3) above).

[S-3] Symposium 会員企画シンポジウム

Saturday, October 23, 11:15 AM – 13:15 PM UTC+9 Zoom Room 3

## **"Ibasho", cultural identity, and mental health of people with multicultural backgrounds**

多文化背景をもつ人々の「居場所」、文化的アイデンティティ、メンタルヘルスをめぐって

Suzuki, Kazuyo (Saitama Junshin College), Moderator/ Organizer

Ishibashi, Michiko (International University), Presenting Author

Suzuki, Yumi (Senri & Osaka International Schools of Kwansei Gakuin),  
Presenting Author

Suzuki, Kazuyo (Saitama Junshin College), Presenting Author

Nitta, Fumiteru (Kibi International University), Discussant

(Language: English)

### **Abstract of symposium**

In recent years, there has been an increase in the number of people with multicultural backgrounds in Japan, such as returnees from abroad, international students, foreign workers and their families, and children of interculturally married parents (intercultural children). The concept of "Ibasho" is unique to Japan and refers to "one's place where one feels secure, comfortable, and accepted" (Suzuki, 2018). People with multicultural backgrounds often feel that they do not have "Ibasho", and some of them have difficulty in forming an identity and maintaining their mental health. It has been suggested that creating "Ibasho" is very useful in providing support to such people. In this symposium, we will report on the studies of returning students (Suzuki, Y.), intercultural children living abroad (Suzuki, K.), and foreign students living in Japan (Ishibashi), and then discuss (cultural) identity and mental health with a focus on "Ibasho" from not only psychological but also cultural anthropological perspective (Nitta).

### **'Ibasho' of Third Culture Kids: Returning students (Kikokusei) in Japan**

*Suzuki, Yumi*

Third culture kids (TCK) are persons who have spent a significant part of their developmental years outside the parents' culture. These are known as Kikokusei, or returning students in Japan. The concept of Ibasho is important and useful for understanding these people, because they sometimes have psychological problems. There has been little empirical research about TCK and returning students regarding Ibasho. Thus, the purpose of this study is to explore meanings and subjective experiences of Ibasho that returning students have had.

### **"Ibasho" of intercultural children with Japanese ancestry in Indonesia**

*Suzuki, Kazuyo*

This study is part of a longitudinal study started in the 1990s and aims to clarify "Ibasho" of Japanese-Indonesian young people with Japanese mothers and Indonesian fathers living in Indonesia as well as the relationship between "Ibasho" and identity. The Cultural Anthropological- Clinical Psychological Approach [(Suzuki & Fujiwara, 1992, etc.)] is employed. The results show that "Ibasho" plays an important role for cultural identity formation and Subjective Well-Being (SWB).

### **Sense of "IBASHO 居場所" for International Students in Japan**

*Ishibashi, Michiko*

Cultural adjustment of international students often brings a challenge to find a suitable "Ibasho", in Japan where one can have positive feelings toward specific space for various reasons. This presentation examines how international students in Japan define their "Ibasho" and share their thoughts about the "Ibasho" concept through survey methods, individual interviews, and group discussions. Even though many research participants had never known "Ibasho" or did not find any matching term for "Ibasho" in the culture they came from, they reported it was important and helpful concept for their psychological wellbeing.

[S-4] Symposium 会員企画シンポジウム

Saturday, October 23, 14:00 PM – 16:00 PM UTC+9 Zoom Room 2

## **Visual Narrative:**

Diversity, Imagination and Possibilities

ビジュアル・ナラティブ

多様性、想像力、可能性

Akihiko Ieshima (Osaka University), Organizer/Moderator/Presenting Author

Sosuke Yokoyama (Tokyo City University), Organizer/Presenting Author

Yoko Yamada (Ritsumeikan University), Organizer/Presenting Author

Xiaohong Zhang (Kumamoto University), Presenting Author

Sunah Oh (Kyoai Gakuen University), Discussant

Younglim Noh (Kawamura Elementary School), Translator

(Language: Japanese with Korean translation)

### **Abstract of symposium**

Narrative, the act of organizing experience, has traditionally been studied with a focus on language in a narrow sense. In contrast, we have attempted a "visual turn," and have been accumulating research on visual narratives for many years. Visual narratives are narratives that use visual images. They are powerful for multicultural communication because they can express the diverse experiences of the people involved through images and can be communicated intuitively across cultures. In this symposium, we would like to approach the diversity, imagination, and potential of visual narratives by introducing research cases.

### **Multicultural Visual Narrative: Images of "Relationship between Me and Mother" drawn by Japanese, Korean, American, and British students**

*Yoko Yamada*

I constructed a network model showing the diversity, commonality, and

interconnectedness of the visual images of the "Relationship between Me and my Mother" drawn by university students in Japan, Korea, U. S., and U. K. Then, from the images common to the four countries, I presented five types of visual life narratives: "Childhood," "Present," and "Future."

### **Visual Narrative Approach for Child Care Worker's Beliefs on their practices**

*Sosuke Yokoyama*

The purpose of this study is to clarify the beliefs that childcare workers hold on their own practices. For this study, we use an image-drawing method based on the methodology of visual narrative. Through some images drawn by childcare workers, I would like to show images of beliefs they hold on their practices, and to get some suggestions about cultural views of childcare practices.

### **Idea creating and visual expressions in a child's painting activities**

*Xiaohong Zhang*

Children meet difficulties to choose what to paint when the teacher ask them paint freely. The purpose of this study is to clarify a child's idea creating and the relative visual expressions after she participated in painting activities in a class. Through the analysis of the paintings and interactions between the child and her mother, I could like to find some effective support for children's painting activities.

### **Jinsei Sugoroku as Visual Narrative: Comparison between international students and Japanese students**

*Akihiko Ieshima*

In this presentation, I will introduce "Jinsei Sugoroku", which is drawing of one's life career, as visual narrative and will show some cases of university students. Through comparison between international students and Japanese students, it seems that we can get better understanding about individual and international view of life which is based on culture.

## フィールドでの経験と研究

—その関係性や葛藤、わたしたちはそこで何を見つけるのか—

企画・話題提供： 土倉英志（法政大学社会学部）

話題提供： 青木美和子（札幌国際大学人文学部）

話題提供： 南部美砂子（公立はこだて未来大学システム情報科学部）

パネリスト： 沖潮満里子（湘北短期大学）

### 企画趣旨

本シンポジウムでは、フィールドでの経験と研究のあいだにあることに焦点をあてる。“フィールドに研究者が入り、そこで何かを掴んで、フィールドを後にする、掴んだことを論文にまとめる” フィールド研究を、こうしたいとなみととらえるのは、いくつもの点で事態を単純化しすぎている。フィールドと関わるなかで、望むと望まざるとにかかわらず、さまざまなことが変わる。フィールドの見え方が、人間関係が、関心の所在が、あるいは、フィールドの人たちが、変わる。こうした変化は、研究成果にはもちろん、研究者の人生にも、少なくない変化をもたらすだろう。こう考えれば、フィールドでの経験が研究者に何をもたらすのかに関心を向けることの意義を理解してもらえよう。ところが、フィールドでの経験と研究のあいだにあることを語る言葉はかならずしも多いとは言えず、そこには荒野が広がっているように思われる。汗や涙なしにフィールド研究は進まないが、それらは論文からは拭い取られる。涙が表わしていたのはよろこびか、はたまた、哀しみや悔しさか。言えるのは、そうした汗や涙がなかったならば、描かれたものは違っていったということだ。

本シンポジウムでは、長期にわたりフィールドと密接にかかわる経験をもつ青木美和子氏（e.g. 『福祉の現場における「共生」に向けたコミュニティの生成』、「高次脳機能障害者のキャリア形成のプロセス」）、豊富なフィールドの経験をもち、現場にみられる境界やずれにも関心をもつ南部美砂子氏（e.g. 「大学連携ワークショップにおける境界のデザイン」「医療現場におけるリスク共有コミュニケーション」）に話題提供していただく。また、パネリストにはインタビュー研究に精通し、方法論にたいする内省が深い沖潮満里子氏（e.g. 「障害者のきょうだいが抱える揺らぎ」）を迎える。

フィールド研究のテクニックやノウハウに焦点をあてるのではなく、各研究者のフィールドでの生き様に光をあてることで、フィールド研究自体を見つめなおす機会にしたい。ディスカッションではフロアのみなさんの経験を伺いたい。また、フィールド研究の経験がない方の声もぜひ聞かせていただきたい（本シンポジウムは、日本認知科学会 教育環境のデザイン分科会の共催で行われる）。

## **フィールドの調査者から参加者へー居心地のよさと悪さの間でー：青木 美和子**

初めて高次脳機能障害者の「作業所」を訪れたのは2001年、大学4年の春であった。それ以来、高次脳機能障害者の「作業所」が、今の私にとって研究上においても、人生、人間関係においても大切な場となっている。

「作業所」とはどのような場なのか、高次脳機能障害とはどのような障害かを理解しようとしてフィールドワークを始めた当初は、ボランティア兼調査者として、そして徐々にフィールドへの関与が深まりボランティアスタッフとして、「作業所」づくりやその活動に参加してきた。発表では、研究課題の変遷とフィールドの人々との関係性の変化、期待される役割、調査モードから実践モードに移行する間の葛藤などを報告し、話題提供を行いたい。

## **現場にただ居ること、モヤモヤから学ぶこと：南部 美砂子**

医療、情報、デザインなど、多様な現場の実践に自ら参加したり意図せず巻き込まれたりした経験から、自己を問い直し、学び、変容していくありのままの姿を紹介する。その現場にただ居ること、モヤモヤし続けること、異なるコミュニティの境界上でつまづいたり立ち上がったったりすること、そして、それらの経験の記述と考察を研究のかたちで世に問うこと。フィールドに出た女性かつ認知科学分野の研究者として、語りにくい失敗の事例も取り上げながら、フィールドとの対話の困難と可能性について議論する。

## **文脈をなぞるーフィールドの知と文脈依存性：土倉 英志**

同じ対象を目にしているはずなのに“見えない”ことがある。一方には見えるが、他方には見えない。そこにあるのは2つの主観に過ぎないのだろうか。そうではないかもしれない。“どこからどう見るとそれが見えるのか”を示してもらうことで対象を共有できることがある。このとき、それはもともとあったけれど、これまで見方がわからなかった、理解ができなかった、と言えるだろう。フィールドで得られる知の特徴のひとつに文脈依存性がある。知は文脈とともにある。逆に言うと、文脈がととのわなければみえない。だから私たちは翻弄される。ただし文脈依存性といっても単純ではない。本発表では文脈依存性に注目しながら、フィールドの知の特徴を探りたい。

## **On unintended changes that occur in field research:**

What do informants and researchers experience in field research?

Eiji, Tsuchikura (Hosei University), Moderator & Presenting Author

Miwako, Aoki (Sapporo International University), Presenting Author

Misako, Nambu (Future University Hakodate), Presenting Author

Mariko, Okishio (Shohoku College), Discussant

(Language: Japanese)

## 「プロセス」の再考

—複線径路等至性アプローチ (TEA) と展結・結晶化—

企画・話題提供：サトウタツヤ (立命館大学総合心理学部)

話題提供：神崎真実 (立命館グローバルイノベーション研究機構)

話題提供：福山未智 (立命館大学 人間科学研究科)

話題提供：堀江貴久子 (立命館大学 人間科学研究科)

指定討論：森 直久 (札幌学院大学心理学部)

指定討論：川野健治 (立命館大学総合心理学部)

### 企画趣旨

このシンポジウムでは、TEAにおけるプロセス理解を推進・再考する手がかりとして、フランスの哲学者ジルベール・シモンドンが提唱した「Transduction」に着目する。この語は生物学では「形質導入」、心理学では「転導」、電気工学では「変換」と訳されているが、私たちは「展結」を提案する。帰納、演繹を訳出した西周が糸偏の漢字を用いて西洋の概念を日本に導入した故事に習った部分もある。また、シモンドンは個体化を考える際には前個体化の状態を視野に入れた上で結晶化 (Crystallization) という概念が重要であると指摘した。今回は具体的な事例に即した話題提供を通して、プロセスの実存的記述を志向する TEA にとって展結や結晶化という概念がどのような意味をもつのかを考えていく。

### 話題提供 1：サトウタツヤ (立命館大学総合心理学部)

個人の未来展望であれば不確定のままで模索することもあり得るが、現場で問題が発生した場合は、具体的な解決が必要となる。たとえば二つの解決策が対立する時、それをひろがりと捉えれば、その「ひろがり (展がり)」を「ゆわく (結わく)」ことでより良い解決が可能になる可能性がある。膠着した対立は既存の次元上で行われているためその次元上で交わることは難しい。それとは異なる次元を導入することで「最初からそうすれば良かった」的な解決が実現することがある。もちろん最初から可能だったわけではなく問題解決のための尽力がそれを可能としたと考えられ、そうした解決こそが展結だと考えられる。

### 話題提供 2：神崎真実 (立命館グローバルイノベーション研究機構)

本発表では、小学校の教員たちがダウン症児のインクルージョンを目指して問題解決を試みたプロセスを報告する。ダウン症のナオミは小学校1年生の間、学校生活のうち約8割

の時間を通常学級で過ごし、通常学級の児童と関わりを持つようになった。しかし、児童らとの関わりが増えたことで、ナオミは通常学級で周囲と異なる課題をすることを拒否するようになった。この状況に対し学級担任と特別支援コーディネーターは異なる方針を持ったが、教員たちはエミリの保護者の視点を持ち出すことによって妥協策ではない解決策を案出した。当日は、問題解決プロセスについて相補性と展結という観点から考察を行う。

### **話題提供 3：福山未智（立命館大学 人間科学研究科）**

自身の13年間/200回のコスプレ経験で撮影された約5万枚の写真を用いてオート TEM を作成し、コスプレイヤーが個体化(individuation)し続けるプロセスを報告する。個人にはそれぞれ日常生活、遊びでの選択肢があり、バランスをとりながらコスプレという遊びを行い終われば日常に戻る。こうした中ではコスプレのための新たな目標が発生するとそれまでのポテンシャルが活性化し、目標達成に向けて努力し、新しい技術を身に纏うことができるようになる。それはまた次の活動のポテンシャルとなり、次の活性化の機会を待つことになる。これはコスプレ活動を引退するまで継続するものであり、「結晶化が永続する過程」として捉えることができる。個体化と結晶化という概念の意義も併せて論じたい。

### **話題提供 4：堀江貴久子（立命館大学 人間科学研究科）**

大学アスリートのうち、競技と仕事を両立しどちらも断念することなく就業する者は全体の2割以下である。本発表ではあるアスリートの体験記述をもとに、大学入学から就職活動終結までに至る進路決定のプロセスを、複線径路等至性モデリング(TEM)を用いて描き報告する。立命館大学女子相撲部の今ひより氏は在学中に様々なアプローチにより新しいキャリア選択肢を創出し自己実現を展開した。彼女にとって偶発的な出会いでもたらされた自身の就職決定までの経緯を、非可逆的な時間の流れの中で可視化した。また、複数の選択肢の創造的結合(展結)により、プロ競技者と一般就業のどちらかの選択ではなく、新たな視点でのキャリア創造を行い、自分らしい就業を行ったプロセスについて考察を行う。

## **Reconsideration of process**

Trajectory Equifinality Approach and transduction/crystallization

Sato Tatsuya (Ritsumeikan University), Moderator & Presenting Author

Kanzaki Mami (Ritsumeikan University), Presenting Author

Fukuyama Misato (Ritsumeikan University), Presenting Author

Horie Kikuko (Ritsumeikan University), Presenting Author

Mori Naohisa (Sapporo Gakuin University), Discussant

Kawano Kenji(Ritsumeikan University), Discussant

(Language: Japanese)

## 集合的トラウマを正しく理解するためのレッスン

－集合的トラウマから見るトラウマ理論の新たな射程－

企画・話題提供： 宮前良平（大阪大学人間科学研究科）

企画・話題提供： 大門大朗（京都大学防災研究所）

企画・話題提供： 高原耕平（人と防災未来センター）

### 企画趣旨

本シンポジウムは8月に刊行された『そこにすべてがあった：バッファロー・クリーク洪水と集合的トラウマの社会学』（夕書房）の翻訳者である3名がそれぞれの見地から集合的トラウマの概念説明を行い、様々な解釈の間で揺れ動く集合的トラウマの概念を現代に蘇らせようという試みである。集合的トラウマはときにトラウマを抱える集団のことを意味する場合がある。「敗戦は国民的なトラウマだ」などの言説がその代表例であり、「文化的トラウマ」や「国民的トラウマ」と称されることもある。しかし、本書において示される集合的トラウマはこのような、トラウマを抱える個人の集合体というような、個人主義的なトラウマ観とは異なる概念である。むしろ、人間は人間関係の網の目の中で生きているという関係主義的な観点からトラウマを捉える試みである。本シンポジウムでは、それぞれの話題提供者が「自然」「社会関係資本」「ふるさとの喪失」などのキーワードをもとに、集合的トラウマが論じようとしてきた人間の本質を明らかにしていく。また、集合的トラウマの例として日本で起きた災害事例を取り上げ、集合的トラウマ概念が現場での実践にどのように活かされるか、フロアのみなさんとともに議論していきたい。

### 話題提供1：高原耕平（人と防災未来センター）

K. エリクソンは集合的トラウマ概念を、症状を抱えた個人の集合体としてではなく、生き活きとした共同体それ自体に生じた現象として描いた。他方で『そこにすべてがあった』の記述は、あくまでバッファロー・クリークの固有の状況・歴史的な文脈に徹底的に依拠したものであり、本書の集合的トラウマ概念を他の災厄に襲われた共同体にそのまま「適用」することは難しい。そこで、集合的トラウマ概念を個別の経験・文脈を離れて再解釈することを試みる。具体的には、集合的トラウマを、生存者の共同的世界において災厄体験の意味形成が阻害される現象として捉え、人間対人間の関係だけでなく、人間対自然の関係においてもこの阻害が生じている可能性を検討する。

### 話題提供2：大門大朗（京都大学防災研究所）

集合的トラウマは、人々がこれまで依拠してきた共同体や人間関係の喪失によって生み

出されるとされる。この話題提供では、70年代のウェストバージニアにおいて焦点化された、共同体や人間関係の喪失を理解する上で、その補助線を結びつける2つの時点を示す。第一の時点は、現代の「ソーシャル・キャピタル (SC)」論の嚆矢とされるハニファンが捉えようとした1910年代のウェストバージニアである。この用法を受け継いだSCが、アルドリッチらを通して日本の災害研究でも認識されつつあることを踏まえ、集合的トラウマが名指そうとする人々のつながりが、SC論のそれと異なる点を考察する。第二の時点は、エリクソンも研究プロジェクトのリーダーとして関わり、集合的トラウマに関する議論が再燃した2005年のハリケーン・カトリーナである。カトリーナに関する一連の出版プロジェクトThe Katrina Bookshelfを参照し、集合的トラウマがどのような形で読み継がれたかについてアイヤーマンの「文化的トラウマ」に関する議論から示す。以上を踏まえ、集合的トラウマの核心が、対象となる災害を一時的に脇に置き、災害の前からすでにつねにそこにあったコミュニティの抑圧的経験に目を向けることで、翻ってその災害がコミュニティにとって何をもたらしたのか明らかにする姿勢にあることを示す。

### 話題提供3：宮前良平（大阪大学大学院人間科学研究科）

K. エリクソンが提示した集合的トラウマに見られるコミュニティの喪失は、災害による喪失ではなく、復興による喪失の複雑さを描き出している。バッファロー・クリーク洪水は、ふもとの町を破壊し、住民5000人のうち4000人が家を失った。しかしながら、その後のコミュニティの崩壊を決定づけたのは、先着順によって割り当てられた仮設住宅への入居であったり、転居者が多かったりしたことによってであった。つまり、被災前のあのころのコミュニティには戻れないということが復興によって確定し永続化してしまったのである。同様の事例は日本社会でも見られている。本発表では、復興による喪失という観点から、集合的トラウマを再解釈し、日本における事例として東日本大震災後の復興かさ上げ工事の事例や、地方における過疎化の事例を紹介し論を深めていく。

## A Lesson in Properly Understanding Collective Trauma

A new perspective on trauma theory from the viewpoint of collective trauma

Ryohei Miyamae (Graduate School of Human Sciences, Osaka University),  
Moderator, Presenting Author

Hiroaki Daimon (Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University; Japan  
Society for the Promotion of Sciences; Disaster Research Center, University of  
Delaware), Moderator, Presenting Author

Kohei Takahara (Disaster Reduction and Human Renovation Institution),  
Moderator, Presenting Author

(Language: Japanese)

## 遊びの中の社会参加／社会参加の中の遊び

——デザイン／実践をどう記述／分析するか——

企画：石田喜美（横浜国立大学教育学部）

岡部大介（東京都市大学メディア情報学部）

話題提供：李勇昕（京都大学防災研究所）

青山征彦（成城大学社会イノベーション学部）

五十嵐梨々花（成城大学大学院社会イノベーション研究科）

指定討論：秋谷直矩（山口大学国際総合科学部）

岡部大介（東京都市大学メディア情報学部）

### 企画趣旨

本シンポジウムでは、社会参加と遊びとが不可分に結びついた実践に着目し、その記述・分析のありかたについて議論する。近年、仕事におけるプレイフルネスに着目する「プレイフル・シンキング」（上田，2010）や、若者たちの興味を軸に彼らを社会参加へと結びつける「つながりの学習（Connected Learning）」（伊藤，2013，2020）など、遊びと社会参加の結びつきに注目が集まっている。もちろん、遊びと社会参加との結びつき方は一様ではないため、社会参加と遊びとが結びつく具体的な実践や場に着目しつつ、そこで何が行われているのかを明らかにする必要があるだろう。そこで本シンポジウムでは、具体的な実践に関する報告に基づき、そこで記述・分析のために用いられる方法論に焦点を当てて議論を行う。

### 話題提供1: Yes or No ?台湾における防災教育ツール「クロスロード」の実践と参加

李勇昕（京都大学）

防災教育ツール「クロスロード」は、阪神・淡路大震災のときの「実話」がもとになった教材である（矢守・吉川・網代，2005）。2004年に「神戸編・一般編」が開発されて以来、日本各地の自治体、学校、市民団体などが、これを防災教育教材として活用している。台湾では、1999年の集集大地震以降、防災教育、地域防災が本格的に推進されてきた。台湾の防災教育の場面では、専門家が一方的な講義形式によって知識を伝達することが多いが、その効果は限られている。そこで話題提供者は、2016年、台湾の土石流災害の行政担当部門

「行政院農業委員会水土保持局」と連携し、参加型の防災教育教材「クロスロード：土石流編」を開発した。「土石流編」は、台湾の各地域の土石流防災のボランティア「防災専員」を対象にする防災研修で活用されている。本発表では、台湾の政治、社会、文化を踏まえ、「クロスロード」をプレイする場において、専門家と一般住民である「防災専員」の関係性にどのような変化があるのか、どのような語りや対話が生まれたのかについて報告する。

## 話題提供 2: ジェンダーをロールプレイする—異世界としての TRPG が持つ意味

青山征彦・五十嵐梨々花（成城大学）

本発表では、近年注目されている TRPG（テーブルトップ/テーブルトーク・ロールプレイングゲーム）、特にそこで行われるロールプレイに着目する。TRPG とは、サイコロを使用して架空の物語を参加者たちで展開するゲームであり、プレイヤー自身がキャラクターの設定を考え、演じるロールプレイが中心となる。本発表では、プレイヤーが自分とは異なるジェンダーをロールプレイする事例に注目し、その意義について検討する。特に、自分とは異なるジェンダーをロールプレイすることを容易にしている TRPG のゲームとしての性質や、自分とは異なる他者を演じることで人は発達すると論じたホルツマンの議論を重ね合わせながら、TRPG で自分とは異なるジェンダーをプレイすることの意義を浮かび上がらせたい。

## Social Participation in Play/ Play in Social Participation

Design, Practice, Description and Research

Kimi Ishida (College of Education, Yokohama National University), Moderator

Daisuke Okabe (Faculty of Informatics, Tokyo City University, Tokyo City

University), Moderator & Discussant

Fuhsing Lee (Disaster Prevention Research Institute Kyoto University),

Presenting Author

Masahiko Aoyama (Faculty of Social Innovation, Seijo University), Presenting Author

Ririka Igarashi (Graduate School of Innovation and Social Studies, Seijo

University), Presenting Author

Naonori Akiya (Faculty of Global and Science Studies, Yamaguchi University),

Discussant

(Language: Japanese)

## 言説分析と社会的課題—三人三様よみ比べ（3）

—ありふれた病いを「よむ」ことから言説分析の潜在力を問う—

企画・分析者1：川野健治（立命館大学）

企画・分析者2：八ッ塚一郎（熊本大学）

企画・分析者3：岡部大祐（順天堂大学）

### 企画趣旨

本企画は、2019年度、2020年度と進めてきた「言説分析と社会的課題」のトリロジー最終章となる。本企画の趣旨は、「いわば『句会』をお手本に、3人の分析者が共通の材料について言説分析を披露し、その分析をお互いに、また参加者とともに味わうという企画である。指定討論は置かず、相互の意見交換と参加者の意見を交えて理解を深め、また分析手法の洗練を目指す」（2019年度抄録より）というものである。2019年度は「薬物乱用に対する啓発資材（『ダメ。ゼッタイ。』下敷き）」を、2020年度は文部科学大臣による「新型コロナウイルス感染症に関する差別・偏見の防止に向けて」メッセージを素材として、3名の分析者がそれぞれの立場から言説分析を通じた読みを披露し、フロアと共に更なる読みの可能性を試みた。

過去2回のシンポジウムと同様、今回も初回のスタイルを踏襲し、分析者それぞれのアプローチからの、素材の読みを提供し、フロアを含めてのインタラクティブな探求の場を創造したいと考えている。本学会創設以来の研究動向を振り返ってみると、インタビュー法を中心にしたグラウンデッド・セオリー・アプローチや現象学的アプローチ等と比べると、言説分析は相対的に「マイナー」である（あった）と言えるかもしれない。しかし、過去2度のシンポジウムでは、言説分析を主たる方法として用いている研究者の方々のみならず、それ以外の方法で質的研究に従事しているの方々にもご参加いただくことができ、学会員の関心の高まりも実感されているところでもある。

「薬物依存」、「新型コロナウイルス感染症」に続く今回は、「がん」に関わるテキストを素材として言説分析の社会的意義や可能性を模索したい。S. Sontagによる隠喩論にて取り上げられ、分析された時代から時を経て、「がん＝死」ではないということばは、もはやクリシェと化している感もある。がんについての数多もの闘病記が出版され、ドキュメンタリー報道がなされ、ソーシャルメディアを介した個人的経験語りの拡散が行われるようになった（cf. Stage, 2017）。しかしながら、数的に「ありふれた」ものとなり、ある意味では誰もが語りうる病いへと変わってきたとしても、がんの罹患に伴う困難の消失を意味するわけではない。確かに、実際にはもはや死と等価とは言えない高い生存率を達成するがんも少なくない。その一方で、病気罹患患者へのスティグマや差別、その結果としての離職や失業による経済的困窮、社会的孤立といった問題は依然として存在する（Williamson & Stanton, 2018）。そのような問題に、大小さまざまなどのような言説がいかに関わっているのか。3人3様の読みを展開し、言説分析の潜在力を考える機会を提供したい。

これまで同様、分析材料となる具体的なテキストは当日にご披露する予定である。セッションは、3名の登壇者が「よみ」を披露し、これまでの企画と同様に、フロアと共にテクス

トの読みの可能性を探索する。さらに今回は、本シンポジウムが掲げる「言説分析と社会的課題」について、過去2回のセッションも踏まえて登壇者の考えるところも提示したい。

分析にあたり、分析者の立場性を明らかにしておくことは、質的研究の方法論上も意味があると思われるため、これまでと同様に3人の分析者の基本的なスタンスを、前回のシンポジウムでの発表内容の振り返りとともに簡単に紹介しておく。

分析者1の川野は、近年はメンタルヘルス、特に自殺にかかる研究に従事してきた。必要に応じて、言説分析を選択してきたのであり、特定のスタンスがあるわけではない。昨年のシンポジウムでは、文部科学大臣メッセージが児童生徒や学生、教職員をはじめ学校関係者、保護者や地域の皆様向けと3種類用意され、それぞれで主語を「私たち人間・大人・応援団」「文部科学省」「私(大臣)・科学的知見・政府」使い分けながら、良いこと/悪いこと、してほしいことを伝える、総合的な社会的実践としてとらえた上で、大臣会見での読み上げ、新聞での引用などメディア環境を利用してジャンルの連鎖を起こす様子を報告したが、この「自前の」連鎖による効果には疑問を呈した。

分析者2の八ッ塚は、集団力学を専攻し、広義の社会構成主義を理論的基盤としている。パーカーの「ラディカル質の心理学」を糸口に、アクションリサーチとしての言説分析を模索、「いじめ」等教育言説の構造解明と代替言説の提案を試みてきた。前回のシンポジウムでは、文部科学大臣メッセージを「ワクチン言説」に見立て、その対策促進と感染者差別抑制の力能を検討した。メッセージの普及力すなわち感染力を考えるなら、児童生徒、教職員、保護者・地域という対象別の発信ではなく、ウイルス同様、社会集団の壁を越えた伝播を狙うほうが効果的なはずである。世代や属性を越えた対話を促進して言説の普及感染を図る代替案を構想するとともに、大臣メッセージが社会集団の分断と孤立化という「ソーシャルディスタンス」を導いている可能性を指摘した。

分析者3の岡部は、社会言語学や社会心理学のディスコース研究の影響下で、主にがんにまつわるディスコース分析を行なってきた。近年は、場とディスコースの関係に着目し、エスノグラフィとディスコース分析を合わせた研究に取り組んでいる。昨年度のシンポジウムでは、文部科学大臣が発する呼びかけメッセージが、子どもに語りかけるような、親身な視点から呼びかけているように表現されながらも、テキスト内の語の頻度やテキストの形式的構造、より人称詞、引用、モダリティが果たす機能に注目した分析を通じて、遂行的には「脆弱な子ども」に対して「すべてを見透かす大人」という立場性が指標され、読み手との距離を取るもの、コミュニケーション上の訴求力を損なうデザインである点を提示した。

#### 引用文献

Stage, C. (2017). *Networked cancer: Affect, narrative and management*. Palgrave Macmillan.

Williamson, T. J., & Stanton, A. L. (2018). Adjustment to life as a cancer survivor. In M. Feuerstein & L. Nekhlyudov (eds.), *Handbook of cancer survivorship (2<sup>nd</sup> ed.)* (pp. 29-48). Springer.

## **Discourse analysis and social problems, the final: Exploring its potentialities through three types of analyses on "banal illness"**

KAWANO Kenji (College of Comprehensive Psychology, Ritsumeikan University)

YATSUZUKA Ichiro (Graduate School of Education, Kumamoto University)

OKABE Daisuke (Faculty of International Liberal Arts, Juntendo University)

(Language: Japanese)

## 障害概念の脱構築を脱構築する

企画： 楠見友輔（日本学術振興会特別研究員 PD）

司会： 楠見友輔（日本学術振興会特別研究員 PD）

話題提供： 角南なおみ（鳥取大学医学部）

話題提供： 石渡美穂子（立教大学大学院文学研究科）

話題提供： 楠見友輔（日本学術振興会特別研究員 PD）

指定討論： 石黒広昭（立教大学文学部）

### 企画趣旨

社会構築主義に立つ研究者が障害について議論する際には、「障害はどのような見方によって生じているのか」という問いを立てることで、障害を個人や社会の实在に還元する障害モデルを克服することが試みられる。社会構築主義に立つ質的研究者は、障害者の多様で複雑な声や、障害者と健常者の権力関係に関心を向けてきた。本シンポジウムでは、社会構築主義によるこのような認識論的転回を、障害概念の第一の脱構築と捉える。第一の脱構築は、障害を实在と捉える医療モデル、欠陥モデル、悲哀モデルなどから起こる、障害者の権利の抑圧、健常者と障害者の間や障害種間の上下関係、障害への否定的なイメージを生じさせる言説や構造を明らかにすることに貢献してきた。しかし、質的研究者は、障害者を抑圧する権力構造に批判的であるにも関わらず、障害と健常を区別する二元論に自覚的か無自覚的かによらず依拠しているといえる。なぜなら、障害や障害者を研究対象や協力者とするに、障害と健常を区別する眼差しがあるからである。このような眼差しが、障害や障害者を健常や健常者と区別する文化、言説、構造を再生産してはいないか。障害を健常から区別する二元論を問い直すことを、本シンポジウムでは第二の脱構築と捉える。第二の脱構築を議論することは、質的研究の課題や限界を自覚し、障害と健常の区別を越えたフラットな地平に立つ新しい研究の可能性を検討する上で意義がある。

### 話題提供 1：楠見友輔（日本学術振興会特別研究員 PD）

筆者はこれまで、インタビューを用いた障害のある子どものアイデンティティの研究、授業の教室談話分析を通じた障害のある子どもの学習過程の研究を行ってきた。これらを通して、障害についての支配的な語りを脱構築し、障害のある子ども自身の経験や学習過程を明らかにすることができると考えてきた。しかし、インタビューや談話分析という言語中心

的な研究法からは、言語を用いない重度知的・重複障害のある子どもの経験にアプローチすることができなかった。むしろこれらの方法は、特定の子どもを研究から排除する恐れさえあったといえる。言葉を用いない子どもの経験や学習を分析することが可能となる、全ての子どもをフラットな関係で扱うことのできる研究法について検討したい。

### 話題提供 2：角南なおみ（鳥取大学医学部）

これまでの研究で、筆者は発達障害傾向のある子どもに対する教師の関わりについて検討を行ってきた。その際、「医学モデル」からの脱構築として従来の発達障害児の問題行動の改善という視点から、多因子疾患説における遺伝と環境との相互作用という観点に立ち教師と子ども、学級等の関係性に着目してその特徴を明らかにしてきた。ただし、これらは通常学級における従来のインクルーシブ教育を別の観点から再検討しているともいえ、第二の脱構築までは至っていない。本話題提供では、これまで自明とされてきた発達障害児に対する教師の関わりの困難性そのものを問い直し、さらに通常学級において発達障害という枠組みが生じない捉え方が存在するののかについても議論を深めたい。

### 話題提供 3：石渡美穂子（立教大学大学院文学研究科）

精神保健福祉における支援制度を「障害者」として利用することは、一方で「サービスの受益者としての障害者」という立場が日常において可視化されやすくなるといえる。今回は、『支援枠組の前提となる「障害観」によっていかに「障害」が立ち上がっていくのか』ではなく、『当事者の生きる具体的な文脈においてどのように「障害観」が消費され新たな意味が生産されていくのか』という問いに示唆を与えてくれる、社会文化的アプローチおよびバフチンの対話性概念を援用した談話分析手法をもとに、「健常/障害」という差異がいかに立ち上がるのか、あるいはそもそも差異が立ち上がらないコミュニケーションおよび環境はどのようなものかについて検討したい。

### 指定討論：石黒広昭（立教大学文学部）

「実体としての障害」に「抹消線」を引き、そこに「言説としての障害観」を上書きしても抹消線下で示されていた「障害－健常」の二項図式は依然としてそこにあり続けるという。この緊張状態から立ち上がる脱構築された意味とはどのようなものか。提起される問題群に対し、社会文化的アプローチ、ポストヒューマニズム、ニューマテリアリズムを参照しつつ、文脈、権力、行為主体性などについて問い返すことになるだろう。

## Deconstructing the Deconstruction of Disability

Yusuke Kusumi (Japan Society for the Promotion of Science Research Fellowships for Young Scientists PD), Moderator

Yusuke Kusumi (Japan Society for the Promotion of Science Research Fellowships for Young Scientists PD), Presenting Author

Naomi Sunami (Faculty of Medicine, Tottori University), Presenting Author

Mihoko Ishiwatari (Graduate School of Arts, Rikkyo University), Presenting Author

Hiroaki Ishiguro (College of Arts, Rikkyo University), Discussant

(Language: Japanese)

## 「ザ・ベクデルテスト」をパフォーマンスする

ーインプロ（即興演劇）とジェンダーの探究ー

企画・司会： 園部友里恵（三重大学大学院教育学研究科）

直井玲子（東京学芸大学教育学部）

上演： 菅田真理子（インプロバイザー）

中込裕美（インプロバイザー）

中村真季子（インプロバイザー）

堀光希（インプロバイザー）

飯田正人（インプロバイザー）

指定討論： 石田喜美（横浜国立大学教育学部）

### 企画趣旨

インプロ（即興演劇）は、「即興」であるがゆえに、演者の有するジェンダー観やジェンダーバイアスの影響を受け物語が構築されていってしまう。こうした問題の解決をめざして2016年に米国で考案されたのが、上演形式「ザ・ベクデルテスト」（以下「BT」）である。BTは、ジェンダーバイアスを帯びたアイデアを出すこと自体を禁止しているわけではない。そうしたアイデアが出されたとき、そこに立ちあつた演者と観客がそのパフォーマンスにおける「ジェンダー」をめぐる対話を重ねていくことを重視している。BTではこうした対話の時間が「上演の一部」として設定されている。

本シンポジウムの企画者（園部・直井）は、2021年6月、日本におけるBTの継続的实践に関心のあるインプロ演者たちと「インプロとジェンダー探究プロジェクト」を結成した。本シンポジウムでは、同プロジェクトのメンバー（菅田・中込・中村・堀・飯田・直井・園部）がBTを上演し、その後、そこでなされたパフォーマンスの意味を、演者、指定討論者の石田喜美氏（横浜国立大学教育学部）、そしてパフォーマンスに立ちあつてくださったフロアの方々とともに考えていく。

### 話題提供：「ザ・ベクデルテスト」上演

主人公は2人の女性である。BTは、彼女ら1人1人のモノローグからパフォーマンスが

始まり、彼女らのモノログによってパフォーマンスを終えるという構成をとっている。はじめのモノログの途中で、「ペインター」と呼ばれる人物と観客によって、主人公の名前やキャラクターが「色付け」されていく。

はじめとおわりのモノログの間には、主人公 1 人 1 人の多面的で複雑な姿を描き出すことを目的に、短いシーンを即興でつくっていく。これは「スナップショット」と名付けられており、1つの物語を単線的に進めるのではなく、日常の様々な場면을断片的に切りとる写真のように、いくつものシーンを複線的に展開することが重視される。

おわりのモノログでは、「スナップショット」を踏まえ、他の主人公のモノログを重ねるかたちで、交互に自らのモノログを語っていく。

パフォーマンス終了後には「Q&A セッション」と呼ばれる時間が設けられ、なされたパフォーマンスについて演者と観客との対話がなされる。(上演時間 90 分程度)

### **指定討論：石田喜美（横浜国立大学教育学部）**

本シンポジウムでは指定討論者も一人の「観客」としてパフォーマンスを鑑賞したのち、BT の「Q&A セッション」に参加する。Judith Butler (1988=1995) は、異性装者を例にあげながら、価値転倒的なパフォーマンスを可能にする空間としての劇場に注目した。BT はこのような意味での価値転倒を起こしうる場ではない。そこに持ち込まれるジェンダーの演じ方は、あくまでもインプロバイザーが生きる日常の身体の延長線上にある。「Q&A セッション」は、劇場に持ち込まれた「ジェンダーの演じ方」を、劇場空間での対話の俎上にのせることで、そこにズレを生み出していく試みであるといえる。この「Q&A セッション」を本大会で行うことでいかなる対話が生み出されるのか。その可能性に期待したい。

\* 付記：本シンポジウムは、JSPS 科研費（基盤 C）21K00205 の助成を受けている。

## **Performing “The Bechdel Test”**

Inquiry About Improv and Gender

Yurie Sonobe (Graduate School of Education, Mie University), Moderator

Reiko Naoi (Faculty of Education, Tokyo Gakugei University), Moderator

Mariko Sugata (Improviser), Performer

Hiromi Nakagome (Improviser), Performer

Makiko Nakamura (Improviser), Performer

Koki Hori (Improviser), Performer

Masato Iida (Improviser), Performer

Kimi Ishida (College of Education, Yokohama National University), Discussant

(Language: Japanese)

## 1人と出会って研究する

— 単一事例縦断研究で見えること／見えないこと —

企画・話題提供：神崎真実（立命館グローバルイノベーション研究機構）

話題提供：町田奈緒士（立命館大学生存学研究所）

話題提供：日高友郎（福島県立医科大学医学部）

指定討論：やまだようこ（立命館大学OIC総合研究機構）

### 企画趣旨

質的研究は、人々の経験や生活の場に根ざして、多様性・全体性を描き出すことを助けるものである。研究対象者の人数が1であっても、1を文脈とともに理解することができれば、多様な要素同士の意外なつながりを見出したり、一般化したりできる（Cf. やまだ, 2020）。しかし、1事例の一般化や多面的理解は容易ではない。特に1人の人と出会って調査を重ねる場合（単一事例縦断研究と呼ぶ）はなおさらである。例えば、もともと設定していた研究の焦点は、その人との関係性が深まることで容易に瓦解し、研究者の関心はその人の生全体へと広がってゆく。また、調査を重ねていく中で研究者も研究協力者も、ものの見方や考え方を変えていくため、そうした変遷をどのように切り出して、いかに研究を終えるのかも難しい問題である。本シンポジウムでは、不登校経験者の進路、トランスジェンダー当事者の語り合い、福島原発事故被災者による地域復興事業の事例を通して、単一事例縦断研究だからこそ見えること／見えないことについて検討したい。

### 「何もしたくない」という青年と人生を紡ぐ：神崎真実（立命館グローバルイノ

### ベーション研究機構）

筆者は、不登校経験者を受け入れる高校でフィールド研究を行う中で、進路選択に際して「何もしたくない」と言う高校生に出会ってきた。こうした言述は不登校経験者に限らず広く見聞きするものであるが、キャリア教育論ではあまり扱われることがない。そこで筆者は、何もしたくないと言う高校3年生タク（仮名）とインタビューを重ね、働くことや生きることをめぐる彼の展望を聞き取ってきた。タクは、生活の中に時間的余裕があることを重視していた。筆者はタクの生き様に魅了されたが、同時に、10代にして時間的余裕を優先する背景を捉えるべく、タクに同じような問いを何度も投げかけてゆくこととなった。当日は、タクと筆者双方の状況が変化しゆくなかで「時間的余裕」がどのように紡ぎだされていったのかを報告し、単一事例縦断研究の難しさと意義を考えたい。

## トランスジェンダーの人々は青年期にどのような心的風景を生きているのか：

### 町田奈緒士（立命館大学生存学研究所）

青年期にある協力者を対象に、同じく青年期にある調査者が縦断的にインタビュー調査を行う場合、社会参入の仕方やパートナーとの関係性など、直面しているテーマが重なることがある。また、時間経過の中で、初回では聞けなかったことに話を振ることができるようになるなど、関係性も深化し、インタビューで深めていく内容も変化していく。筆者は、トランスジェンダーを生きるという体験に伴われる実感や心的風景に焦点を当て、これまでに研究を実施してきた。その過程で、協力者とのテーマの重なりや、互いの生活の変化に合わせて語り合う内容が変わっていくことを実感した。本報告では、一名のトランス女性の協力者（仮名：ツバサ）とのインタビューのうち、特にツバサが知人の結婚式に参列したときの語りを取り上げ、青年期的課題とも関連付けながら、単一事例縦断研究特有の難しさや、それがもたらす知の可能性について議論したい。

## 単一事例とともにある複数事例をどう扱うか—福島原発事故避難者への縦断的

### インタビューから：日高友郎（福島県立医科大学医学部）

2011年3月に発生した福島第一原子力発電所事故により避難を余儀なくされた人々が、自らの手で被災した地元地域の除染・復興に携わる事例がある。報告者はこうした活動に従事する人々への縦断的インタビュー調査を行ってきた。成果の一部は既に論文化されており、その際には最も長期間の協力を得られた1名（仮名：鈴木氏）のみを対象とした。そのため当該論文は「単一事例縦断研究」とひとまず分類しうるものと考えられる。しかし、実際には同様の背景を持つ複数名にも縦断的な調査を実施しており、そこで得られた幅広い情報が、鈴木氏へのインタビューやその分析に活用・反映されていた。「単一事例縦断研究」と称していても、その単一事例の分析・理解にはその他複数事例からの知見が寄与する状況を、どのように扱い、報告すれば良いのだろうか。研究過程の報告と、事態の類型化とを交え、「単一事例縦断研究」の「単一」性について考察を深めたい。

## Encountering and studying one person

What we can recognize/not recognize in a single case longitudinal study

Mami Kanzaki (Ritsumeikan University), Moderator & Presenting Author

Naoto Machida (Ritsumeikan University), Presenting Author

Hidaka Tomoo (Fukushima Medical University), Presenting Author

Yoko Yamada (Ritsumeikan University), Discussant

(Language: Japanese)

## 資本主義とポスト資本主義の境界領域を探る

－政策、美的科学、政治哲学のあいだ－

企画・話題提供： 香川 秀太（青山学院大学社会情報学部）

企画・司会： 宮本 匠（兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科）

企画・司会： 山口 洋典（立命館大学共通教育推進機構）

話題提供： 大石 尚子（龍谷大学政策学部）

話題提供： 日比野 愛子（弘前大学人文社会科学部）

指定討論： 無藤 隆（白梅学園大学子ども学部）

### 企画趣旨&話題提供 1 現場とポスト資本制の政治哲学とのあいだ：香川秀太（青山学院大学）

本シンポジウムでは、温暖化、孤立、戦争等、危機に瀕するが、ますます強化されていくであろう資本主義と、その内部から生じつつも、資本制を抜け出ていく古くて新しい可能性である、ポスト資本主義とのあいだを問う。また、このあいだを問う学問領域を、「資本制 - ポスト資本制の境界領域学」（C-P 境界領域学）と呼ぶ。この取り組みの一環として、ここでは、政策論（ソーシャルイノベーション論）、美的科学論（合成美学）、ポスト資本主義哲学の3領域の接面を探る実験的、探索的なセッションを行う。

振り返れば、今に続く近代資本主義は、複数のシステム（共同体的互助、宗教的利他愛、利己的な負債・金融システム）が、多重的に混在しコンフリクトを起こしながらも、利己的な金融システムが他を飲み込んでいく形で発展した。これは、質的研究が批判してきた、数字の世界の跋扈や、脱文脈的な心理学的個体主義の発展とぴたりとあてはまる。

しかし、質的研究にも幾つかの弱点がある。第一に、その表現方法（論文的言説、言語表現）、研究者間競争は、資本主義の発展と蜜月たる従来の科学的進歩主義を継承した。また、現場のローカリティを重視するゆえ、資本主義含む世界システム論や政策論に欠けていた。従来の質的研究は、ポスト資本主義の萌芽を生みつつ、資本制の枠内にある。もしポスト資本主義の哲学をふまえるならば、むしろ現場を重視しつつも、科学と芸術の融合を図る合成美学、世界システムを問う政策論、そして国家論とのあいだを問う必要があるだろう。

さすれば、質的研究という「枠組み」はより開放され、数量研究と共に新しい土台が顔をのぞかせ始める。マズローは通常、「クールに」事実を明らかにする近代科学に対し、むしろ事実を最高度に突き詰める試みが、「事実への愛」に変わるとして、「科学は芸術と見分けがつくだろうか？ 愛とは、宗教とは、哲学とは見分けがつくだろうか？」と問うた。本セ

ッションで創出したいのは、まさしくこの方向に向かう“失敗空間”である。

## **話題提供 2 ソーシャル・イノベーション醸成のための政策展開—欧州・イタリアを事例として—： 大石尚子（龍谷大学）**

EU 戦略 Europe2020 の政策の柱はソーシャル・イノベーション（以下 SI）であった。背景には、社会的企業や技術革新による成功事例は多数見られるものの、その効果は地域や分野に限定され、より大きなスケールのイノベーションには至っていなかった。求められたのは EU 圏に跨る社会システムの変革であり、Europe2020 が目指したのは、そうした SI 醸成のエコシステム構築であった。そこには、分野間・セクター間、レベル間のコミュニケーションが必要となる。ここでは、イタリアの条件不利地域におけるボトムアップ型 SI の事例を通じて、EU が政策として展開する SI について議論を深めたい。

## **話題提供 3 科学とアートの融合が見る未来：日比野愛子（弘前大学）**

近年、科学とアートという異分野の接近に注目が集まっている。アートは、科学的実践の先端（AI、バイオ素材等）を表現媒体として食欲に取り込むことで可能性を広げている。他方、ここで注目したいのはアートを取り込む科学の動きである。合成生物学や気候科学といった分野はアート実践を積極的に取り込んでいる。本発表では、事例を参照しながら、科学にとってのサイエンスアートの意味を「モノ」「情動」「未来」「巻き込み」の観点から検討していく。ここに見出される科学の変容（の萌芽）は、自然科学に限られるものではない。人文社会科学の理論的視座や表現媒体の変容可能性もまた示されている。

# **Exploring Boundary Zone between Capitalism and**

## **Post-Capitalism:**

Hybridizing Policy, Aesthetic science, and political philosophy

Shuta Kagawa (Department of Social Informatics, Aoyama Gakuin University),  
Organizer & Presenting Author

Takumi Miyamoto (Graduate School of Disaster Resilience and Governance,  
University of Hyogo), Organizer & Moderator

Hironori Yamaguchi (Institute for General Education, Ritsumeikan University),  
Organizer & Moderator

Naoko Oishi (Faculty of Policy Science, Ryukoku University), Presenting Author

Aiko Hibino (Faculty of Humanities and Social Sciences, Hirosaki University),  
Presenting Author

Takashi Muto (Department of Child Studies, Shiraume-Gakuen University),  
Discussant

(Language: Japanese)

口 頭 発 表  
Oral presentations

A1 口頭発表 10/24 8:30-10:30 Zoom Room 1  
(大会賞選考セッション 座長：尾見康博)

A1-1

**女性における化粧行為の選択傾向に関する日中比較研究**

**A comparison of Females in preferences of make-up in Japan and China**

李佳祺・木戸彩恵（関西大学大学院心理学研究科）

Li Jiaqi, Kido Ayae (Graduate School of Psychology, Kansai University)

化粧は、容貌に変化をもたらす行為であり、対人関係においても大きな効果を発揮する。また、現代社会において、化粧行為は外見管理だけでなく、社会マナーの一部になってきている。特に日本では、化粧の効果が広がり、他者との円滑な関係を展開していくための社会的スキルの一つと言える。しかし、化粧行為に関する先行研究によって、文化圏に関わらず、社会的な期待を受け、社会的方向づけられ、積極的に化粧をするという傾向を示していない女性が多いことが分かる。

したがって、本研究では、通勤やアルバイトなど日常生活において意識的に化粧をする、日本と中国の女性協力者各 10 名をインタビューーとして選定する。協力者と面接し、両国の女性が異なる文化背景において、「化粧を選択する」理由について検討する。また、その心理的コンプレックスを生じる社会における共通認識と国の文化からの影響を研究していく。

A1-2

**相反する 2 つの生き方を語る成人期ゲイ男性のアイデンティティ構築—ポジショニング理論による 2 事例の検討—**

**Identity construction of adult gay men who narrate two conflicting ways of life—Investigation of two cases by positioning theory—**

太齋慧（東京大学大学院教育学研究科）

DAZAI Kei (Graduate School of Education, The University of Tokyo)

社会からの異性愛的生き方への圧力が強まる成人期において、ゲイ男性はどのようなアイデンティティをどのように語り構築しているだろうか。成人期のゲイ男性 15 名を対象としたインタビューデータより、現状のゲイとしての生活と理想とする異性愛的生き方への志向という相反するテーマを語った 2 名に焦点化し、ポジショニング理論を援用して分析した。その結果、自身の性的指向を肯定しつつ差別的ディスコースと折り合えるような、相反する 2 つの生き方の可能性を保つアイデンティティが見出された。このアイデンティティは、「感情重視」ディスコース、「標準的家庭」ディスコース等の社会のディスコースによりそれぞれの生き方の語りが規定される中、生き方の選択に関し統制可能性を自己に付与し、異性愛者的立場の自己を強調する発話行為によって構築されていると考えられた。一方で例外的なポジションが見出されたことから変容可能性も示唆された。

A1-3

**「川の記憶」の語りを伝承する—災害・地域レジリエンス向上とまちづくりに寄与する  
ライフストーリー研究—**

**Handing down the narratives of “memories of the river”: The life story research  
that contributes to improving disaster / local resilience and community  
development**

杉浦彰子（茨城大学 地球・地域環境共創機構）、藤田由美子（日本原子力発電株式会社）、関口豪之（日本原子力発電株式会社）、馬場紗矢香（茨城大学人文社会科学部現代社会学科）、伊藤哲司（茨城大学人文社会科学部現代社会学科）

Sugiura Shoko (Global and Local Environment Co-creation Institute, Ibaraki University)、Fujita Yumiko (The Japan Atomic Power Company)、Sekiguchi Hideyuki (The Japan Atomic Power Company)、Baba Sayaka (College of Humanities and Social Sciences, Ibaraki University)、Ito Tetsuji (College of Humanities and Social Sciences, Ibaraki University)

2019年10月に来襲した台風19号（令和元年東日本台風）の被災地の1つである那珂川流域の水戸市飯富地区は、茨城大学水戸キャンパスから数キロしか離れていない地域である。本研究は、飯富地区をフィールドとして、住民、調査者（研究者、学生）が対話をとおして災害・地域レジリエンス向上とまちづくりにつなげていくことを目的としている。本研究の特徴は、住民と調査者が一緒に現場を訪れ、そこでの語りを記録することである。予備調査の結果、住民が水害現場に身を置きながら語る内容は、被災当時の様子だけでなく、子どもの頃のエピソードや両親から語り継がれた水害の記憶など、さまざまな「川の記憶」を蘇らせるものであった。今後、住民のライフストーリーに着目し、蘇った「川の記憶」を他の住民とも共有し、そこで共同生成される新たな語りをを用い、住民が主人公となる災害・地域レジリエンス向上やまちづくりにつながるワークショップなどを試みる。

A1-4

**グループにおける関係性攻撃に関する検討--傍観者に着目して--**

**Relational aggression in group: Focusing on bystander**

和智遥香（東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース）

Wachi Haruka (Division of Clinical Psychology, Graduate School of Education, the University of Tokyo)

我が国では四層構造（森田ら，1986）のようにいじめを集団で捉える考え方が主流で、「見て見ぬふりをする」傍観者を仲裁者に変えることが目指されている。しかしグループでのいじめでは傍観者が加担しやすく、黙って見ているという消極的な参加が加担になることが示唆されており（Adler et al., 1995）、傍観者には「見て見ぬふりをする」以上の側面があることがうかがえる。そこで本研究では傍観者について再検討するために、傍観者がどのような自己像を形成しているかを検討することを目的とした。大学生4名を対象にインタビューを行い、ポジショニング理論を用いたディスコース分析を援用して検討した。その結果、傍観者にも加担的な側面や被害的な側面など多様な側面があることが示され、生徒を傍観者のような1つの立場に割り振るのではなく、諸立場の総計として捉える必要があることが示唆された。なお本調査は所属機関に倫理申請を行い、書面による同意の上で行っている。

A1-5

### **複線径路等至性モデリングにおける等至点概念の拡張：記号論的動的文化心理学の視座から**

#### **Developing the Concept of Equifinality Point in Trajectory Equifinality Modeling: From the Perspective of Cultural Psychology of Dynamic Semiosis**

土元哲平（立命館大学 OIC 総合研究機構）・小山多三代（東京外国語大学大学院総合国際学研究科博士後期課程）

Teppei Tsuchimoto (Research Organization of Open Innovation and Collaboration, Ritsumeikan University)・Tamiyo Koyama (Doctoral Program, Graduate School of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies)

これまで、複線径路等至性モデリング(TEM)における等至点の概念は、協力者がある出来事や目標に至った点として理解されてきた。TEMにおける協力者の選定は、等至点に基づいており、これまでは、過去や現時点で等至点に「到達した」事実を出発点として描かれる場合が多く(過去・現在志向)、「到達していない」人生径路は研究対象になりにくかった。しかし、行為の継続や意欲の維持が研究関心となる場合(例：言語学習、ダイエット、禁煙)、それを実現できた人だけでなく、まだ実現できていない人(実現を目指している人)の径路も理解しなければならない。つまり、人が未定の未来に向かって、葛藤しながらも習慣づけを目指すプロセスを理解することも重要である。本発表では、日本語学習意欲を学習行動に繋げることを困難に感じている外国人材の事例を挙げ、記号論的動的文化心理学の視座から、等至点を未来志向の概念として拡張することを提案する。

A1-6

### **リアリティを問う**

#### **Questioning Reality**

大山 星馬（青山学院大学社会情報学研究科）

Seima Oyama (Graduate School of Social Informatics, Aoyama Gakuin University)

神や霊といった非体験的な存在について人々が感じるリアリティが生成され、強化されていく過程を質的にアプローチする理論的視座を提示する。オンラインのやりとりから、現実には存在しない「Q」と呼ばれる陰謀組織とドナルド・トランプが戦争をしていると信じた人々が関与していたホワイトハウス占拠事件は記憶に新しい。近年、陰謀組織など非体験的存在を人々が認めていく過程を理解することが期待されていると言えるだろう。本発表ではまず、非体験的なリアリティとはどのような性質の現象であるのかを示す。次に従来の研究方法からアプローチすることの限界を示した上で、人類学で議論されてきたネットワーク論から実践の相互行為を整理することでリアリティ強化の過程が理解可能になることを示す。

A2 口頭発表 10/24 8:30-10:30 Zoom Room 2  
(座長：石井宏祐、鴨澤小織)

A2-1

### **訪問看護師が訪問介護員との協働を実感していくプロセス**

**The process by which home visiting nurses experience collaboration with home helpers**

濱谷雅子 (東京都立大学大学院 人間健康科学研究科)

Masako Hamatani (Graduate School of Human Health Sciences, Tokyo Metropolitan University)

本研究の目的は、訪問看護師は訪問介護員とどのように協働しケアを行っているのか、そのプロセスを明らかにすることである。訪問看護歴5年以上の看護師6名を対象にインタビューを実施し、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した。所属機関倫理委員会の承認を得た。協働のプロセスは「互いの意義・役割の明確化」からスタートし、「互いの実践の共感的理解」を経て、「協力的ケアの循環」というゴールへと繋がっている。訪問看護師はタイムリーなエピソード交換などを行いながら、相手を知るチャンスをつくる。互いの人となりやケアを直接知る機会に加え、訪問介護員のケアに信頼感がもてる、看護職として期待に応えられているといった実感の蓄積が「互いの実践の共感的理解」へと繋がっていく。そして遊び心のあるコミュニケーションや振り返りなどを通し、親近感と一体感が高まることで、それは「協力的ケアの循環」へと進展する。

A2-2

### **自らの気がかりな応答をめぐる臨床心理士の嗜癖的な経験**

**Addictive experiences when clinical psychologists are concerned about their responses.**

石井宏祐 (佐賀大学教育学部)

Kosuke ISHII (Faculty of Education, Saga University)

石井(2015)は、嗜癖的な症状や問題行動のみならず、よかれと思っとうまくいかない無理なコントロールにとらわれる傾向をも包含した「嗜癖性」に着目し、嗜癖的な対人援助の危険性について示唆した。そこで本研究では、自らの気がかりな応答をめぐる臨床心理士(CP)の嗜癖的な経験について、非構造化面接法によるインタビュー調査と現象学的分析によって検討した。5年以上の経験を有する問題解決型アプローチをオリエンテーションにもつCP3名を対象にした。

その結果、気がかりな応答は、CPがよかれと思っとうまくいこうとする際、諸々の事情で自身の意思を優先してしまい、意図せずにクライアントとの関係が対立的になってしまう状況で起こることが示唆された。また、気がかりな応答を後で振り返る際には、自由な発想を自ら抑えてしまうことも示唆された。

以上により、嗜癖的な対人援助の危険性の一端が、具体的に明らかにされたといえよう。

A2-3

### **社会福祉専門職へのロールシャッハ・フィードバック・セッションにおける自己理解過程**

#### **Self-understanding process in the Rorschach feedback session on the social welfare professionals**

土井裕貴（日本福祉大学 教育・心理学部）

Yuki DOI (Nihon Fukushi University Faculty of Education and Psychology)

本研究では、3名の社会福祉専門職を対象に、ロールシャッハ・フィードバック・セッション（以下、RFBS）を実施することで、自己理解を深める一助とし、その過程を明らかにすることを目的として、次の①～③の手続きを1カ月ごとに実施した。まず①では、現在の職務内容や職務負担等についての半構造化インタビューと心理検査（ロールシャッハ・テスト、MMPI、PF スタディ）の実施、次に②では、心理検査から得られた結果をフィードバックするフィードバック面接、最後に③では、①や②の全体について振り返るフォローアップ面接を行った。それらの内、②③の録音を文字起こしし、質的分析を行った。その結果、対象者が徐々に心理検査の結果と、職務上の困難や課題、自らの特性を照合しながら整理し、自己理解を深める過程が示された。なお、本研究は所属機関の倫理審査承認後に実施され、対象者から学会発表の承諾を得ている。

A2-4

### **不安定な社会規範のなかでの模索—小規模事業者の新型コロナ対応の語りから—**

#### **Struggling in Unstable Social Norms: Small Businesses in COVID-19 Disaster**

松原悠（京都大学大学院情報学研究科）・大門大朗（京都大学防災研究所・日本学術振興会・デラウェア大学災害研究センター）

Matsubara Yu (Graduate School of Informatics, Kyoto University) and Daimon Hiroaki (Disaster Prevention Research Institute Kyoto University, JSPS Research Fellow(CPD), University of Delaware Disaster Research Center)

発表者らは、飲食店や観光業をはじめとする日本国内の10以上の小規模事業者を対象として、2021年7～8月にかけて、新型コロナウイルス感染症対応に関する半構造化インタビューを実施した。本発表では、行政の方針や世間の「空気」が時々刻々と変化するという不安定な社会規範のなかで、小規模事業者がどのように事業の休止・再開・変更といった判断を行ってきたのかを明らかにする。データの分析から、感染症流行前の社会規範が通用しなくなるなか、小規模事業者らが自事業の規範を手がかりにしながら社会との関係を維持・再構築していくプロセスが見出された。これをもとに、大規模地震といった自然災害時の社会規範の変化に関する先行研究を援用しながら、不安定な社会規範のもとでの行動に関する議論を行い、概念的な整理を進めることを試みる。（なお、インタビュー対象者には予め研究趣旨およびデータの扱いについての説明を行い、同意を得ている。）

A2-5

### **社会貢献活動を目指す女性たちのライフヒストリー～複線経路・等至性モデルアプローチによる考察～**

#### **Life story of women aiming for social contribution activities**

鴨澤小織（日本大学）

Saori Kamozaawa (Nihon University)

近年、先進諸国では政府、民間企業に次ぐサードセクターとして、非営利組織は社会の中で重要な役割を持つようになり、組織の形も多様になってきている。日本においても非営利組織が拡大、社会貢献活動に魅力を感じる若い人たちが増えている。また、福祉課題として不十分なサービス分野、新しい社会課題の分野、いわゆる狭間にある社会課題の分野で、当事者家族などの女性が支援団体を立ち上げ、社会システムを自分たちで変えようと、社会貢献活動への強い意欲を持つようになってきている。

本研究では、特に医療的ケア児のデイサービス、女性支援などの非営利組織に焦点を当て、社会貢献活動を行っている女性の経験をライフストーリー分析から捉えることを目的とした。その際、複線経路・等至性モデル（TEM）を用いて分析を試みることで、活動に関わることを選択した語りを分析し、当事者にとって社会貢献活動がどのような意味を帯びていたのかを考察する。

A2-6

### **心理療法におけるクライアントとセラピストの体験の「ズレ」**

#### **: 終結期に着目したNPCSに基づく心理療法プロセスの質的分析**

#### **The “gap” between clients’ and therapists’ experiences in psychotherapy**

#### **: A qualitative analysis of the psychotherapy process based on NPCS focusing on the termination phase**

小泉 誠（甲子園大学心理学部）

Makoto Koizumi (Department of psychology, Koshien University)

心理療法のトランスクリプト分析法として、Angus, et al. (1999)のNarrative Process Coding System（以下、NPCS）がある。開発者によると、NPCSは量的分析にも質的分析にも適用可能である。しかし、先行研究では量的分析が大半であり、質的分析はほとんど行われていない。心理療法の当事者であるクライアントとセラピスト両者の体験の質を明らかにするためには、心理療法場面の精緻な質的分析が必要である。本研究では、発表者が担当した心理療法事例の終結期7回分のトランスクリプトを分析対象とした。クライアントとセラピストの体験の「ズレ」の様相を明らかにすることを目的とし、NPCSを用いて質的分析し、内容、構造、形式の観点から考察した。本事例の研究・発表は施設長からの許可を得た上で、クライアントに口頭および紙面で承諾を得ている。本事例終結から5年以上経過している。

A3 口頭発表 10/24 8:30-10:30 Zoom Room 3  
(座長：矢守克也、保坂裕子)

A3-1

**「まちのことばをつくる」プロジェクトにおける「まちのことば」－自己エスノグラフィーによる分析の試み－**

**What is “A language in the city” ? : An attempt at analysis through autoethnography**

佐野香織 (長崎国際大学 人間社会学部)

Kaori SANO (Nagasaki International University Faculty of Human and Social Studies)

本研究は、「街のことばを知る、考える、創る」プロジェクトをジェネレーターとして行っていた発表者の「まちのことば」を記述的に分析するものである。本プロジェクトについては、プロジェクト参加者である、まちに住む大学留学生、まちの人々にとっての「まちのことば」の考察を行っている (佐野, 2020)。本研究では、本プロジェクトを立ちあげた発表者の「まちのことば」について、自己エスノグラフィーを用いて分析、考察する。発表者も共に学び手としてつくることに参加することを通して、日常を営む「まちのことば」がどのようなものであるのか、どのように「まちのことば」をつくり、関わってきたのか、「まちのことば」観を描く。

A3-2

**巣ごもりフィールドワーカー—コロナ禍におけるリモート防災実践の現場から**

**Remote Fieldwork: Doing Fieldwork from Home on Natural Disaster Risk Reduction in the Covid-19 Pandemic**

矢守克也・舟橋宗毅・岡田夏美・原夕紀子・中野元太 (京都大学防災研究所)

Katsuya Yamori, Muneki Funahashi, Natsumi Okada, Yukiko Hara, Genta Nakano (Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University)

コロナ禍で、研究者が現場に物理的に身体を運べないことは、フィールドワークにとって、一見、明確なマイナス材料である。しかし、現場研究の危機は、それについて根底的に再考する好機でもある。実際、コロナ禍を逆手にとった現場研究を模索しようとする動きがある。本発表では、防災・減災の領域を事例として、リモートでもできたことではなく、リモートだからこそ生まれた新境地と位置づけうる現場研究について報告する。第1は、掲示・放送・手紙といったリモート・メディアを使って、外国人居住者や高齢者の避難訓練への参加率を向上させた事例である。第2は、地理情報システムのオフセットモードを利用して、高齢者の避難行動について離れた場所で実地検証し、その結果を防災と健康づくりを一体化させた取り組みとして提案している事例である。いずれも、リモートによるリアルな補完ではなく、リモートならではの新たな手法を提案した事例である。

A3-3

**アクションリサーチのチェーンド・ビジュアル・エスノグラフィー防災実践の多声的・多角的現実の表現**

**Chained Visual Ethnography of Action Research: Multi-voiced and Multi-angle Reality of Disaster Risk Reduction Practices**

中野元太（京都大学防災研究所）

NAKANO, Genta (Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University)

矢守克也（京都大学防災研究所）

YAMORI, Katsuya (Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University)

本研究はアクションリサーチに関与する共同当事者らの「羅生門的現実」を可視化し、それに対応して多声的で多角的なベターメントを表現する手法として、チェーンド・ビジュアル・エスノグラフィを提案する。メキシコでの防災活動を事例として、まず、研究者自身が撮影・編集したビジュアル・エスノグラフィ（VE）を制作した。次に、研究者から見た現実表現としてのVEを複数の共同当事者らと視聴し、VEに対する共同当事者らのフィードバックをコメントビデオ（CV）にまとめた。そして、VEと複数のCVとして表現された「羅生門的現実」を可視化するウェブサイトを構築した。これにより、共同当事者は、「羅生門的現実」を踏まえて、多声的で多角的な視点をもってその後のベターメントにあたることができる。さらに、その成果が新たなVEとCVを生むこと（チェーンド・ビジュアル・エスノグラフィ）で、アクションリサーチのさらなる展開を支えることができる。

A3-4

**COVID-19 時代における東日本大震災の復興—茨城県大洗町を例に—**

**The Community of Recovery Process after COVID-19~Ibaraki Prefecture Oarai Town~**

李勇昕（京都大学防災研究所）・矢守克也（京都大学防災研究所）

Fuhsing LEE (Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University), Katsuya Yamori (Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University)

東日本大震災から10年を経て、復興事業は一定の成果をあげ、地域振興のステップに移行する地域が増えつつある。例えば、イベントや祭りの開催などで国内外から観光客を誘致することで「関係／交流人口」の増加を図り、観光産業を振興して、さらなる経済活性化を目指す地域が見られる。しかし、そうした地域がCOVID-19の拡大により、新たな課題に直面している。一部の被災地では、感染防止のため集客による地域振興が見込めなくなり、方針転換の見直しが急遽迫られているのである。本発表は、東日本大震災の被災地で、現在も復興過程にある茨城県大洗町を中心に、地域の取り組みとその発展を3つの時間軸、東日本大震災の震災前、震災後、そしてコロナ禍以降で報告する。また、大洗町における感染症という災害の中で、住民が受動的に政策に従うだけでなく、防疫や地域振興などに対して、主体的に取り組む事例を紹介する。

A3-5

**「こどもの貧困」をめぐる課題についての発達のワークリサーチ①：大阪における『おかえり』の実践から見える具体的課題へのまなざし**

**Developmental Work Research on measures against “Child Poverty” ①: A case study of “OKAERI” in Osaka**

保坂裕子（兵庫県立大学環境人間学部）

Yuko HOSAKA (University of HYOGO)

近年、「子どもの貧困」問題は大きな社会問題として取り上げられ、国内においてもさまざまな対策が講じられている。本研究では、大阪において多世代型食堂として貧困問題に取り組む、お食事処『おかえり』を中心とした民間の活動に着目し、そこでの2年にわたるフィールドワークに基づき、見出された課題について検討する。『おかえり』の活動において発表者は、活動の代表者および活動に賛同するサポーターたちとともに活動している。『おかえり』に集まってくる子どもたちの課題について話し合い、具体的対応を考えるなかで、必要な地域連携のカタチを探っているところである。発達のワークリサーチ（エンゲストローム，1999）では、具体的実践の課題（矛盾）を描き出し、その解決へ向けた活動システム全体の再構築を目指す。本発表では、さまざまな『おかえり』の課題対応から見えてきた、今後の貧困対策における検討課題について提言してみたい。

B1 口頭発表 10/24 10:45-12:45 Zoom Room 1  
(大会賞選考セッション 座長：安田裕子)

B1-1

**精神障害当事者でもある支援者は就労支援をどのように体験しているか**

**How a supporter who also has mental disorder, works as employment support staff?**

駒澤真由美 (立命館大学 生存学研究所)

Mayumi Komazawa (Institute of Ars Vivendi Ritsumeikan University)

本発表は、精神障害当事者でもあり就労移行の支援者でもある一人の男性が「支援する立場」をどのように体験しているかを、協働構成的な対話によるライフストーリー・インタビューを通して明らかにするものである。本人がリカバリーのロールモデルになってエンパワメントされるというモデル・ストーリーにこだわるのは、職を得たい当事者に精神障害を開示させて「ピアスタッフとして就労したい」と言わせてしまうような社会構造があるからだ。さらに専門職のあいだで「当事者性を支援に活かすな」という暗黙のルールが存在するからこそ、「当事者性を活かして働ける」ピアスタッフに当事者の関心が寄せられていくという構造があることが本事例からも看取できた。本事例は、固定された当事者性概念が前提となってしまうような支援の現場や就労モデルに対して警鐘を鳴らすものである。なお本研究は研究倫理審査委員会の承認 (衣笠-人-2017-89) を得て実施した。

B1-2

**Days-After の視座を用いたアクションリサーチ**

**Action Research Using the Days-After Perspective**

杉山高志 (京都大学防災研究所) ・ 矢守克也 (京都大学防災研究所)

Takashi Sugiyama (Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University) ・

Katsuya Yamori (Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University)

本研究は、まだ起こっていない災害現象をもう起こったこととして捉える Days-After の概念を用いて、高知県黒潮町の住民に対するアクションリサーチを行った。Days-After とは、災害の発生を確率として捉えるのではなく、将来必ず起こるものとして捉えて語る視点である。本研究では Days-After の視座を用いて、「災害が起こってしまった後、あなたは何を残したいですか」という質問等を使ったアクションリサーチを実施した。その結果、Days-After を用いた質問をきっかけに、住民は日常生活を振り返り、その日常を守るための防災行動を考えるようになった。例えば、避難所生活に直接的に役立たず非常持出袋に入れる必要はないと思われていた写真や文集などを、非常持出袋に備蓄するようになった。つまり、発災が不可避な未来を考えることによって、今の生活に対するかけがえのなさを実感し、その日常生活の価値の再発見によってさらに新たな防災行動を引き出していたといえる。

B1-3

### **ゲーム依存についての依存・回復モデルの検討 ——ライフライン法を用いたインタビュー調査**

#### **Exploring the addiction and recovery model about game addiction: An Interview Survey Using the Lifeline Method**

古賀 佳樹 (中京大学大学院心理学研究科)・川島 大輔 (中京大学心理学部)

Yoshiki Koga (Graduate School of Psychology, Chukyo University),

Kawashima Daisuke (School of Psychology, Chukyo University)

【目的】本研究では、実際にゲーム依存の問題で診断を受けた者を対象にインタビュー調査を行うことで、ゲームへの依存プロセスおよび、回復のプロセスについて検討した。

【方法】ゲーム依存経験者の男性 8 名を対象にインタビューを行った。それぞれ個別に 1～3 時間程度のインタビューを 3 回ずつ実施し、ライフライン法を併用した半構造化インタビューを用いた。

【分析】インタビューの語りの分析は、KJ 法に準じた一連の手順で行った。8 名全員のデータを分析した後、分析によって抽出された上位ラベルを集め、8 人分計 156 枚のゲーム依存に関する語りのカード (上位ラベル) を用いて、分析を行った。

【結果と考察】分析の結果、8 名のゲーム依存経験に関する語りは大きく 3 つのまとまり (「依存へのプロセス」, 「回復のプロセス」, 「回復のための資源」) からなることが分かった。さらに、それぞれのプロセスのパターンやステップについても明らかにした。

B1-4

### **異なる音韻圏における名乗り方の種類と人間関係構築への影響**

#### **Types of Name Calling in Different Phonological Sphere and Their Effects on Relationship Building**

進藤あおい (マツダ株式会社)・隅本雅友 (立命館大学)・サトウタツヤ (立命館大学)

Shindo Aoi (Mazda Motor Corporation), Sumimoto Masato (Ritsumeikan University),

Sato Tatsuya (Ritsumeikan University)

本研究では、異なる音韻圏での名乗りの場で発生する「名前を呼ばれない」「呼ばれやすい名前に変える」という現象に注目し、こうした状況下での反応と対処のプロセスについて検討した。まず日本人と日本移住者を対象にアンケートを実施し、8 つの名乗り形態の存在を明らかにした。次に日本人に多く見られたものと日本移住者に多く見られたもの各 1 つを取り上げ、それぞれインタビューと TEM 分析を行った。その結果この 2 つの名乗り形態には、母語と母国文化に対する愛着とこだわりがあるという共通点が見られた。一方で、日本人と日本移住者では名前に対する価値観が異なるということが明らかとなった。また、名乗りが定着するまでに変遷があることから、異なる音韻圏での名乗りは、その他での人間関係構築の在り方を決める出来事であると言える。そして、非母語音韻圏における名乗り形態を理解し活用することは、異文化における人間関係構築の理論に新しい示唆を与える可能性がある。

B1-5

**障害のある同胞を亡くした「きょうだい」のグリーフを規定するもの**

**Factors of sibling grief after the death of children with special needs**

若子静保（東京大学大学院教育学研究科）

Shizuho Wakako (Graduate School of Education, The University of Tokyo)

これまでのグリーフ研究においては、生前から死別後の体験の連続性に着目した研究はほとんどみられず、特に、同胞と親子に近い関係性を築いたり、親から子どもとしてケアされにくかったりする、障害のある者の「きょうだい」の抱えるグリーフのありようは明らかになっていない。そこで、本研究では、障害のある同胞を亡くしたきょうだい2名のライフストーリーの語りから、きょうだいが体験するグリーフと生前の体験との関連性について明らかにすることを目的とした。その結果、同胞生前におけるきょうだいの体験から生まれた価値観やその頃の家族関係が、死別後の喪失体験に影響を与えている様子や、生前からの母と同胞を支えるという思いが、死別後にもきょうだいの行動を規定している様子などが明らかになった。このことから、きょうだいのグリーフは死別後だけでは捉えきれず、きょうだい支援からの橋渡しが必要であることが示唆された。

B1-6

**ベトナム人技能実習生と日本人雇用主との間のコミュニケーションのズレ**

**—相互理解不足をまねく社会的・文化的要因の検討—**

**Communication gap between Vietnamese technical intern trainees and Japanese employers—Examination of social and cultural factors that lead to lack of mutual understanding—**

グエン・ティ・テャック・ガン（茨城大学人文社会科学部現代社会学科）

NGUYEN THI THACH NGAN (College of Humanities and Social Sciences, Ibaraki University)

近年日本の人口は継続的に減少している。これに伴う労働力不足確保のため、外国人技能実習生の受入れが増加し、ベトナム人による窃盗や失踪などの問題が多発している。筆者は技能実習生の受入れをサポートする2つの組合で通訳者として6年間働いてきた。仕事を通して知ったのは、実習生と雇用主の関係が良好な会社がある一方、関係が悪く問題を抱えているところもあることである。それらの問題の多くは、小さなコミュニケーションのズレが重なり、大きなトラブルに発展するパターンである。こうしたことから、技能実習生側と日本人側とのコミュニケーションで生じるズレと、相互理解不足をまねく要因を検討する必要がある。本研究では、茨城県のベトナム人技能実習生が置かれた状況を把握し、そこに生じている日本人雇用主との間のコミュニケーションのズレの社会的・文化的要因を明らかにすることを目的として、参与観察およびインタビュー調査を実施する。

B2 口頭発表 10/24 10:45-12:45 Zoom Room 2  
(座長：浅井亜紀子、松熊亮)

B2-1

**英国におけるフィリピン人看護師の職場と職場外における主観的ウェルビーイング**  
**Filipino Nurses' Subjective Well-being in Professional and Private Life in the UK**

浅井亜紀子 (桜美林大学リベラルアーツ学群)

Akiko Asai (College of Arts & Sciences, J. F. Oberlin University)

「我々は労働力を呼んだが、やってきたのは人間だった」というフリッシュの言葉は、移民受け入れは単なる労働ロボットではなく、生身の人間を受け入れる覚悟を示す。日本は2008年二国間経済連携協定開始以来、インドネシアなどから看護師・介護福祉士を受入れてきた。浅井・箕浦(2018)は10年の調査から、外国人看護師らの日本への定住化を探るためには、職場や職場外の生活での主観的ウェルビーイング(SWB)(Diener, 1984)、つまり生活の満足に関わる個々人の意味づけをみる必要を主張している。本研究は、移民の歴史の長い英国で働くフィリピン人看護師への聞き取りもとに、彼らのSWBについて検討する。仕事では母国より高い賃金や労働環境の良さ、母国に送金できる満足があった。職場での差別には専門職として対処しSWBを維持していた。しかし、母国の家族と離れる寂しさ、母国の医療制度の悪さはSWBを低めている。SWBの概念の有効性と今後の日本の受け入れへの示唆を行う。

B2-2

**ソーシャルビジネスに取り組む起業家のライフストーリー**  
**—事業立ち上げ意欲の醸成と発展プロセスに着目して—**

**Life story of an entrepreneur working on social business : Focusing on the motivations to start a business and the development process**

姜悦 (茨城大学大学院人文社会科学研究科)

Jiang Yue (Graduate School of Humanities and Social Sciences, Ibaraki University)

本研究では、現在活躍しているソーシャルビジネスに取り組む起業家のライフストーリーから、彼ら彼女らはどのように社会の細部に存在する諸課題を発見したのかを掘り起こす。そして、社会的課題の発見から事業立ち上げへと至る意欲醸成と、その発展のプロセスに着目して、社会的課題を対象とした仕事で起業するまでの経緯とその発展パフォーマンスについて検討を行う。事業現場での参与観察、および半構造化インタビューを行なうことを通じて、ソーシャルビジネスに取り組む起業家の起業要因(社会的要因・内的要因)を明らかにすることを、本研究の目的とする。ライフラインに沿って起業家のライフストーリーを起業前・起業時・起業継続中(現在まで)という3つの段階に分け、社会的課題に対するアイデアの発見から事業立ち上げ、拡大期のすべての過程において事業ミッションがどのように影響されているかに注目した分析・考察を行う。

B2-3

**課題への対応や困難の克服に求められる自己変容：**

**省察と意味づけを深める問いかけの考察**

**Self-Transformation required in finding solutions and overcoming difficulties: Questioning to deepen Reflection and Interpretation**

加藤誠也（東京工業大学）

Kato Seiya (Tokyo Institute of Technology)

イノベーションあるいはトランスフォーメーションを主題とする今日の企業経営および取り組みの現場では、実務者は自己変革を求められ葛藤する。

R. キーガン (Kegan, 1982, 2006) や K. フィッシャー (Fischer, 2002) など、人の成長や変容に関わる先行研究は、成長・変容の軌道や推移およびその進捗を図る上での道標を明らかにしているが、その過程における苦悩や葛藤をいかに克服していくかという観点からの究明は見られない。

本研究は、企業実務者を対象に自らの葛藤の克服、変容・成長の経験を聴き取るインタビュー調査を実施し、人がさまざまな出来事と自己とを対照させながら揺れ動き進展する、再帰的な行為としての自問自答の連鎖に着目した。

調査対象者の語りに読み取れる、解釈・理解を転換して新たな意味づけ導き出す過程の逡巡・停滞や揺らぎを SCAT 分析を用いて整理・考察した結果、葛藤を克服し変容を図る問いかけの要件を明らかにするとともにその組み立てモデルを提示した。

B2-4

**働くことの意味を中心に据えたプロフェッショナリズムの研究へ**

**Suggesting the study of professionalism developed by understanding the meaning of Working**

松熊 亮（文教大学）

Matsukuma Ryo (Bunkyo University)

仕事に対してある種の倫理観や目標意識をもち、一定以上の水準の技術や知識を発揮する人々を、私たちはよく「プロフェッショナル」と呼ぶ。こういったプロフェッショナルは「商売だから」「売れてもらうため」「使う人に喜んでもらうために」など、生産活動の外側にいる他者や社会に紐づいた形で倫理を表出することも多い。しかし、この専門家の倫理に含まれる生産活動の外側へ向けた社会的視点は、熟達化理論、実践共同体の成員性としてのアイデンティティ、仕事の選択や適応に浮かび上がるキャリアといった従来の観点では十分に検討されてこなかったものといえるのではないだろうか。本発表では、こういった社会的義務や社会貢献を伴う倫理を仕事という活動の特徴と結びつけて検討する枠組みを提案し、仲間や実践文化へのコミットとも、個人の好き嫌いや自己目的的选择とも違う職業人の社会的態度への接近法を論じる試みを行う予定である。

B2-5

**日本人ビジネスパーソンのグローバル人材へのキャリア発達～Auto-TEM（複線径路等至性モデリング）を用いて～**

**Career Development of a Japanese Businessperson to become a Global Professional analyzed by Auto-TEM (Trajectory Equifinality Modeling)**

五十嵐 篤（社会情報大学院大学実務教育研究科）・伴野 崇生（社会情報大学院大学実務教育研究科准教授）

Atsushi IKARASHI (School of Professional Education, The Graduate School of Information and Communication)

Takao TOMONO (Associate Professor, School of Professional Education, The Graduate School of Information and Communication)

日本では「依然、約7割の企業で海外事業に必要な人材が不足」（総務省、2017）しており、グローバル人材の育成は急務である。本発表では、大学入学まで海外や外国人と縁のなかった筆頭発表者(五十嵐)自身を研究対象とし、グローバル人材化のプロセスについて検討する。具体的にはまず、成人前後から東南アジア現地企業への転職、現在（外資日本法人代表）に至るまでを、特に転機になるエピソードや経験を中心に言語化する。その上で、複線径路等至性モデリングを用いて自己の変容プロセスを描く（Auto-TEM）。Auto-TEM 分析を通じて外国人上司／部下／同僚と働く過程で、なにを経験し、学び、行動してきたかを検討し、自己認識や心理的变化がグローバル人材としてのキャリア発達に与えた影響についても考察する。特に、日本人が1人またはごく少数という環境から、適応力と差異化というキャリア形成の重要性に気づき、内省し、選択肢を考え、行動する過程を明らかにする。

B2-6

**ワールドカフェの席替えが対話過程に与える影響に関する研究——発話の傾向の変化に着目して**

**Research on the impact of “move to other tables” on the dialogue process in the World Café: Focusing on changes in speech tendency**

田坂 逸朗（青山学院大学大学院社会情報学研究科）

Tasaka Itsuo (Aoyama Gakuin University Graduate School of Social Informatics)

本研究は、実際のワールドカフェ導入事例を追い、普及しつつあるこの大規模会話手法（ホールシステム・アプローチ）が、そのプログラムにおいて、その特徴である“席替え”（move to other tables）を通してその相互行為をどう変化させ、対話過程に影響を与えているかを明らかにする。現場で行われた実際のワールドカフェ事例の談話に着目し、そのやりとりを分析し、どの段階でどのような影響があったか、コミュニケーションの変化について検討した結果、発話の傾向は、席替えを契機としながら、ラウンド遷移とともに変化していることがわかった。この、最初のラウンドの、主張に即応した評価などの即断的なやりとりから、体験提供などの間接化された発話を通して、最終ラウンドでは、創発連鎖の発話が増加するといったコミュニケーションの変化は、“他花受粉”と呼ばれるワールドカフェの対話過程の帰結であり、これを記述するラウンド遷移分析のコーディングは、これからのワールドカフェ研究の可能性を開くものである。

B3 口頭発表 10/24 10:45-12:45 Zoom Room 3  
(座長：勝谷紀子、竹下浩)

B3-1

**「聞こえにくさをかかえて生きる」の変容過程(2)：計量テキスト分析によるインタビューデータの検討**

**Transformation process of “Living with hearing loss” (2): An examination of interview data using quantitative text analysis**

勝谷紀子 (北陸学院大学人間総合学部社会学科)

Katsuya Noriko (Integrated Human Studies, Hokuriku Gakuin University)

本発表は、勝谷(2020)に続き、難聴を引き起こす疾患を持つ発表者自身の体験を分析する。発表者が DIPEX-Japan による「障害のある学生・研究者が置かれる科学教育環境に関するインタビュー調査」に答えた際のインタビューデータを使用して計量テキスト分析により分析した。インタビューでは、難聴が判明して障害を持つ研究者となった現在に至るまでの経過を回答した。インタビューデータの分析手法については川端(2021)を参考にした。頻出語は、思う、自分、悪い、分かる、言う、人、問題、ない、使う、等だった。語りのテーマでインタビューを分けた上で語の共起関係を探る共起ネットワーク分析を行った。最終診断までの経過の語りでは、耳や声、聞き取るといった語が出現するが、診断後の経過の語りでは補聴器、お願い、音声認識アプリ名が出現し、配慮や支援への言及がなされた。聞こえにくさの対処の語りでは耳、悪い、言うなど障害開示に関わる語が出現した。

B3-2

**視覚障害者向けシエマ習得訓練教材の開発**

**Development of schema acquisition training materials for the visually impaired**

竹下 浩 (筑波技術大学)

Hiroshi Takeshita (Tsukuba University of Technology)

近年、パーソナルコンピューターとソフトウェアの進歩により、視覚障害者の事務系職種における就労及び活躍への期待が高まっている。その一方で、担当できる職務を増やすには就労スキルの発達が必要で、特に概念的スキルについては具体的な躰きポイントとそれに合わせた訓練方法が未着手であると指摘されている。そこで本研究では、事務系職種で働く当事者 15 名と上司 17 名に対する質的分析データから、概念的スキルの躰きポイント(未獲得のシエマ)を抽出した。分析の結果、未獲得のシエマには、認知的な視点を他者に拡張すること(「段階的な俯瞰」)、ストリング情報処理に伴う冗長な表現を簡明にすること(「取捨選択と再構成」)、複数タスクの同時遂行を可能にすること(「複数対象の同時把握」)が含まれていた。各ニーズに合わせて開発した教材(汎用性を得るため表計算ソフトを流用した)を調査協力者に提示し、得られたフィードバックを考察する。

B3-3

### **精神疾患を持つクライアントの主体性を支えるもの**

#### **Underlying factor of identity in client with mental illness**

管生聖子（大阪大学大学院人間科学研究科）

Shoko Sugao (Graduate School of Human Sciences Osaka University)

【目的と方法】精神疾患を有する人々が、新たなことに取り組むためには、本人の意思や状態はもちろんながら、複層的サポートが必要となることが多い。本報告では、精神疾患を持つクライアントが海外の精神科病院を視察する「海外研修」に参加したプロセスを複線経路・等至性アプローチによる分析を用い、クライアントにとっての体験の在り方を明らかにすることを目的とする。調査協力機関と大阪大学大学院人間科学研究科教育学系倫理審査委員会の承認(No. 20019)を得た上でインタビューを行い、TEM図に描出した。【結果とまとめ】等至点へ向かう経過では、海外研修に直接的に関連しない日常生活での安心感が先立ち、家族の意見、研修先の情報の質、とりわけ「居られる」安心感は重要なものとして語られた。また、TEM図を確認してもらった後から、C1.に「未来を見る」動きが日常の中に現れたことが心理臨床面接の中で語られた。

B3-4

### **心理的虐待を経験した若年成人による経験の意味づけに関する研究**

#### **How young adults who have experienced emotional maltreatment construct the meaning of their experience ?**

東菜摘子・石川恵太・大賀真伊・黒沢拓夢・滝沢龍（東京大学大学院教育学研究科）

Natsuko AZUMA, Keita ISHIKAWA, Mai OHKA, Takumu KUROSAWA, Ryu TAKIZAWA

(The University of Tokyo, Graduate School of Education)

本研究は、過去に心理的虐待を経験した若年成人のこれまでの人生の語りから、自らの経験がどのように意味づけられ、現在までどのような影響を与えてきたのかを検討するものである。特に本発表では、当事者1名の暫定的な分析結果に注目する。合計2回のインタビューを行い、1回目ではライフラインを描画し、これに沿って自由に語ってもらいライフストーリーインタビューを実施し、2回目では1回目の内容について詳細を聞いた。その結果、父親からの虐待経験が、人生で大切にしている考え方の原点となり、これをきっかけに形成された価値観が後の生き方に影響を与えていることが明らかになった。今後は、虐待経験から人生の中心となる価値観を見出すことが、他の当事者にも生じることなのかを検討するとともに、このような価値観を認めた場合には、その背景にはどのような要因が関わっているのかを検討していく必要があると考えられる。

B3-5

**特別支援学校の教師は、「障害受容」をどのように用いるか？**

**How Do Teachers at Schools for Special Needs Education Use “Disability Acceptance”?**

生田邦紘・赤木和重（神戸大学大学院人間発達環境学研究科）

Ikuta Kunihiro・Akagi Kazushige (Graduate School of Human Development and Environment, Kobe University)

本研究の目的は、特別支援学校高等部の教師が、軽度知的障害のある青年を教育する上で「障害受容」という概念をどのような意味で用いているかを明らかにすることにある。教師が用いる「障害受容」の意味と構造について、具体的なエピソードから仮説生成することで、障害受容の難しさに苦悩する軽度知的障害のある青年を支援する具体的示唆を得ることを目指す。研究対象は、特別支援学校高等部を4年以上経験した現役教師20名であった。2021年7月下旬から一対一の半構造化面接を行った。分析方法は、M-GTA、SCAT、ナラティブアプローチのいずれかを採用する。質問項目として、障害受容が難しいと感じたエピソード、その事例の経過、障害受容した状態のイメージなどを尋ねた。その結果、「障害受容が難しい」と感じた事例については、教師間に共通認識があるが、「障害受容の変容プロセス」と「障害受容した状態」は教師ごとに異なる認識を持っていることが示唆された。

B3-6

**インクルーシブ保育実践から考える小学校の「交流及び共同学習」**

**Implications of Inclusive Preschool Practices for “Exchange and Joint Learning” in Elementary Schools**

司城 紀代美（宇都宮大学大学院教育学研究科）

SHIJO Kiyomi (Graduate School of Education, Utsunomiya University)

障害のある子どもと障害のない子どもが触れ合い、共に活動する「交流及び共同学習」は、障害のある子どもの積極的な社会参加につながり、子どもたちが、人々の多様な在り方を理解する基盤となる。一方で、小学校等の通常の学級と特別支援学級との間で行われる「交流及び共同学習」においては、学習の目的を共有する難しさや、教師の負担感など、様々な課題が挙げられている（田村・川合、2018など）。本研究では、インクルーシブな保育実践のプロセスを分析し、その中で、小学校での「交流及び共同学習」に生かされる観点を抽出した。そこから「交流及び共同学習」のあり方について改めて検討したところ、授業や活動の中で多様な表現方法を使うこと、共有できる「場」を設定しそこでつながることができる教師の働きかけを行うこと、特別支援学級の子どもも含めた学級集団という捉え直しを行うこと等が重要であることが明らかになった。

本研究は、公益財団法人前川財団「2020年度家庭・地域教育助成」を受けたものである。

C1 口頭発表 10/24 14:15-16:15 Zoom Room 1  
(座長：東村知子、鰐坂誠之)

C1-1

**子育てにおける「男の子らしさ・女の子らしさ」をめぐる母親の葛藤と対応：子育て SNS の相談トピックの分析と母親へのグループインタビューから**  
**How Do Mothers Deal with the Conflicts over “Boyishness/Girlishness” in Child-Rearing?**

園部友里恵（三重大学大学院教育学研究科）

相良好美（東京大学大学院教育学研究科）

Yurie Sonobe (Graduate School of Education, Mie University)

Yoshimi Sagara (Graduate School of Education, The University of Tokyo)

本研究では、子育て経験のある母親たちが、就学前までの時期に子どもから「男の子らしさ・女の子らしさ」をめぐる言動、特にジェンダー・ステレオタイプに基づく言動がなされたときや、反対にジェンダー・ステレオタイプに反する選好がなされた場合にいかなる葛藤が生じるのか、またそれに対しいかなる対応をとるのかを明らかにすることを目的とする。方法としては、第1に、匿名相談機能を備えた子育て情報サイトの分析から、ジェンダーをめぐる相談トピックの抽出・分類を行った。第2に、現在幼児及び小学生を育てる母親（調査協力への同意を得られた方々）を対象としたグループインタビューを行い、母親たちのジェンダーをめぐる葛藤およびそれへの対応を分析した。その結果、たとえ母親が「その子らしさ」を重視した子育てをしたいと望んでも、「男の子らしさ・女の子らしさ」という呪縛からは逃れられないことが葛藤を生み出していることが明らかになった。

C1-2

**発達障害のある子どもを育てている養親家族を対象としたペアレント・トレーニングの特徴を抽出するためのビデオ分析の試み**

**An attempt of video analysis to extract the characteristics of parent training for adoptive families raising children with developmental disabilities**

池田友美（摂南大学）、鰐坂誠之（大阪府立大学工業高等専門学校）、古川恵美（兵庫県立大学）、能智正博（東京大学）

Ikeda Tomomi (Setsunan University), Ajisaka Shigeyuki (Osaka Prefecture University College of Technology), Furukawa Emi (University of Hyogo), Nouchi Masahiro (The University of Tokyo)

本研究の目的は、発達障害のある子どもを育てている養親家族を対象としたペアレント・トレーニング (PT) の特徴を抽出するためのビデオ分析方法の確立を目指すことである。養親家族、担当ソーシャルワーカーも参加する PT の様子をビデオで撮影し、3人の研究者で分析した。研究者は、PT のファシリテーター、ビデオ撮影者、PT には参加していないビデオ分析の3名である。PT は7回実施され、すべてのビデオ動画を3人で視聴した。視聴しながら気になる場面を抽出し、なぜ、その場面や発言が気になったかを議論した。議論の中から、「ほめることへの丁寧な介入」「子どもの育ちをわかっている人の参加の重要性」の2つの特徴を抽出した。多角的に分析を行うことで、養親家族を対象とした PT の特徴を抽出できたと考える。本研究は所属大学の倫理委員会で承認を受け実施した。また、JSPS 科研費 JP18H01001 の助成を受けた。

C1-3

### 文献調査に基づく「試し行動」に関する一考察

#### A study on "Limit-Testing Behavior" based on bibliographic research

鯨坂誠之（大阪府立大学工業高等専門学校）、池田友美（摂南大学）、古川恵美（兵庫県立大学）、能智正博（東京大学）

Ajisaka Shigeyuki (Osaka Prefecture University College of Technology), Ikeda Tomomi (Setsunan University), Furukawa Emi (University of Hyogo), Nouchi Masahiro (University of Tokyo),

里親・養親が子どもを家庭に迎えた際、子どもが過食や拒食などにより、わざと大人を困らせるような「試し行動」をとることがある。本研究では、文献調査に基づき「試し行動」の意味解釈を行い、その考察を試みた。本研究では、家庭養護促進協会大阪事務所発行の機関紙「ふれあい」（2019年1月～12月）を対象文献とし、「試し行動」に関係する14トピックス（総抽出語数6,374語）を分析した。テキストマイニングを行った結果、「試し行動」のトピックスでは「関係づくり」や「関係を築く」といった「関係」を含む語が多く用いられていた。また、試し行動は家庭生活が始まり親子関係が作られていく中で見られること、子どもは里母・養母に甘える赤ちゃん返りを求める傾向にあり出産ごっこを通じて生まれ直すことを望んでいること、親は試し行動により子育てのストレスを感じる人が多いことなどが示唆された。本研究はJSPS科研費JP18H01001の助成を受けている。

C1-4

### 幼稚園4歳児の遊びにおける交渉の発達：対人葛藤場面に焦点を当てて

#### The development of negotiations in kindergarten 4-year-old play: focusing on interpersonal conflict situations

松原未季（日本学術振興会特別研究員PD・関西学院大学）

Miki Matsubara (Fellowships from Japan Society for Promotion of Science/Kwansei Gakuin University)

本発表では、幼稚園4歳児の対人葛藤場面において、幼児が、保育者の援助や非当事者の幼児による介入を活用しながらいかに交渉を発達させるのかということをも明らかにすることを目的とする。その手法として、幼稚園4歳児クラスを34回観察し、幼児による交渉事例について、カテゴリーのコーディング及び事例の解釈的分析を行った。4歳児前半では、非当事者の幼児が介入しても相手に自分の意見を主張し続けたが、保育者の援助によって一方的な主張を切り替えて、正当な理由を説明したり、妥協や譲歩をしたりするようになった。4歳児後半になると、保育者の援助だけではなく、非当事者の幼児の介入によって、葛藤で興奮した情動を沈静化させたり、交渉方略を切り替えたりするようになった。このように、4歳児は、保育者の援助や非当事者の幼児による介入に支えられながら、交渉方略を切り替えたり、多様な方略を用いて交渉するようになり、交渉能力を高めた。

C1-5

### **保育実践における価値調整と価値判断の実際**

#### **Value adjustment and value judgment in early childhood education practice**

東村知子（京都教育大学教育学部）

Tomoko Higashimura (Faculty of Education, Kyoto University of Education)

保育行為は何らかの「価値」に媒介された行為であり、保育行為に伴う「価値判断」は、一人一人の子どもや一つ一つの場面に応じて精妙に調整しながらなされている（戸田，1999）。また、価値はそれ自体、関係の中で作られ、維持され、作り替えられていくものである（ガーゲン，2020/2009）。本発表では、保育観察と保育者（養護教諭や支援員も含む）のインタビューから得られた事例について、実践の中での価値調整と価値判断がいかに行われているかを明らかにする。価値の問題に直面する際、保育者は困難や葛藤を感じることも多いが、そうした葛藤を通じて価値が作り替えられたり、新たに生まれたりするのではないか。具体的な事例として、5歳児クラスの子ども同士をつなぐ担任保育者の関わりと、病気により運動制限を必要とする一人の幼児に対する支援の二つを取り上げる。なお、研究の実施と発表にあたっては、幼稚園および保育者の許可を得ている。

C1-6

### **育児困難場面における母親のしつけの構造**

#### **How do mothers discipline their children when they do not listen to them?**

石井佳世（熊本県立大学），石井宏祐（佐賀大学）

Kayo ISHII (Prefectural University of Kumamoto), Kosuke ISHII (Saga University)

国の施策である「健やか親子 21」の重点課題として「育てにくさを感じる親に寄り添う支援」が設定されており、育児困難感をもつ親への支援は社会的に重要である。本研究では育児困難場面における未就学児の母親のしつけの構造について検討することを目的とする。未就学児の母親を対象に「子どもが言うことを聞かないときの対処法」（自由記述）についてウェブ調査を行い295名の回答を得た。得られた内容についてKJ法を参考にして分析を行った。意味を持つ文節ごとにカード化し得られた343枚のカードのうち内容不備等を除き312枚のカードを対象として分析した結果、36の小グループが抽出された。小グループは14の中グループに、さらに【子どもを制御することによる対処】【双方向的な関わりによる対処】【自分の変化を通して対処しようとする】【対処の停止】【注意をそらすことで対処する】【対処することにこだわらないようにする】の6の大グループに整理された。

C1-7

### 里親の子育てレジリエンスの探索的検討

#### Parenting Resilience of Foster Parents: An Exploratory Study

星野 充美（東京家政大学大学院）・平野 真理（東京家政大学人間生活学総合研究科）

Ami Hoshino (Graduated school of Tokyo Kasei) , Hirano Mari (Graduate school of Tokyo Kasei University)

里親には、一般的な養育体験とは異なる特異的な体験や葛藤があることが明らかにされている。本研究では、それらを乗り越える力を「里親の子育てレジリエンス」と定義し、その構成要因探ることを目的とした。【方法】13 里親関係機関を通して里親にアンケート調査を依頼し、回答が得られた 163 名の自由記述を GTA を用いて分析した。【結果と考察】発達障害児の養育を基準に作られた養育レジリエンス尺度の因子と重なる「子どもの特徴に関する知識」「子育て支援」「肯定的な捉え方」の他、里親独自の 카테고리「里親としての覚悟」「里子への思い」などが抽出された。里親として子育てをする上での覚悟や、「里子を助けたい」といった思いが、困難を乗り越える力に繋がっていることが示唆された。結果をふまえ、里親が困難状況を通して獲得しているレジリエンシーや、それを醸成する「思い」を理解することが里親支援において重要な視点になると考えられた。

C2 口頭発表 10/24 14:15-16:15 Zoom Room 2  
(座長：横山草介、石井俊行)

C2-1

**ヴィジュアルナラティブの探求における「視覚的な描写」と「言語による記述」との差異の検討**

**Examining the differences between “visual description” and “language description” in visual narrative studies.**

横山草介 (東京都市大学人間科学部)

Yokoyama Sosuke (College of Human Life Sciences, Tokyo City University)

ヴィジュアルナラティブアプローチにおける理論的な課題の1つに「言語による記述」と「視覚的な描写」との違いについての問いがある。言語による記述と、視覚的な描写との違いは何なのか。あるいはこの問いに関連して、ヴィジュアルナラティブの探求において言語による記述と視覚的な描写との解釈の重心をどのように考えればよいのだろうか。本報告では、保育の担い手が自らの実践において重視していることについて描いた複数のイメージ画を事例に、イメージ画として描かれた視覚的な描写と、当のイメージ画についての言語による解説とを比較することを通して、言語による記述と視覚的な描写との違いについて考察をすすめたい。また、この作業を通してビジュアルナラティブの探求に際して直面することになる両者の解釈における重心についても検討を行いたい。

C2-2

**一人で生活する高齢透析患者の非透析日における熱中症対策の一考察**

**Consideration of measures against heat stroke on non-dialysis days of elderly dialysis patients living alone**

石井俊行 (兵庫大学看護学部)

HYOGO UNIVERSITY Faculty of Nursing

本研究は、一人で生活する高齢透析患者の非透析日における熱中症対策を考察し明らかにすることを目的とした。A病院倫理委員会の承認を得て実施した。同意の得られた患者6名に半構造化面接を行い、分析した。その結果、6名は持ち家に住み、いずれも1週間に3回、4時間、午前の部透析に臨んでいた。熱中症対策として非透析日に「ショッピングモールで対応」は3名、「自宅で環境面を調整」が1名、「特に何もしていない」は2名であった。患者は友人の車に同乗して、ショッピングモールでは友人が集まる、楽しい場所と認識している。自宅で過ごす患者は、透析翌日の疲労が強く外出がなかなか困難な影響より環境面で調整していた。「特に何もしていない」患者の場合、独居であること、室内で重篤な熱中症の危険性も高く、地域、多職種連携の重要性が明らかとなった。

C2-3

### **ACP(アドバンスケアプランニング)の促進要因と阻害要因についての考察**

#### **Facilitating Factors and Inhibiting Factors of ACP**

金城総 (医療法人財団 董仙会 恵寿総合病院 リハビリテーション部)

Osami Kinjyo (Keiju Medical Center)

平成 30 年 3 月に厚生労働省より「人生の最終段階における医療・ケアの決定プロセス」に関するガイドラインの改定があり、アドバンスケアプランニング (以下、ACP) の概念が盛り込まれた。

ACP を促進する要因と阻害する要因についての研究論文は少ない。その中に大桃 (2018) らの研究がある。その研究では、看護師 26 人の発言を基に ACP を促進する要因と ACP の障壁となる要因について検討を行っている。ただし、それは看護師らの発言を基に作られた ACP を促進する要因と障壁となる要因であり、患者の発言を基にしたものではない。そのため、本研究では患者の視点に立った研究を行うため、研究対象を治療継続困難で余命宣告された入院患者 1 名とした。調査機関は 2017 年 12 月～2018 年 1 月。方法としては、患者の発言記録から ACP を促進する要因と ACP を阻害する要因を分析した。

C2-4

### **インタビューにおいてインタビュイーはどのようにセルフ・ナラティヴを語り始めるのか——インタビュアーの「私」の問いが「私たち」の問いになるプロセス**

#### **How does an interviewer start telling his/her self-narrative in the interview? ——The interview process from the inquiry of the interviewer to the inquiry between the interviewer and interviewee**

松尾純子 (千葉県スクールカウンセラー)

MATSUO Junko (School counselor in Chiba prefecture)

原爆の語りの研究は、原爆被害の語りの内容から原爆体験の語り方に移っている。本研究ではまず、客観的に定義された「原爆被害」「被爆者」を語りの内容とし、平和、反戦・反核そしてその継承を〈原爆の語り〉ディスコースとした。そして「原爆体験とは」「被爆者とは」というインタビュアーの「私」の問いがインタビュイーとの「私たち」の問いになる中で、その内容やディスコースを用いた語り方により語りえなくなった語り手の主観的体験がセルフ・ナラティヴとなるプロセスを追った。データ収集法は被爆者 (当時 11 歳, 1.7km 被爆) に対するライフストーリー・インタビューである。分析は、他者との対話の中で体験がセルフ・ナラティヴになるプロセスをブーバーの「我-汝」「我-それ」に対応させて Cooper (2016) が提案した、「I-I」「I-Me」を用いた。その結果、インタビュイーはインタビュアーの問いを自分の問いとしながら体験時の文脈を再演することが明らかになった。

C2-5

### **ひきこもり青年のきょうだいの語りにみるケア体験**

#### **The Care Experiences Through Interviews with Siblings of Hikikomori Youth**

和田美香（神奈川大学人間科学部）

Mika Wada (Kanagawa University Faculty of Human Sciences)

本研究の目的は、ひきこもり青年を抱える家族のなかで、同胞がひきこもるということはきょうだいにとってどのような体験なのかについて、その体験プロセスを明らかにすることである。思春期・青年期に同胞がひきこもり状態にあった、そのきょうだいの語りデータを、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した。その結果、きょうだいは、同胞がひきこもることをきっかけに家族が変化して緊張感を抱いて会話に気を遣い生活すること、家族に変わってほしいという思いと大変さへの共感との間で揺れつつ家族を精神的にサポートすることで自分も辛くなること、家族から距離を置いて自律しながらきょうだいとしての責任感を抱くことを、繰り返し循環するように体験していた。きょうだいがヤングケアラーとして家族のケア役割を果たしていること、家族からの自律が困難な場合は、きょうだい自身のケアが必要になることが示唆された。

C2-6

### **複雑性 PTSD に関連した「むずかしい患者」に関するナラティブレビュー**

#### **A Narrative Review of Studies on “Difficult Patients” Related to Complex PTSD**

白柿綾（聖カタリナ大学 人間健康福祉学部 看護学科）

Shiragaki Aya (Faculty of Human Health and Welfare, Department of Nursing, St. catherine Universty)

日本の医療が病院から地域へと向かう中、精神科を中心に病院で課題となっているのは、さまざまな問題を抱え、援助的な関係が築けないまま治療が遷延化している「むずかしい患者」の存在である。彼らの援助関係が築きにくいという問題の背景に何があるのか、ケアの困難さについて明らかにした研究は少ない。

報告者がこれまでに行ってきた実践をふまえ、文献検索を行ったところ、複雑性 PTSD という診断概念から導き出された「むずかしい患者」特有の困難さは、不安定な愛着パターンによる甘えと攻撃性の入り混じる対人関係が要因であると考えられた。

そこで、本研究では複雑性 PTSD に関連した「むずかしい患者」特有の難しさとケア上の困難は何かをリサーチクエスチョンとし、国内外文献の知見を整理してレビューを行った。

D1 口頭発表 10/24 16:30-18:30 Zoom Room 1  
(座長：川野健治、伊藤翼斗)

D1-1

**記述のチュートリアル性——精神科症例検討会におけるワークに着目して**

**Ethnomethodological findings as tutorial problems: Focusing on Work in Psychiatric Case Study Sessions**

河村裕樹（一橋大学大学院社会学研究科）・杉林稔（愛仁会高槻病院）

KAWAMURA Yuki (Graduate School of Social Sciences, Hitotsubashi University) ・  
SUGIBAYASHI Minoru (Takatsuki General Hospital)

本報告は、精神科における症例検討会を、ワークのエスノメソドロジー（EM）の方法論的態度において記述したデータをもとに、その知見がいかなる意味で参加者たちにとって「チュートリアル」（Garfinkel 2002）たり得るのかを、症例検討会の参加者に対するインタビューなどを用いて、明らかにすることを目的とする。

EMの創始者であるガーフィンケルは、晩年になり、ワークのEM研究の基準として「ハイブリッド性」を提示した。これは「そこでなされている活動の問題と解決方法を記述して提示することで、メンバーが実践について改めて検討し、結果的に社会的課題に対処する方法を編み出すことにも開かれて」（池谷 2019）いる。

それでは、研究の成果を受け取った参加者は、提示された記述から何をどのように受け取り、その記述はどのような意味でチュートリアルたり得ているのだろうか。

本報告では、この点を症例検討会の参加者たちに聞き取り、知見の身分について考える。

D1-2

**研究会の立ち上げと参加を通して質的研究者はどのように熟達したか**

**How qualitative researchers have grown through establishing and participating in their own study group**

伊藤翼斗（京都工芸繊維大学）

ITO Yokuto (Kyoto Institute of Technology)

香月裕介（神戸学院大学）

KATSUKI Yusuke (Kobe Gakuin University)

大河内瞳（大阪樟蔭女子大学）

OKAWACHI Hitomi (Osaka Shoin Women's University)

研究者が質の高い研究結果を生み出すためには、研究者としての熟達が不可欠であると言える。しかし、研究者が実際にどのように熟達するのかに関わる研究は管見の限り見当たらない。そこで発表者ら3名は自身の経験を研究対象とし、「研究者はどのような経験を経て、どのように熟達したか」を明らかにすることを試みた。まず、互いの経験を語り合い、録音・文字化した。そして、全員に共通したものとして、質的研究の研究会の立ち上げと参加の経験を取り上げ、その経験を経てどのように熟達したかを、SCATを用いて分析した。分析の結果、その研究会は、異質な他者との対話の場として機能していることが分かった。発表者らは、そこでの対話を通して自身のパラダイムだけでなく他者のパラダイムをも身体化し、質的研究全体における複数の研究手法の位置づけや関連性を理解していた。これは多声性の獲得であり、質的研究者としての熟達の一つの現れである。

D1-3

**なぜ人々は「レンタルなんもしない人」に依頼するのか？—成員カテゴリー化装置に着目して—**

**Why do people seek help from “a person who do-nothings”? :Membership Categorization Analysis**

藤 杏子（立教大学社会学部社会学科）

FUJI KYOKO (College of Social Sciences, Rikkyo University)

2019年に入り「レンタルなんもしない人」（以下レンタル氏）という男性がテレビに登場するようになった。レンタル氏はTwitter上で開始された「なんもしない」というサービスを1件1万円を提供する個人である。現在まで3000件以上の依頼を受けており、海外ニュースやドラマ化、他にも依頼内容をまとめた書籍が複数出版されている。なぜこのようなサービスが人気を博しているのだろうか。本研究では、このような依頼者と被依頼者の関係性をふまえ、Sacksが提唱した成員カテゴリー化装置の視座からレンタル氏に対する依頼の理由を訪ねたインタビューを分析、依頼者たちがレンタル氏に依頼を行う実際のやり方を明らかにする。この分析を通して、「なんもしない」サービスが求められ、注目されている社会的背景について考察する。

D1-4

**エスノグラフィーによるライフサイクルに応じた身体的リテラシーのニーズ調査——地域に根ざした高齢者スポーツの現場から**

**Ethnographic Needs Survey on Age-Appropriate Physical Literacy towards the Actualization of Community-Based Lifelong Physical Activity for Senior Citizens**

宮原資英（立命館大学生存学研究所, Japan Centre for Evidence Based Practice)

Motohide Miyahara (Ritsumeikan University, Institute of Ars Vivendi, Japan Centre for Evidence Based Practice)

生涯体育・スポーツの実現には、各発達段階において最低限必要な身体運動の“リテラシー”を獲得することが必要であり、このニーズを満たすことで、生涯にわたって身体活動を持続できると考えられる。とりわけ高齢者にとっての身体的リテラシーについては、「目的を定めた活動の追求」と、「人との関わりを重視する指導法」という2つの概念が重要であるといわれる。本研究の目的は、地域に根ざした高齢者のスポーツ活動現場を発掘して短期エスノグラフィーを導入し、活動現場を記述し、ニーズを探索することであった。発掘した屋内ゲートボール場でグランドゴルフをプレーする後期高齢者たちは、高齢者にとって重要であるとされている身体的リテラシーの2つの概念を実現し、未充足のニーズなどないように見えた。しかし、世話役の人との話し合いから、会場へのアクセスのニーズや、60歳以上80歳未満の参加者が必要であるという新しい知見が得られた。

D1-5

### **都筑リビングラボのデザイン**

#### **Design of Tsuzuki Living Lab**

松藤遥香・小池星多・大月智矢・山内響(東京都市大学)

Matsufuji Haruka, Koike Seita, Otuki Tomoya, Yamauti Homare  
(Tokyo City University)

横浜市都筑区では、精神的困難をかかえる当事者、中小企業、NPO 団体、行政、大学がステークホルダーである「都筑リビングラボ」が活動しており、当事者の新しい働き方を検討している。本研究では、都筑リビングラボの活動に参加してフィールドワークを行い、各ステークホルダーの関係性の変容を考察した。今回は「健常者」「障がい者」の交流を目的とした2回のオンラインワークショップの各場面を通して参加者の会話の分析を行なった結果、以下のような場面があった。第1回では、「健常者」が「障がい者」の障害について聞く事で障害が可視化された。また、障がい者の発言について参加者全員が否定しない環境が作られた。第2回では、本を紹介するという活動においては、障がいは可視化されることはなかった。このようにワークショップの中で障がい者が可視化、不可視化され、「健常者」「障がい者」の境界は揺れ動くことがわかった。

D1-6

### **自殺を美化するディスコース（2）—文化産物の再現構造分析**

#### **Discourses that glorify suicide (2) – Representation Structural Analysis of Cultural Products**

川野健治(立命館大学)

Kenji Kawano (Ritsumeikan University)

日本に自殺に許容的な文化があるのなら、それはどのような構造を備えているだろうか。本報告では山椒大夫をとりあげ、曾根崎心中(川野, 2017)と比較した。芸術作品を許容されてきた文化産物 cultural products (増田, 2011) とみなして、芸術作品群を扱うディスコース分析である再現(representation)構造分析を行う。基本になるスクリプトを①森鷗外(1915)の『山椒大夫』と定め、①その原型とされる説経節の「五説経」の演目の一つ『さんせう太夫』(元禄初年頃の刊行)、②溝口健二(1954)の映画『山椒大夫』等の相互参照性の高い作品群において、安寿の入水自殺がどのような創意(加筆、削除、演出等)の下で描かれているかを検討した。①では姉の安寿が弟の厨子王を一人逃がして、折檻によって殺されるのに対して、①②では安寿は沼に入水自殺したとされる。曾根崎心中と共通する創意として、①では信仰の下の美化、②では安寿を妹にした上で、兄に献身するという栄光化がみられた。

D1-7

**昆虫採集活動のエスノグラフィ：道具利用と主体性の観点から**

**Ethnography of Insect Collecting Activities: From the Perspective of Tool Use and Agency**

阿部 廣二（早稲田大学人間総合研究センター）・大山 星馬（青山学院大学大学院社会情報学研究科）

Koji Abe (Advanced Research Center for Human Sciences, Waseda University) ,  
Ooyama Seima (Graduate School of Social Informatics, Aoyama Gakuin University)

昆虫採集家たちの採集現場のフィールドワークで得られた知見について報告する。ここでの昆虫採集家とは、1) 学術目的／趣味目的問わず、2) 標本作成の目的で昆虫の採集を行う者たちのことを指す。先行研究により、専門家の主体性は、現場にあるモノや活動との相互作用でダイナミックに形成されていくことが指摘されている（Latour, 1987; Callon, 2004）。例えば、松浦・岡部（2014）によれば、コスプレファンたちの道具（人工物）のあり方が、当人たちのコスプレへの動機・欲求に深く関与していることを指摘している。しかし、道具および活動の違いから、昆虫採集家はコスプレファンたちとは異なる形の主体性を有するようと思われる。そこで本研究でも主体性と道具の関係の焦点を当て、フィールドデータを通して昆虫採集家たちの主体性を可視化することを試みる。なお、倫理的手続きとして、研究に際して参加者たちには事前に同意を得た上、報告内容を確認してもらった。

D2 口頭発表 10/24 16:30-18:30 Zoom Room 2  
(座長：高見仁志、山田美穂)

D2-1

**話し手の説明は聞き手によってどのように意味づけられるのか——一斉授業における話し手の説明過程に着目して**

**How the listener's opinion means the speaker's explanation?:**

**Focusing on the speaker's explanation process in the whole-class discussions**

横山 愛 (お茶の水女子大学大学院)

Megumi Yokoyama (Ochanomizu university)

本研究では、一斉授業において、クラス全体に向けて説明をしている話し手に対して、聞き手が意見を述べることによって、話し手の説明がどのように解釈されていくのかを検討した。小学校2年生の算数授業を対象に、話し手が問題解決方法を説明する際、聞き手が話し手に対してどのような意見を述べ、どのように話し手の説明がクラス全体に共有され、理解されていくのかについて事例分析を行った。分析に当たっては、倫理的配慮として所属大学の倫理審査委員会の承認を得た上で、保護者・学校長から研究の許諾を得た。個人名はすべて仮名である。その結果、話し手が説明しようと具体物を操作している際に、聞き手は話し手が説明しようとしたことについて次々に解釈を述べることで、その内容が共有され、クラス全体に納得されていく過程が示された。最後に話し手自身が自ら再度説明することによって、聞き手から同意を得て、解決方法として位置づけられていた。

D2-2

**コロナ禍において音楽科教師の実践知は変容するか**

**Transformation of practical knowledge of music teachers during the predicament of COVID-19**

高見仁志 (佛教大学)

Hitoshi TAKAMI (Bukkyo University)

筆者は以前、音楽科における教師のライフヒストリー研究に着手した。小学校音楽科において、A教諭の教職生活を調査した。その結果、音楽科における教師の力量形成の構造は、ターニングポイントを経ながらの、「音楽科授業観の萌芽の形成→音楽科授業観の再構成」という過程として説明することができた。この研究の延長線として、この度のコロナ禍に目を転じてみた。2020年から始まったこの困難な状況は、果たして教師達の音楽科授業観という実践知を変容させるターニングポイントとなるのであろうか。この点について、前述の先行研究と関連付けながら論考を試みたい。さらには、音楽科における教師の実践知の再構成とは、音楽の技能的側面、音楽に対する興味・関心の側面のどちらを優先させるのかあるいは調和させるのか、併せてそこに他の観点をも加えるのか否かというような「複合的なテーマの組み替え作業である」という命題についても再検討したい。

D2-3

### **ナラティブ構造分析を用いた第二言語話者の排除とその不快感の探究**

#### **Using Narrative Structural Analysis to Explore Second Language Speakers' Exclusion and Their Discomfort**

清田 顕子 (早稲田大学大学院教育学研究科)

Akiko Kiyota (Graduate School of Education, Waseda University)

第二言語での会話場面では、自分が会話に含まれていないと感じたり、ついていけず疎外感を感じたりすることがある。Duff (2010)やMorita (2002, 2004, 2009)は、「排除」と「不快感」という概念を使って第二言語話者が抱える困難を訴える。しかし、排除がどのように起こるのかミクロ分析した研究は少ない。そこで本研究は、第二言語として英語を学習中の大学生が自分より高い言語習熟度を持つ話者(第一言語話者を含む)らとの討論で経験する排除と不快感を考察した。インタビューでのナラティブをテーマ分析したほか、Labov (1972)の構造コーディングを応用した Riessman (2008) の構造分析を行い、語りがどのように組み立てられ、意味が形成されているか分析した。授業観察データと分析焦点者の日誌もあわせ多角的に分析した結果、言語能力の相対的な不足が不利な立場を作り、それが討論からの排除を招き、不快感を生む様子が明らかになった。また、排除は意図せず共同構築されていたことも示唆された。

D2-4

### **ソマティック・エデュケーションを実践する教師の身体知：協働的インタビューとムービングTAEを用いた言語化の試み**

#### **Teacher's Embodied Intelligence in Somatic Education: Verbalization using Collaborative Interview and Moving TAE Steps**

山田 美穂 (お茶の水女子大学基幹研究院), 橋本 有子 (お茶の水女子大学教学IR・教育開発・学修支援センター)

Miho Yamada (Faculty of Core Research, Ochanomizu University), Yuko Hashimoto (Center for Institutional Research, Educational Development, and Learning Support, Ochanomizu University)

本研究の目的は、ラバン/バーテニエフ・ムーヴメント・スタディーズ/システム(LBMS)をベースとした身体教育を実践する教師(連名発表者)が演習授業において感覚的に活用している「身体知」の構造と内実を言語的に描写し提示することである。身体的体験の言語化という困難な課題に取り組むため、筆頭発表者との協働的インタビューを5回実施した後、GendlinのTAEステップに身体的ムーブメントを組み合わせた分析セッションを6回行った。インタビューを通して、授業の中核には連名発表者が「マール」と呼ぶ身体全体での学習体験があることが、その成り立ちや教授法も含めて語られた。TAEステップでは授業中の教師としての内的感覚がさらに探索され、「新しい生きた感覚」「アクティブに関わる私のからだ」「アクティブに関わる学生のからだ」「招待された世界」「循環」「その場」をキーワードとする理論が生成された。

D2-5

### 児童の幸福の認識に関わる問題への質的アプローチ

#### A qualitative study to matters related to children's perception of well-being

小嶋佑介（淑徳大学大学院総合福祉研究科）

Yusuke Kojima (Graduate School of Integrated Human and Social Welfare Psychology, Shukutoku University)

中坪太久郎（淑徳大学総合福祉学部）

Takuro Nakatsubo (College of Integrated Human and Social Welfare Studies, Shukutoku University)

児童期の幸福感については、その重要性が指摘されている一方で、測定に関するコンセンサスが得られていないことが指摘されている（Liddle & Carter, 2015）。本研究では、児童が自身の幸福感を認識・評価する際に生じる問題について、探索的に検討を行った。300名の児童（小学5、6年生）を対象に、3つの自由記述式の質問を設定したインターネット調査を行った。そのうち21名の参加者が、いずれか1つの質問に対して「わからない」「ない」等の回答を行ったため、これらの参加者のその他の回答（残り2つ）を分析の対象とした。回答間の結びつきの意味や形式を抽出したところ、5パターンの回答間のつながりがあることが見いだされた。これまで児童期の幸福感の測定の難しさについては、認知発達の観点からの指摘がされているが、本研究の結果からは、幸福の感覚そのものに対して児童が思考する際の具体的困難について、仮説的に指摘することができると考えられた。

D2-6

### グループ学習におけるリフレクション活動の方法 —開始部に着目した相互行為分析—

#### The Method of Reflective Activities in a Group Learning: Interaction

#### Analysis Focusing on the Starting Section.

竹田 琢（青山学院大学社会情報学研究科）

Taku Takeda (Aoyama Gakuin University, Graduate School of Social Informatics Human Innovation Course)

近年、価値観が多様化した現代社会の中でリフレクション（reflection）という概念が注目されている。本研究では、リフレクション活動の参加者たちがグループにおけるリフレクションどのように作り上げるのか、その方法と参加者の行為上の課題を明らかにすることを目的とする。これは開始にこそ、リフレクション活動の作り方の問題が集約されていると考えられるためである。本研究では、関東の私立短期大学で開講されたある授業を受講する学生が、授業の取り組みについてグループでリフレクション活動を行っている場面を対象として、相互行為分析を行った。分析の結果、参加者たちがリフレクションをどのように作るのか、それを誰が決定するのか、誰がリフレクションを始めに開始するのか、どうやって開始するのか等の課題があると考えられる。考察として開始のやり方に注目することで、学習者のアイデンティティに関係する可能性について述べる。

D2-7

**多様な言語文化的背景を持つ児童と日本人児童の人間関係形成：小学校における特別活動の考察**

**Building Social Relationship among Japanese Children and Culturally and Linguistically Diverse Children: A case study of Tokkatsu at a Japanese Elementary School**

宗像晋路（早稲田大学教育学研究科）

Shinji Munakata (Graduate School of Education, Waseda University)

学校や学級文化を形成する「特別活動」には、仲間が互いを支え合う温かい雰囲気、すなわち支持的風土（相原・新富・南本 2010）が不可欠である。一方、昨今増加する多様な言語文化的背景を持つ児童生徒の視点から、日本の学校文化の抑圧性が指摘されている（志水・清水, 2001；児島, 2006；恒吉, 2008）。しかし、彼/彼女らと日本人児童たちとの人間関係がどのように形成され、支持的風土が醸成されるのかを考察した研究は少ない。事例研究である本研究は、ある学級の「特別活動」において、その内実を双方の視点から考察した。データの分析には、エスノグラフィーを援用した（箕浦, 2011）。分析の結果、「特別活動」の諸活動において支持的風土の要素が確認されたが、その場限りの固定化された関係に留まっていることが明らかとなった。本研究によって、多文化主義の視点からの「特別活動」の捉え直しの可能性が浮き彫りとなった。

# 日本質的心理学会第18回大会 with ソウル実行委員会

## 大会実行委員長

伊藤哲司（茨城大学）

## 実行委員（順不同）

能智正博（東京大学）（副委員長）

呉宣児（共愛学園前橋国際大学）（副委員長）

中坪太一郎（淑徳大学）（事務局長）

金智慧（早稲田大学）

杉浦彰子（茨城大学）

土元哲平（立命館大学）

小松藍生（放課後等デイサービスアミティエ東苗穂）

川本静香（山梨大学）

滑田明暢（静岡大学）

神崎真実（立命館大学）

荘島幸子（帝京平成大学）

市川章子（一橋大学）

沖潮満里子（湘北短期大学）

安田裕子（立命館大学）

田垣正晋（大阪府立大学）

野村信威（明治学院大学）

尾見康博（山梨大学）

サトウタツヤ（立命館大学）

## 広告（順不同）

北大路書房

クロス・マーケティング

新曜社

北樹出版

ちとせプレス

日本質的心理学会第18回大会 with ソウル プログラム抄録集

発行日：2021年10月23日

発行者：日本質的心理学会第18回大会実行委員会

# 北大路書房

〒603-8303 京都市北区紫野十二坊町12-8

☎ 075-431-0361 FAX 075-431-9393

http://www.kitaohji.com

## 語りから学ぶ法社会学

一声の現場に立ち会うー 西田英一著 A5・208頁・定価2750円 東日本大震災での大川小学校津波訴訟、職場喫煙問題、女性と育児と仕事をめぐる問題、リンチ殺人事件の被害者遺族と加害者の関係などのリアルな語りを手がかりに、当事者の視点から法と社会の関わりを考える法社会学の実践教材。

## ナラティブ・メディスンの原理と実践

R. シャロン他著 齋藤清二, 栗原幸江, 齋藤章太郎訳 A5上製・544頁・定価6600円 ナラティブ・メディスンは、全ての診療において必要とされる「語る」と「聴くこと」から生まれる感情と間主観的関係の重要性を強調する。医療者のための全く新しい教育法の全貌が、今ここに明らかにされる。

## みんなのスピリチュアリティ

ーシシリー・ソンドース、トータルペインの現在ー A. グッドヘッド, N. ハートレー編 小森康永他訳 四六・376頁・定価4290円 ホスピスはいつか死にゆく人とその家族を支えるのか? ホスピスで長年働いてきた医療者やボランティアがスピリチュアリティをどう理解してきたのか、自身の経験を交えながら率直に語り合う。

## Journey with Narrative Therapy ナラティブ・セラピー・ワークショップ Book I

ー基礎知識と背景概念を知るー 国重浩一著 日本キャリア開発研究センター編集協力 A5・312頁・定価3080円 熟練ナラティブ・セラピストによるワークショップを再現するシリーズ第一弾。基本的知識や背景をわかりやすく初学者に向け解説。ワークによる実践の具体例やデモも一部掲載し、参加者の声も多数紹介。

## 声の法社会学

西田英一著 A5上製・256頁・定価5500円 紛争、問題解決場面や乗り越えの過程で〈声〉はどんな働きをするのか。〈声〉が〈法〉と、身体が規範・文化・制度と、ぶつかり、きしむさまを描こうとしたエスノグラフィカルな考察。声の働き、即ち、本人性、手触り(メタメッセージ)、言葉・物語・意味とのあらい、その記述を試みた苦闘の跡でもある。

## グラフィック・メディスン・マニフェスト

ーマンガで医療が変わるー MK. サーウィック他著 小森康永他訳 A4変形・228頁・定価4400円 グラフィック・メディスンの中核は、健康と病のストーリーテリングであり、患者の複雑な経験を描き出すことにある。マンガを通して、一般患者という概念に抵抗し、矛盾する視点や経験でもって複数の患者を鮮やかに表現するムーヴメントへの誘い。

## 人生の終わりに学ぶ観想の智慧

ー死の床で目覚めよという声を聞くー コーシン・ベイリー・エリソン他編 小森康永他訳 四六上製・464頁・定価5280円 マインドフルネスを含む東洋思想、シシリー・ソンドースやエリザベス・キューブラー・ロス、劇作家デレク・ウォルコットまで、古今東西の42人の「死」と「看取り」についてのエッセイ集。

## ナラティブ・セラピーのダイアログ

ー他者と紡ぐ治療的会話、その〈言語〉を求めてー 国重浩一・横山克貴編著 A5・408頁・定価3960円 日本人の熟練ナラティブ・セラピストによる4つのデモンストレーションの逐語録を、全編収録。各々の対話について、対人援助職の3名が、さまざまな視点で読み解いていく。硬直した支配的な言説に抗して、治療的会話の多様性と可能性を探る。

## 質的研究ハンドブック(全3巻)

N. K. デンジン他著/平山満義監訳 定価5060円~6160円

## 人間科学のための混合研究法

J. W. クレスウェル, V. L. プラノ クラーク著/大谷順子訳 定価3630円

## 教育研究のための質的研究法講座

関口靖広著 定価3080円

## 質的研究用語事典

T. A. シュワント著/伊藤 勇他監訳 定価3520円

## なるほど! 心理学観察法

三浦麻子監修/佐藤 寛編著 定価2420円

## 〈当事者〉をめぐる社会学

宮内 洋, 好井裕明編著 定価3080円

## 質的データの取り扱い

L. リチャーズ著/大谷順子, 大杉卓三訳 定価3520円

## 心理学マニュアル 観察法

中澤 潤, 大野木裕明, 南 博文編著 定価1430円

## ナラティブ・アプローチの理論から実践まで

G. モンク他編/国重浩一, パーナード紫訳 定価2860円



ネットリサーチ会社の実績を生かした調査  
最高の論文には高品質な調査を!

# クロス・マーケティングの 学術調査

アカデミックリサーチ



- ① 学術案件年間**300本以上!**業界最大規模の実績!
- ② 学界に嬉しい!完全カスタマイズ可能な「オーダーメイドアンケート」
- ③ 先生方の望むサービスを組み合わせたオーダープランニング!
- ④ **465万人超!**業界最大規模のアクティブパネル
- ⑤ 海外データも回収できる!**マルチカントリー(複数国)調査も可能!**

ご相談、御見積り依頼はこちら

**担当：学術担当部**

☎ **0120-198-022**

✉ [academic@cross-m.co.jp](mailto:academic@cross-m.co.jp)

日本質的心理学会 会員限定 電子版を除く全書籍 **15%OFF** [ご注文はこちら](#)

2021年11月末日まで

新刊 各書籍の詳細は書名をクリック!

## ワードマップ科学技術社会学(STS)

テクノサイエンス時代を航行するために

日比野愛子・鈴木舞・福島真人 編

新刊



四六判並製 200 頁  
定価 2,530 円 (税込)

現代社会はテクノサイエンスからできている。その迷路に切り込むための最先端の手法、科学技術社会学 (STS) のエッセンスを自然、境界、過程、場所、秩序、未来、参加という 7 つのキーコンセプトで、理論と実践の両面からひも解く。

## グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた研究ハンドブック

戈木クレイグヒル滋子 編著

新刊



A5 判並製 192 頁  
定価 2,310 円 (税込)

グラウンデッド・セオリー・アプローチは解説書も多いが、学ぶことと実践の間には大きな隔りがある。本書はGTAの基礎を学んだ人が実際に用いる際のサポーターとなるよう、研究事例で留意点を懇切に解説した、実践的ハンドブック。

## 心理学理論バトル

心の疑問に挑戦する理論の楽しみ

繁樹算男 編

新刊



四六判並製 232 頁  
定価 2,530 円 (税込)

スポーツも学問も、良いライバル関係あってこそ進歩が生まれる。心理学の最先端をゆくホットなテーマを、理論や仮説、その解釈の対立関係という視点からわかりやすく紹介し、心の謎に迫る。一般的なテキストにはない、心理学の楽しさを味わう一冊。

## 明日からネットで始める現象学

夢分析からコミュ障当事者研究まで

渡辺恒夫

新刊



四六判並製 224 頁  
定価 2,310 円 (税込)

現象学は難しそう? いえ、自分自身の体験世界を観察してその意味を明らかにする身近な学問なのだ。明日の朝から夢日記を付けてウェブにアップ! ネットの「コミュ障」の相談事例に挑戦! 予備知識なしに現象学するための、画期的手引き。

### 質的研究関連書

## ワードマップ質的研究法マッピング

特徴をつかみ、活用するために

サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実 編

四六判並製 292 頁・定価 3,080 円 (税込)

## 良質な質的研究のための、かなり挑発的でとても実践的な本

有益な問い、効果的なデータ収集と分析、研究で重要なこと

D. シルヴァーマン/渡辺忠温 訳

A5 判並製 240 頁・定価 2,860 円 (税込)

## ワードマップ現代看護理論

一人ひとりの看護理論のために

西村ユミ・山川みやえ 編

四六判並製 288 頁・定価 3,080 円 (税込)

## 自傷行為への学校での対応

援助者と当事者の語りから考える

坂口由佳

A5 判並製 280 頁・定価 3,960 円 (税込)

## 質的心理学研究 第20号

特集 プロフェッショナルの拡大、拡張、変容

日本質的心理学会 編

B5 判並製 360 頁・定価 4,180 円 (税込)

## 質的心理学辞典 電子書籍あり

能智正博 編集代表

香川秀太・川島大輔・サトウタツヤ・

柴山真琴・鈴木聡志・藤江彦彦 編

A5 判並製 432 頁・定価 5,280 円 (税込)

### やまだようこ著作集

(全 10 巻予定)

やまだようこ 著/すべてA5判上製

第1巻 **ことばの前のことば**

うたうコミュニケーション

496 頁・定価 5,280 円 (税込)

第2巻 **ことばのはじまり**

意味と表象

356 頁・定価 3,960 円 (税込)

第3巻 **ものがたりの発生**

私のめばえ

320 頁・定価 3,520 円 (税込)

第4巻 **質的モデル生成法**

質的研究の理論と方法

384 頁・定価 4,290 円 (税込)

第5巻 **ナラティブ研究**

語りの共同生成

504 頁・定価 5,390 円 (税込)

第8巻 **喪失の語り**

生成のライフストーリー

336 頁・定価 4,730 円 (税込)

第10巻 **世代をむすぶ**

生成と継承

344 頁・定価 3,520 円 (税込)

### SAGE 質的研究キット 全8巻 すべてA5判並製

- 1 質的研究のデザイン  
U. フリック/鈴木聡志 訳 196 頁・定価 2,310 円 (税込)
- 2 質的研究のための「インター・ビュー」  
S. クヴァール/能智正博・徳田治子 訳 272 頁・定価 2,970 円 (税込)
- 3 質的研究のためのエスノグラフィーと観察  
M. アングロシーノ/柴山真琴 訳 168 頁・定価 1,980 円 (税込)
- 4 質的研究のためのフォーカスグループ  
R. バーバー/大橋靖史ほか 訳 (※近刊)
- 5 質的研究におけるビジュアルデータの使用  
M. バックス/石黒広昭 監訳 224 頁・定価 2,640 円 (税込)
- 6 質的データの分析  
G. R. ギブズ/砂上史子・一柳智紀・一柳 梢 訳 280 頁・定価 3,190 円 (税込)
- 7 会話分析・ディスコース分析・ドキュメント分析  
T. ラブリー/大橋靖史・中坪太一郎・綾城初穂 訳 224 頁・定価 2,640 円 (税込)
- 8 質的研究の「質」管理  
U. フリック/上淵寿訳 224 頁・定価 2,640 円 (税込)

新曜社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 3-9

TEL 03-3264-4973 (代表) / FAX 03-3239-2958

<https://www.shin-yo-sha.co.jp/>



ご注文・お問い合わせ

[sales@shin-yo-sha.co.jp](mailto:sales@shin-yo-sha.co.jp)

FAX 03-3239-2958

総合図書目録の  
PDFダウンロードは  
こちら!

104

2021

新刊  
21世紀を生きるためのレクソン  
人間と社会の探究のためのレクソン

伊藤哲司著 四六判 1700円

21世紀を生きる私たちにとって必要な社会心理学について、いくつかのトピックスを取り上げながら社会心理学の視座でそれらを捉えつつ、そこで常識とされている見方をずらし、別の見方を提示していき。好評の初版に、人がウソをつくとき／境界・共有地の悲劇／多言語話者など新たな話題を盛り込んだ。



「脱・心理学」入門

10代からの文化心理学 新原将義著 A5判 1800円

心理学的な解釈にあふれた日常世界の「当たり前」を読み解きなおす。素朴な疑問の一言をもとに、それらがいかにか文化的、社会的に構築されたものかをひもときつつ、状況論の視点からあらためて世界を捉えた好著。記憶とは？／コミュニケーションとは？／賢さとは？／自分らしさとは？などのテーマに、バイクやヘビメタ、映画などのユニークな話題から切り込む。



ソーシャル・ファシリテーション

「ともに社会をつくる関係」を育む技法

徳田太郎・鈴木まり子 著 A5判 1600円

ファシリテーションの基本をおさえたうえで、「社会的課題に取り組む」または「へえあいの関係を育む」ような場における「人々の関係や共同行為を支援・促進する」働きを「ソーシャル・ファシリテーション」と定義。その技法を実際の成果例をもとに解説する。オンラインでのポイント紹介もあり、今読みたい書！



好評の既刊  
みるきくしらべる かくかんがえる  
—対話としての質的研究 伊藤哲司著 四六判 1600円

デザイン・リアリティ (増補版)

—集会的達成の心理学 有元典文・岡部大介著 四六判 2200円

2018年センター試験「国語」(現代文・評論)に出題されました。

エピソードでわかる社会心理学 (新版)

—恋愛・友人・家族関係から学ぶ A5判 2100円  
谷口淳一・西村太志・相馬敏彦・金政祐司 編著



北樹出版

〒153-0061 東京都目黒区中目黒1-2-6

TEL: 03-3715-1525 FAX: 03-5720-1488

URL: http://www.hokuju.jp E-mail: eigyo1@hokuju.jp

(価格は税別)

なぜ人は困った考えや行動にとらわれるのか?

存在脅威管理理論から読み解く人間と社会

脇本竜太郎 著  
四六判並製256頁／定価: 2200円



日本の部活(BUKATSU)

文化と心理・行動を読み解く

尾見康博 著  
四六判並製160頁／定価: 1700円



偏見や差別はなぜ起こる?

心理メカニズムの解明と現象の分析

北村英哉・唐沢 穰 編  
四六判並製304頁／定価: 2500円



文化心理学

理論・各論・方法論

木戸彩恵・サトウタツヤ 編  
A5判並製304頁／定価: 2500円



幸運と不運の心理学

運はどのように捉えられているのか?

村上幸史 著  
四六判並製224頁／定価: 1900円



仲直りの理

進化心理学から見た機能とメカニズム

大坪庸介 著  
四六判並製304頁／定価: 2500円



学びを愉しく

〒157-0062 東京都世田谷区南烏山 5丁目20-9  
ハウス・アム・バンホフ 203

株式会社 ちとせプレス

Webサイト: http://chitosepress.com

E-mail: info@chitosepress.com

Tel: 03-4285-0214 / Fax: 03-4243-3725